
Persona 3 F ~After Days~

水素

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Personas ～After Days～

【Zコード】

N8726L

【作者名】

水素

【あらすじ】

15年前、日本中を巻き込んだ同時多発無気力症……その最中全人類の命をかけ『死』と向き合った若者達がいた……

それから10年後本州の北端に有る都市で怪奇事件が発生し巷を賑わせた。

その事件の裏には、ある組織と対人し平穏を取り戻した若者達がいる……

だが彼らは知らない。幾度と無く起きた事件の当事者がまだいることを……

この小説は、アニメ「PERSONA - trinity so ul -」と、「Persona 3」両作の後日談を足し合わせた?ような物です。
誰でも楽しめると思うので、よかつたら田を通してください。

Episode 0 Prologue

（2012年 12月31日）

世間一般の大通りは、新年を一人つきりで過ごすべく時間を浪費している（つぶしている）カップル達と、その余波に乗つかろうと、「大晦日フェア」やら、「新年まで、あと〇時間…」という商店側とでじつた返っていた。

最も、何処も例外は無いのだが…

同日 北陸の新興都市・綾凪市

ここ綾凪市も世間と同じく、歡喜に溢れていた、ただ一部を除けば…

綾凪市・綾凪署

とある一室

一人の男が窓辺に立ち外を眺めている。

「なんだか、外が騒がしいな…」

Episode 1 Reverse

綾凧市・綾凧署

とある一室

一人の男が窓辺に立ち外を眺めている。

「なんだか、外が騒がしいな…」

そう呟いた後、先程まで、掛けていた椅子に再び座り大きくため息を漏らした。

「フー――」

数秒後を見つめた後ゆっくりと目を閉じていく…

『俺達は、なんで立てねえ…』

『ちょっと…まちなさいよ…ねえ』

『行かないで…!』

「……ツ…」

「ガタツ」

「…夢か」

軽く呼吸を整えた後先程まで座っていた机に目を向ける、机上の資料を手に取り軽く漏らす。

「リバース事件か…」（リバース事件

謎の連続猟奇事件。被害者は肉体と皮膚が表裏反転した死体となつ

て発見される。）

この事件自体は、地元のペルソナ使いの少年達によって解決され終息に向かっているのだが…

彼の名前は、真田 明彦 参事官として富房長の命によつて江綾屋署に派遣された。

実際の現場指揮は、彼ではなく綾丘署の署長がやつていたのだが、今はいないので彼が後始末をしている。

P r r r r r r r r r r r r r

Episode 2 An encounter (書きき)

今回は、いろいろな会話が、メインで「」を運用しているので、ちょ
うと読みにくいかもしれません。

Episode 2 An encounter

一通り資料に目を通した後椅子に座ろうと手を掛けた時

P
r
r
r
r
r
r
r
r
r
r
r

室内に電子音が鳴り響いた。

「また、マスクが…いい加減休ませて欲しいものだな」

つぶやきながら受話器に手を掛ける。

「Pmnがチヤはしてから特殊組織犯罪対策…なんだ君か」

なんだと云ふことは、ないでしょ。真田わあ、せうと伊藤さ

この間は涼子が参事官

「頑張つて吹ハ物、

卷之三

「まあ、口で説明してもいいか実際見てもらった方が、早いだろう』

「はい、では後ほど… ガチャ」

少しばかり、先程の会話の内容を、考えていたが結論が出ないと
なると、すぐさま見ていた資料に目を逸らすそのまま、2・3分が

過ぎた頃ドアの方から多数の足音が、聞こえてくる。

『「ンンン』』

「どうぞ」

ノックに対して一声掛けでからドアの方を向く、すると先程の電話相手の一人+一人の少女が入ってくる。

「お待たせして済まない参事官」

「いえ、あと…その子は、いつたい…？」

「ああ、まことに言いにくいくらいだがこの子がその、預かつて欲しい物だ」

「何故私に?迷子なら少年課に」

「普通ならそうするが、面倒な事にリバース事件に関係してるんだ」

「そんな!!事件は、終わつたはず…」

「いや事件に直接関係しては無いんですけど署長のリストに名前が

「柏崎!!急に話しに割り込んでくるんじゃねえとまあこんな感じ

なんだが、引き受けますがか?参事官」

「そういう事情でしたら、引き受けましょ!」

「そう言つてくれて助かる。おい、柏崎 あつはい、えつといつ
ち追いで ジヤ後は、頼みましたよ。 ほら行くぞー。僕まだ一言
しか話…」

刑事課の一人は、用件を済ますと騒がしくも、わざと出でていって
しまった。

(神郷が持つていた適性者のリストか…)

話しに出たペルソナ使いのリストの事を考へていると、視線を感じ
た。

「あつと、ほつとこて悪かつたな……前まへ」

「… 西條 麗奈です」

先程の「ほつとこて」の単語にムシときたが名前を答へる

「やうが、俺は真田 明彦、真田だけひつだ」

「えつとじゅあ真田わざ、これかうよりしふね願いしまや」

「ああ、」

Episode 2 An encounter (後書き)

皆さん、こんにちは。

水素という物です。

次話では、アクション? もといバトルを書いてみよつと想つていますので、生暖かい目で見守ってください。m(ーー)m

ではまた次回で。

Episode 3 Maskd (前書き)

前話の区切り方がへんで文字数が、前話と比べるとかなり多いです
(^_^;)

初心者故のミスなのであまり気にしないでください。

Episode 3 Mask

「えつとじゅあ真田さん、これからようじくお願ひします」

「ああ、じゅうじゅ」

「や」にある、空じてる椅子は、使ってくれて構わない

壁に建てかけてあるパイプイスを田で指しながら言つ。

「えつ…あつはい」

突然無頓着だつた彼が、声をかけてきたので驚いて声を荒げる

「さて、君の預かりを依頼されたのは俺だが正確には「」、綾廬署での預かりとなつてゐる。

なのでここでの寝泊まりはもちろん、警察官の邪魔にならなければこここの施設も自由に使ってくれて構わない。

説明は、以上だ何か質問は?」

「えつ…あつはい特に」

真田の早口と威圧感に押され反応が若干遅れる

「俺は、今晚宿直でここにいる 何かあつたらすぐ飛んで来い」

」の台詞に多少頬が赤くなる。

(や、やっぱ顔が熱い)

そんな」とは知らない真田は、お構いなしに話しを続ける。

「何か他に聞きたい」とは、有るか?」

(来た!!! 助け船)

以外な方からの助け船に驚きながらも乗つかろうと言葉を探す 無論真田は、助け船を出したとは、きずいていない

「え、えと その」

必死に言葉を出さうと奮闘したが出てきたのは、無情にも心とは裏腹な物だった。

「グ――――――」

その擬音が部屋に広がると同時に、頬の赤みが顔全体に広かつた。

「やついえば、俺も腹が減ったな……」

赤面して言葉が出ない麗奈を尻田に話しぶを進めていく。

「よし、行くか」

「えと何処にですか?」

「何処つて食堂に決まっているだろ?」

「え、社員食堂つてもう閉まってるんじや……」

「いや、ここのは特別でな夜中までやつてる」

歩行速度が、速い真田にからづじて、付いていきながら言葉を一、三度交わしていると、食堂に着いた。

ただでさえ夜中の時間帯で暗いのにカウンター席の薄暗い照明しかついてないのでかなり薄気味悪い。

だがそんなことは、お構いなしにカウンターへ近づきやつと座つ

てしまつた真田、慌てて後を追い隣へ座る。
それを確認すると厨房に声をかける

「すみません!」

辺りは、鎮まり帰つている

多少いらっしゃながら先程とは、少し大きな声で再び呼びかける。

「すみません!..」

すると数秒たつてから奥からパタパタと足音が聞こえてくる。

「はーはー、どちらまで?.. あら明彦君夜食かい?」

『どうも、俺はいつもで... と注文決ましたか?』

「えつとこの特製ラーメンで」

「はーよ“特製ラーメン”に“真田スペシャル”ねちょっと待つと
とくれよ」

厨房のおばちゃんは私を疑惑の眼差しで見ていたが隣にいる真田が
割り箸に楽しそうに手をかけているのを見て安心して奥に引っ込んでいた。(今、変な田で見られてたような.. てかそれ以前に“真田スペシャル”って何!?)

隣にいる真田に直接聞けたと思ったが、楽しげに割り箸をいじつて
るのを見てためらつ。

そういうしてゐる内に自分のラーメンが、運ばれてきたのでそれを
口に頬張る。

ふと横を見るとそこには肉うどんの上に牛丼を乗つけたような物を
貪る真田がいた。

「ん、どうした？」

視線にきずいたのか声をかけてきた

「……い、いえ」

だがいろいろな事で、声を失っている麗奈は、一いつ答へるので精一杯だった。

（数十分後）

先に間食した真田は、麗奈が食べ終わるのを見計らって声をかける。

「先に、宿直室に行け、そこなら休めるはずだ」

「真田さんは、行かないんですか？」

「俺は、金を払つてから行く…それに、まだやることが残つている」

そう言つとレジの方へ向かつて行く真田。

仕方ないので言われた通り宿直室に向かうこととする、だがここで一つ重要な事がわかる。

「宿直室つて…何処？」

散々迷つた後たどり着いたのは、最初に真田といた部屋だった。ゆっくりともたれかけつつドアを開けると書類とディスプレイとにらめっこしている真田の姿だった。

「ん？…お前宿直室へ向かつたんじゃないのか？」

「それが、道に迷つて」

半分諦めながら言葉を探す。

「なら、そこのソフナーを使え」

「ありがとうございます、じゃあお言葉に甘えて~」

そういうときなりソフナーに寝転ぶ。

しばらく、それを見ていた真田だがまたディスプレイに視線を戻す。1~2時間過ぎた頃

休もうと、手を置いた時突然バックサイドの窓ガラスから轟音が響き渡る。

「なつ……」

突然の参事に飛びのきながらも体制を立て直し臨戦体制を取る。

「え、…何これ」

さつきまで寝息を立てていた彼女だがさすがに起きる。

「すぐに、ソファーの影に身を隠せ!」

真田の激が飛ぶ。

言われた通りに身を隠し辺りを見渡すと、窓辺に立つ仮面の男と対人している真田の姿があった。

『お前は、何物だ』

「…………」

『どうやつてここ（2階）にきた』

「…………」

『お前の他にメンバーが、居るのか?』

周囲を警戒しながらも矢次に質問をする様は、さすが警察官という

ことだが相手は、無反応な故に仮面のせいで表情が読めない。

۱۶۰

۹۰

「お、女は、何処だ？」

支那の歴史

普段なら白をきるが心当たりが有るのではつたりを噛ませない。

「元々、女が、居ただろ？… そいつを探してる」

警察がそれを難解と思ふが、

数秒後再び声を出す、内容は用意に予想できる。

「力付くで聞き出すまでだ！！」

すると仮面の男は、手に付けていた爪を振りかざした。だがその爪が、食い込む前に真田の右ストレートが、カウンターの要領で男の仮面（顔面）に炸裂していた。

「グオ」

予想外の攻撃によろめく

『そこだ！！』

その隙に男の懷に入り込み漣撃を畳み込む。

「カハツ」

拳の漣撃に耐え切れず壁に倒れる。

『さて……先程の質問に答えて貰おうか』

拳を軽く振り払いながら、男に近づく。

「……クソツ」

がむしゃらに突っ込んでくるが、軽く躊躇一発入れる。

『答える気が無いか……』

そういうと、転がっている男に歩を進める

「ちつ……仕方ない」

そつと窓辺に乗り飛び下りる。

『なつ……逃がしたか』

窓に駆け寄り下を見ると走り去る男が見える。

「カ、カツコイイ~」

思わず本音が、漏れる。

『そつか？まあいい、とりあえずここから出るやー。』

「え、なんで……」

『いいから早くしろー。』

言われた通りに廊下に出て真田と共に走る。

「あの? なんで逃げるんですか? あんな強いのに…」

『あの男がいなくなる時に隣から多数の足音が、聞こえた むそりく相手は、多数だ俺一人じやあ部が悪い』

あの一瞬でそこまで分かるのはさすが警察関係者である。

『…っ俺の後ろに隠れろ…』

そう言ひと、前の通路脇から出た仮面男一人にラリアットを食らわせ薙ぎ倒す。

その隙にさつさと逃げる。

『正面玄関から外に出て、車で逃げるぞ』

そつ言い二人同時に外に出る、あの仮面は、見当たらない。

『チャンスだつ一氣に行くぞ』

3時方向に止めてある車にたどり着く。

「真田さん…! 鍵つ

『…ほらっ』

真田から鍵を受け取り助手席に滑り込む。

『よし…』

「真田さん後ろ…!」

『なつ…クソッ』

その瞬間ドアポケットに忍ばせてある拳銃に手をかけ男の仮面に銃口をたたき付ける。

『…支給品もたまには役立つな』

それだけ言つと運転席に乗り込み車を出した。

Episode 3 Maskd (後書き)

次話は、文字だけでなくページ等できるだけ気をつけるつもりです。

Episode 4 Goddess transmission (前書き)

バトルアクション第一段です。いつもアクションは、書くのが長引いてしまいます、次からはもっと短時間で書けるように頑張ります。

夜中の高速を一台の車が、飛ばしている。

「あの、真田さん……どこに向かってるんです？」

『俺のアパートだ、先程のアレで公共施設は、危険だとわかったからな。』

「はあ、なるほどでもそんなスピード出さなくても…」

運転席前の掲示を見ると130?を越えている。

『ここは、高速だ、問題無いそれに…「それに?」早くあの場から遠ざかりたくてな

「何か理由が、有るんですか？」

『いや特に無いんだが…嫌な予感がしてな

それ以降喋らない真田。

(あまり追求しない方がいいかな)

そう思い麗奈自信も黙っている。

突然麗奈が何かに気づく

「何か音しません？」

『何！？、それは何処からだ！！』

『えつと…後ろの方からだと思います。』

『ちつ、もう来たか…』

何が来たのか聞こうとしたら後ろからの音が大きくなる。

「バルルルルル」

『やはり追つて來たか。』

『やはりって何がですか？』

『おそらくさつきの奴らだ、大方お前を奪いに來たんだろうな。』

『そんな、なんで私が…』

『俺もよくわからないが多分お前の“ペルソナ”に関連している』

「そのペルソナって何ですか」

『ペルソナって単語自体は、心理学用語で「もう一人の自分」って意味だ』

「もう一人の…自分?」

『ああ、だが俺らの知つている意味には、いつもあった「邪悪な物から」を守る精神の鎧』とな。』

「その…ペルソナって物の事は、わかつたんですがなんで真田さんは、私がペルソナ使えるつてわかつたんです?」

『お前が、俺の所に来た時を覚えているか?』

「え、はい」

『その時の会話にリストがどうとか覚えてるか?』
確かそんな会話をしていたようなきがする。

『そのリストは、俺の知り合いが作つた物でなペルソナを使える可能性の有る人物の名前が、書いて有る。』

「なんでそんな物が…」

と言いかけた時銃声が響く

バンッ、ガンッ

「きやあ!!」

いきなりのことで悲鳴を上げる。

『安心しろ! この車は、特別製だ銃弾なんぞへでもない!』 確かに真田の言つとおり弾が当たつている音は、聞こえるが止まる様子はない。

次第に銃声は、止んでいたがそれと入れ代わりに奇怪な触手が、伸びてきた。

『なんだこれは!?』

その触手に驚き一瞬スピードが落ちその隙にバイクが横付けされる。

『くつ…仕方ない』

そつとうとハンドルの反対側に手をかける。

「真田さん何を…」

『頭を抱えて伏せろ!…』

そう怒鳴ると反対側に掛けた手を思いつきり戻す。

すると車体はスピンし横のバイクを蹴散らし急なスピンに避けきれない触手は、契れ飛ぶ。

車が止まるやいなや発煙筒から煙りがでて辺りを満たす。

仮面の男の背中から浮き出るよつた感じの目玉が、再び触手を伸ばそうとした時。

「ガアン！！」

奇妙な銃声と共に煙りの中から古代ギリシャのような格好をした巨人が現れる。

「カエサルツ『デッドエンド』」

その掛け声と共に、巨人が手に持っていた大刀を振りかざし目玉に向かつて振り降ろした。

「バアーン！！」

轟音と共に、目玉のような本体は、碎け血肉が辺りに飛び散る。

「ふん、見かけ通り軟弱だつたな。」

先程の攻撃で一対一は、危険だとわかったのか大人数が集まつくる。

（召喚：イチモクレン…）

仮面という仮面全てからクモヒトデが召喚され辺りは、触手だらけになつた。

「多勢に無勢か確かに不利だな、だが…相手に取つて不足は無い！」

そういうと無謀にも突つ込んでいく。

「うおおおカエサルツ『マハジオダイン』！！」

古代ギリシャを作り上げた皇帝カエサルが、左手を空にかざすと無数の落雷が目の前に落ち、クモヒトデを次々に黒焦げにしていく

「まだだ、『ジオダイン』」

雷の難を逃れた敵にもう一発雷の一撃を浴びせる。
だが最初はイケイケ状態だったが如何せん、敵の数が多くてすぐ
に押され気味になる。

「クツ」

さすがの真田にも焦りが見える。

（召喚…アンズー…）

それに追い撃ちをかけるように新たなペルソナが召喚される。

「クソツカエサル『デッドエンド』」

氣力を込め攻撃を仕掛けるがなんなく交わされてしまつ。

もう一度仕掛けようと召喚器に力を込めるが足がふらついてしまう

「しまつ…久しぶりの召喚のビハインドか。」

直ぐさま体制を立て直したが、アンズーは、的確にその隙をついて
来る。

（…真空破…）

その結果真田は、もろに攻撃を喰らつてしまつ。

「グオ…」

その時召喚器が手から弾かれる。

（しまつた…！あれが無いと召喚が、しかも敵に奪われたらまずい。

しかし、何物かの手が、真田の召喚器に伸びていく。

「…！」こまでか

多分彼は、死を覚悟したのだろうがその召喚器を手にしたのは、
真田でも仮面の男のどちらでもなかつた。

「なつ…麗奈！どうしてお前が。」

真田が声をかけるが、彼女には真田の声も目の前の光景も頭に入つ
てはいなかつた。

ましてや彼女の目には、目の前の物とは別の光景が写つていた。

そこには、何も無い純白な世界が広がっていた…

(ここは何処?)

自分は、その中に浮いていた

(なぜ、私はここに居るの?)

ゆっくりと辺りを見回す、すると田の前にま、周囲と同化するよう

に全身純白の少年が、居た。

(あなたは、誰?)

【僕の……名は……里……】

田の前の少年は、問い掛けに答えてくれたようだがノイズが入つて
聞き取れ無い。

(なぜ、私の前に居るの。)

【君……必要……な】

(どうして、私が必要なの?)

【仲間……助ける……めむ】

だんだんちゃんと聞き取れるようになつてくる。

(どうして私に?)

【君が……番近く……居る……わ……れこ】

(それに?)

【君も彼を助けたいんじゃないの?】

(彼? ……彼とは誰?)

【それは、僕にはわからないだが、君の心がそつと音つてゐる】

(確かに私は、彼を…真田さんを助けたい。

でもどうすればいいの?)

【君は、もう力を持つてゐるはずだ…後は、扉を開けるだけだ】

それを聞いた後右手に違和感を感じる、見るとそこには、拳銃が握
られている。

(え、これってピストル!?)

【それは鍵、君の心の扉を開くためのね

(心の扉…)

【君の想いが、本当になるとき、君の心は力に変わる

(私の…想い?)

【さて、僕ができるのはここまでだ…後は、君自信…決める…な…】

少年の声が、薄れて行く。

気が付けば、先程まで見ていた光景に戻っていた。
(視界の隅には真田が倒れている。)

「真田さん…！」

倒れてる真田に、駆け寄る。

『俺に、構わざつさと逃げる…』

「そんな、真田さんをおいて行けません。」

『何、心配するな俺もしばらくすれば動ける…』

だが明らかに真田が逃げるよりも敵の行動の方が、速いことは明確だ。

(私が…守らなきや)

【彼を助けたいんじゃないの?】

先程の少年の言葉が蘇る、すると右手に力がこもり握っている物を、米囁に持つてくる。

「ペ…ル…ソ…ナ…」

「ガアン…！」

麗奈の体から透明な破片が巻き上がりその破片の中から神々しい女性が浮かび上がる。

『我は、汝…汝は、我。

我、汝の心の海より居出し物なり。

戦塵の女神：イシュタル

「なつ…召喚…したのか

「イシュタルツ『メギド』」

麗奈の召喚したオリエント神話の女神の手に光の球体が、集まりそれを放つ。

周りの魑魅魍魎が一瞬で塵になる。

(次ツ！－！)

「イシュタルツ『ティアラマ』」

目の前の敵が、大方いなくなるのを確認すると、真田に回復魔法をかける。

だが敵も侮れない回復魔法をかける一瞬で、間合いを詰めてくる。
(まずい…やられる！－！)

思わず、目を瞑ると横から拳が、飛んで来る。

目を開けると私に攻撃を仕掛けた男が、倒れている。

「ふん、俺を忘れて貰つちゃ困るな。」

「真田さん！」

「よしつ一気に、たたむぞ召喚器を貸せ！－！」

「あつはい！」

自分も召喚した後真田に召喚器を渡す。

「イシュタル『メギド』」

「力工サル『マハジオダイン』」

双方の雷撃と魔力の球体が根絶し強力な爆発になり周囲の物を消し飛ばす。

「バアアアン」

辺りにまばゆい閃光と爆発音が響き渡る。

その閃光が、晴れると同時に麗奈の体が、倒れる。

「！つ…」

地面に打ち付ける前に真田が受け止める。

「スー…スー…」

(…ほつ、寝てるだけか。)

「まあ、初めてにしてはよくやつたな…」

真田が見る先には、壊れたバイクの残骸と円周上に広がる黒焦げた跡がある。

【さすがに、頑張りすぎなきもするけど…】

Episode 4 Goddess transmission (後書き)

これからは、5話投する「」と、「活動報告を、書けるだけ書いて見
たい」と思っています。

E p i s o d e 5
S · E · S · (前書き)

次話に多分続きます。

「……うーん……ん？」

目が覚めると、麗奈は見知らぬ部屋に居るのに気が付いた。

(ここ…どこ…)

寝ぼけながら辺りを見渡すと、そこは整頓されたリビングでそこに置かれている一対のソファーの一つに自分が居た。

(キレイな部屋…)

ソファーから起き上がり周囲を、物色する…すると一つの棚に目が行く。

(何これ、すごい)

見ている棚の中には、優勝トロフィーと写真、使い古しのグローブが飾られている。

(へー真田さん、ボクシングやつてたんだ…)

軽く微笑みながら、優勝トロフィーを順に見ていくと上方にある三枚の写真に目が行く。

(えつこれ真田さん！？わつか~い)

一枚目の写真には学生服を着た真田と一人の生徒
二枚目の写真には六人の学生に、一人の男性と小学生が混ざっている、小学生の腕の中には、白い犬

計八人 + 一匹が、写っている。

(あれ？最初の目付き悪い人がいない、それに…)

彼女の目は、一人の男子生徒に、向いている。

(この人どこかで、見たような…)

疑問に、思いながら次の写真に目を移す、そこには一枚目のメンバーが黒っぽい服を着て中央のお墓一つを挟むように立ち写真に写っている、ただ一人を除いて…

(あれ？…あの人がない。)

よく見ると全員悲しそうな顔をしている。

(まさか…「この人）

次の言葉を思う前に、後ろから声がかかる。

『おうつ起きたか。』

「うつわーーーー！」

突然、声を掛けられて驚いて、声を上げる。

「はあ、はあ…なんだ真田さんか…びっくりした~」

『…驚きすぎだろ』

「ていうか、真田さんこんな豪華な部屋に、住んでるんですね。」

『…そうか？』

「そうですよ！…だつてカーペットとかソファーとか超豪華な感じも

ないですか！」

いきなり騒ぎ出す麗奈に顔をしかめる真田。

「それに、何ですかこのテレビ・桐条製の薄型なんて高すぎて買えませんよ、普通！！」

リビングデスクの上に置いてある、リモコンを掴み「KIRI-YO O Electronics」の文字を見つけ騒ぎ出す。

『…言いたいことは、それだけか？』

「は、…はい…おかげ様で…すつきりしました。」

『ここにある家具は、部屋に備え付けのもんだ』

「こんな豪華な備え付けって有るんですね。」

『それに、お前の言う通りこの家賃は、大企業の社長しか借りれないレベルだ。』

「真田さん公務員ですよね。」

『なんで借りれるんですか…』

『友人のコネでな格安にしてもうつてる』

『…桐条グループにコネが回るつてどんな友達ですか…』

『まあ、会えばわかるさ…』

『会えばって…会えるんですか…？』

『ああ、そいつもペルソナ使いでな、お前を狙つ組織について助言を貰つつもりだ。』

「あつ…そつなんですか。」

その言動から自分が、まだ狙われてる」とを知り少し暗くなる。

(「のまま、凹んぢや…駄目だよね。」)

そう意識したあと無理にでも明るくする。

「で、そのすごい人とは、いつあえるんです?」

『今からだ。』

「…は?」

『本当なら、もうちょっと早く出たんだが、お前が家具がどうだ家賃がなんだと騒いでいるから…さっと15分オーバーだな』

「ええ…? それじゃあ、相手待たしてるじゃないですか!』

『ああ、集合時間の3分前つく計算だったが…おかげで10分以上遅刻だな。』

「ええ、そんなに…?」

真田さん早く行きましょう、早く』

急いで車に乗り込みマンションを出る。

本当なら15分以上遅刻だがさすがの運転テクで10分台に抑える。
(それでも遅刻)

集合場所 辰巳ポートアイランド ポロニアンモール カフェシャガール

「…明彦は、まだか」

「すぐに、来るんじゃないですか?」

「でも、まだ来る気配もありませんね」

「風花の言つとおりまだ私達の他には、誰もいないよ。」

「珍しいですね、真田さんが遅れるなんて」

「お、やつとお出ましか。」

「ワソツ」

そういうつた会話がなされた後全員が、入口を見る。

「真田さん、こつちつすよー」

『大声を出すな順平！！みりやわかる。』

「あー…確かにあれなら解りますね」

二人が店内に入ると真ん中に陣取った大きいテーブルに、写真で見たメンバーが座っている。

『すまない、遅れた』

「遅いっすよーもうちょっと待つたらただの雑談会になつてたつすよ。」

『残念だが順平、俺らが来てもそれは変わらんぞ。』

「ええ、そーなんすか！」

「まあまあ順平君その辺に…」

「ほら順平！彼女立たしちゃつてるじやん」

『とりあえず座るか』

「そうですね」

そのやり取りを横目で見ながら席につく。

「まずは、こちらから自己紹介と行こつか私は、桐条 美鶴 桐条グループの代表取締役だ」

「代表取締役つて…社長ですか！？」

「次俺な、俺は 伊織 順平 デザイナーを目指して勉強しつつアシスタンントやつてます」

「デザイナーかあ、カッコイイですね。」

「えと、次私？ 私は 岳羽 ゆかり 職業は、桐条グループで事務やつてます。」

「アイギスつて言います 私もゆかりと一緒に事務やつてるの」

「へー…あれ？アイギスさんつて…」

『気づいたか。』

「えつ何がですか？」

『なんだ、気づいてなかつたのか…まあいい、アイギスは人間じやないんだ。』

「えつ！」

「触つて見る？」

「そういうて手を差し延べる。

「あつほんとだ固い」

「なんでさつきあれ？って思つたんだ。」

順平が、横から聞いて来る。

「うーん、なんて言つか…違和感を感じたんですね」

「彼女のペルソナの力か？」

『おそらくは、な』

後ろで、聞こえないように会話をする一人。

「じゃあ次は私だね、山岸 風花です教師やつてるの。」

「へー先生ですか、頑張つてくださいね。」

「じゃあ僕かな、僕は、天田 乾 月光館学園高等部三年生 この子は、『ローマル』

「ワンド」

「高三かあ～私と一緒だね。『ローマル』もよろしくね」

そういつて天田に笑いかける。

それを見て、天田が頬を赤くしそれを順平が、おちょくくる。

「あつれ～顔が赤いぞ～天田君」

「つるさいですよ、順平さん…順平さん前よりアホになりました？」

「なつ…なんだと『ローラ～』

「良じですね、賑やかでー」

『つるさいだけだがな。』

「麗奈ちゃん、じつち来て一緒に話かなーい。」

「あつはーいー。」

女子通し仲良くやつているのを見て安心する真田。

「真田さんも、アホだと思いますよね？」

「なつ……まだ言つか。」

『……お前達、まだやつてたのか』

女子は女子で会話が、はずんでいる。

「真田さんの言つてた友達つて美鶴さんのことだつたんですね」

「ん?……ああマンションのことか、あいつとは長い付き合いだからな。」

「桐条グループに關する人つて言つからどんな人かと思つたら、まさか社長とは…」

「私達のいる社員寮もすげい豪華だよね。」「あの室内に有るもの をぞつと計算してみたら軽く一千万越えたよ。」

「うつ……そんな中で過ごしてたんだ私達、お金足りるかな…」

「何、心配するなお前達の部屋からは、一円も取つて無いぞ…無論 明彦や順平からもな。」

「そんなんじや会社赤字になりませんか?」

「いつも言つては難だがお金は、腐るほどあるのが事実だ、それに…」

「それに?」

「君らからは、大事な物を沢山貰つたからな」

「先輩…」

「美鶴さん…」

「桐条先輩…」

「あつえど、麗奈ちゃん制服のままだけ変えの服あるの?..」

「あー、そういうえばすっかり忘れてた服」

「じゃあ今からみんなで買いに生きません?」

「眞さんが服選んでくれるんですか?」

「まあ、そういうことになるな」

「うれしいです、そうだ真田さん達は…」

「いや、いいでしょ、あいつらに女性物わからんないって」

「それに、邪魔しないほうが…」

そう言われ男子の方を見ると、真田と順平が、腕立て勝負をしてい

る。

「『』つおおお『』」

「さすがつすね…真田さん。」

『ふん、後輩には負けられんからな…』

「ふああ

天田とクロマルは、あぐびをしている。

「…………」「」「」「」

「確かに、ほつといたほつが良さそうですね。」

「じゃ、行こつか

「はい。」

女性陣は、半分呆れた様子で出て行った。

Episode 6 The holiday of the moment

土、日曜は、基本寝てるんで更新が遅いです。 (-_-) ZZZ

ポロニアンモール内
ショッピングモール

「ねえ、これとか似合つんじゃない?」

「あつ本当だ、すうにキレイ」

「どれどれ、見せてください」

「見ているだけじゃ、あれだから着てみたらどうだ。」

「そうですね、じゃあちょっと着て見ますね。」

「どう? 麗奈ちゃん... サイズ合つ?」

「うーん、ちょっと大きいかな?」

「...じゃあこれはどう?」

「...あつすいいピッタリです。」

「でもなんでわかったんですか? サイズ。」

「目視計算してみたらこのくらいだつたから。」

「あそつかアイギスさんロボットでしたね、すっかり忘れてました。」

「昔は、敬語ばっかでわかりやすかつたけどね。」

「最初は、普通に話せなかつたもんねアイギス。」

「これも、ゆかりと湊さんのおかげだけじね。」

“湊”の単語が出た瞬間全員の顔に影が射す。

「湊さんつてあのキタローみたいな髪型をした人ですよね。」

「ああ、そうだが... 湊を知つてゐるのか?」

「いえ、真田さんのとこに写真があつたので。」

「そうか。」

「ここで、疑問に思つてゐることを口に出す。」

「あの... 聞きにくこんですけど、湊さんつてその... へくなつたんですか?」

数秒経つてから、美鶴がゆっくりと口を開く。

「ああ……彼は死んだ、いや……自分の命と引き換えに世界を救つたんだ。

君も知つていいだろ？、6年前、大々的なカルト騒ぎと同時多発無気力症…我々は、その根源たる存在と対人したんだ。」

麗奈は、簡単に説明を受けた。

「そうだったんですね？」

「だが私達は振り返らない、有里との約束だからな…」

「ええ」

美鶴の言葉にゆかりが、算定する。

「ん…有里？」

「ここでの時の記憶が蘇る。

【僕の…名は…里…】

「どうした？西条。」

「いえ、なんでもないです。」

（まさか…ね）

「さてと、そろそろ戻るか

「そうですね。」

「そうだ、君に渡すものがある

美鶴は、懐から拳銃を取り出す。

「これって…召喚器ですよね？」

「ああ、君専用のな」

「これって良いんですか？」

「自由と、必要になつて来るだろ？。それに…」

「それに？」

「君はもう仲間だ。」

驚いて周りを見ると、皆召喚器を持つている。

「やーゅう！」とつ

「皆わん…」

「じゃあ、行くか。」

「はい！」

再び、カフェ シャガール

戻つてみると二人の腕立て伏せ勝負が、逆立ちに変わっていた。

「あんた達まだやつてたの？」

「おつゆかりつちどこ行つて…」

逆立ちしながら話しかける順平だが麗奈に目が行くとそのまま倒れる。

「どわつ！！」

『俺の勝ちだな順平！』

「ちょっと大丈夫？」

「おおへーき、へーき…いやーそれよりえらい変わったなつーか、可愛くなつた。」

「そうですか？つてその台詞さつきは、可愛くなかつたつてことですか…？」

「いや、そういうわけじやねーけど（汗）

ねつ、真田さんも変わつたと思いますよね？」

『ん？どこか変わつたか？』

「あーそういうえば真田さんつてそういう人でしたね…」

「そういう人つて？」

「真田さんスポーツしかやって来なかつた人だから、体格とかで判断するんだよね。」

「あーなるほど…そりゃあ変わりませんよ体格なんて、服です服！」

「！」

『ん、服？…そだなよくなつた。』

「遅つ！…」

真田のスローーテンポに順平がツツ「ミ笑いが、起きる。

「アハハハハツ」「」

『おい、お前ら何が可笑しい!』

「いや、だつて…ふふつ

『もういいっ俺は、先に出る。』

「ちょっと、すねないでくださいよ。』

『すねとらんつ。』

その会話に、後ろから笑いが漏れるが一人が黙り、つられて止まる。

「あれ?人通りがねーな…」

『人通りも何も、気配すらしないぞ』

「どうしたの?立ち止まつて」

「いや、ゆかりつちそれが…」

『やけに静かですね、外』

「ほんとだ、誰もいないみたい」

「グルルル」

「…熱感知センサーには、私達以外の反応がありません。』

外は、静まり返り不気味な空気が包んでいる。

「『伏せろ!…』

「『伏せろ!…』

その直後に空氣の固まりが、飛んで来る。

「キヤア!」

「おわつ!」

「くつ!」

「ほつ…さすが、素晴らしい身のこなしだ

『誰だ!…』

『申し遅れましたね、我々は秘密結社「ドクノマレビト以後おみしりおきを…』

『俺らに何のようだ!…』

「その少女を渡してもらいたい。」

『なぜ彼女を、狙う』

「簡単なことです、我々は力を集めている…故に彼女の力が、欲しいそれだけです。」

「お前達は、どういう存在だ！」

「そうですね…“ストレガ”の意思を継ぐものとでも言つておきましょうつか…」

「ストレガだと…」

「さて、お喋りはここまでです…彼女を渡して貰おつか。」

『…嫌だと言つたら？』

「その時は、力付くでいただく…」

その言葉と共に仮面の男達が一斉に飛び出して来る。

『ふつ力付くか…望む所だ』

「手加減はしない！」

「へへっ腕がなるぜつ、つーかペルソナがなるぜー！」

「ちょっと、調子こいてへましないでよねつ」

「次弾装填完了…いつでも発射できます。」

「久々に、腕がなりますね。」

「ワンツワンツ」

「ていうか皆武器をひとつかり…」

「おちやらけた順平ならともかく、真田さんの徵収なら、何か有る

と思つてしまふ、それで準備してたの。」

「ああなるほど、そういうことですか。」

「二人共ヒドシ」

『騒ぐなつ！』

「サポート準備できましたつ、敵来ます。」

『よし、行くぞ！戦闘開始だ。』

Episode 6.5 Extra (前書き)

これは登場人物紹介です。

本編の続きではありません。

Episode 6・5 Extra

（登場人物紹介）

主人公

真田 明彦 （サンダ アキヒコ）

年齢：28

ペルソナ：カエサル

アルカナ：皇帝

ヒロイン

西条 麗奈 （サイジヨウ レナ）

年齢：18

ペルソナ：イシュタル

アルカナ：女皇帝

メインキャラクター

桐条 美鶴 （キリジョウ ミツル）

年齢：28

ペルソナ：アルテミシア

アルカナ：女帝

伊織 順平（イオリ ジュンペイ）

年齢：26

ペルソナ：トリスマギストス

アルカナ：魔術師

岳羽 ゆかり（タケバ ユカリ）

年齢26

ペルソナ：イシス

アルカナ：恋愛

山岸 風花（ヤマギシ フウカ）

年齢26

ペルソナ：ユノ

アルカナ：女皇帝

アイギス（アイギス）

年齢：無し

ペルソナ：アテナ

アルカナ：戦車

天田 乾（アマダ ケン）

年齢：18

ペルソナ：カーラ・ネミ

アルカナ：正義

虎狼丸ヒョウランマル

年齢：不明

ペルソナ：ケルベロス

アルカナ：剛毅

今後出す予定の人達

有里 湊（アリサト ミナト）

年齢：17（26）

ペルソナ：オルフェウス（改）、

アルカナ：宇宙（世界）

望月 凌辱（モチヅキ リョウジ）

年齢：26

ペルソナ：タナトス

アルカナ：死神

上のメンバー + 作者がおもな登場人物です、最後の一人はどうで出すかわからないので、お楽しみにどうぞ。

Episode 7 special feature display(前書き)

敵勢力の「ゴードンマーレビート」は、ファミ通GIGAクリアから出てる“薺葉ライドウ対ゴードンマーレビート”から抜き出しました。

『よし、行くぞ！戦闘開始だ。』

『美鶴と伊織は、俺と前衛だ。』

「わかった！」

「了解です！」

『天田とコロは、中盤で援護してくれ、岳羽とアイギスは、山岸と西条に付け。』

「「わかりました。」」

「ワウッ」

「了解であります。」

「じゃあ行動開始だつ カエサル『デッドエンド』」

「行くぜ！！トリスマギストス『ブレイブザツパー』

「アルテミシアツ『マハブフダイン』」

真田と順平が前線を切り開き、そこへ氷結魔法をぶつける。

「やる気ですね、先輩達…僕も負けませんけどね、カーラ・ネミニ

『マハンマオン』

「ウォーンツ（『マハムドオン』）」

天田とコロマルの即死魔法が、敵の頭数を減らす。

「アイギスつサポートして、イシスツ『マハガルダイン』

「了解であります。アテナ『アカシャアーツ』」

「皆すごいですね。」

「これが、私達のチーム。互いに信頼できるからどんな相手とでも、戦える。」

「くつこいつ疾風属性効かない。」

「危ないっゆかりちゃんに誰かサポートを。」

風花のアナウンスの合間に敵が、ゆかりに遅いかかる。

「キャアッ！」

「カーラ・ネミッ『ジオダイン』」

「イシュタルツ『メギド』」

だが攻撃が、ゆかりに当たる前に、敵が吹っ飛ぶ。

「…あれ？」

思わず、目をつぶるが目の前の光景に驚く。

「全く…女性を先に狙うなんて、紳士じゃないですね。」

「護られてるだけじゃ退屈なんだからっ」

「天田君、麗奈ちゃん。」

「ゆかりさんは下がつてください。」

「こは、僕らが引き受けますから。」

「そーいつこどつ…んじやさつと片付けますか。」

「撃ちますッ！…」

「ワンツ（『アギダイン』）」

遠目で戦っていたアイギス達が戻つて来る。

「この辺の敵は大方片付いたであります。」

「ワンツワンツ」

「アイギスさん…今カツコイイ台詞言つて良いとこだつたのに。」

「それは、失礼しました。」

「あれ？アイギスさん話しかた元に戻した？」

「ええ、先程の口調では皆さんに戦闘に不具合が生じると思いまして。」

「あー、確かに今はそのままの方が良いね。」

「へーアイギスさん元々こういう喋り方なんだ、確かに口ボソッつて感じ。」

「お話し中すみません。今、先輩達の方から強力な反応を感じしま

した、応援に行つてください。」

「私と、コロマルさんが行きます後の方は、待機しててください。」「気をつけてね、アイギス。」

（前線）

真田達の前には、炎をまとった巨人が仁王立ちしている。

「なんだあいつは。」

「あんなんさつきまでいました？」

「いや見て無い、だが…相手がなんであれ倒すまでだ…！」

「遅くなりました！敵は、魔術師弱点は氷結です。」

「遅くなりました、であります。」

「ワンツ」

「なるほど見かけ通りか、ならば…美鶴」

「ああ、わかつている」

「伊織とアイギスは、俺と一緒に体制を崩しに行くぞ。」

「おいつす。」

「了解であります。」

「コロマルは、私のサポートを頼む。」

「ワンツ」

「じゃあ行くぞ、作戦開始だ。」

「アルテミシア『コンセントレイト』」

美鶴が、集中し始める。

「コロマルつ頼んだぞ。」

「ワンツ」

一声かけると巨人の方に向き直る。

「行くぞ、カエサル『デッドエンド』」

「おっしゃあつ、トリスマギストス『空間殺法』」

「行きます！！アテナ『ゴッドハンド』」

アイギスが頭部を、

順平が腹部を、

そして、真田が足元をそれぞれ崩しにかかり狙い通りふらつく。

「よつしゃあ！！」

「狙い通りであります。」

「美鶴！今だ。」

「わかつている、アルテミシア『ブフダイン』」

研ぎ澄まされた氷結魔法が、炎の巨人を巨大な氷塊に変え、ケルベロスが体当たりし粉々に砕く。

「敵戦力の崩壊を確認、戦闘の終了を宣言します。」

『久しぶりの戦闘で、心配してたが…余計だつたな』

「俺はいつでも現役バリバリですよ。」

「コロマルもよくやつた、エクセレント！…！」

「ワンツワンツ」

褒められて、パタパタと尻尾を振つてる。

「終わりましたか。」

「皆さんお疲れ様です。」

「おつかれさま～」

仲間が集まり和気あいあいと話しあつ。

「…やはりインフルノじや歯が立たんか、特別課外活動部要注意だな…」

世界の何処かで運命が、回り始めた…

Episode 8 Moonlight garden hide & seek

これから、月光館学園編スタート？？です。

「さてと西条、君に伝えることが有る。」

「何ですか？」

「今回のことから敵が本格的に動き出し、一人でいるのは危険になつてくるだらう。」

「……はあ……」

「そこで、君を月光館学園に編入させることにした。」

「えと、月光館学園つて天田君が通つてるとこですね。」

「ああ、それに我々の母校でも有る。」

「えつそーなんですか！でも勝手に編入とかできるんですか？」

『あそこは桐条グループの傘下だからな、なんとでもなるわ』

「あつそーなんですか。」

「それに、天田や山岸もいる。安心だろ？。」

「あれ風花さん月光館の先生だったんですね。」

「どうだ？」

「はいわかりました入ります。よろしくね天田君……あつこいつまでも名字じゃあれだから乾つて呼ぶね。」

「乾！？」
「あれ名指しで呼ばれるの嫌？」
「いや、そういう訳じゃなくて……なんてゆうか新鮮だなあつて」「新鮮？」

「ほり、このメンバーつて皆年上だから、名指しで呼ぶ人いなかつたんだ。」

「あー確かに……」

先程の戦闘でも乾は天田で、自分は西条だった。
「わかるなそれ……じゃあ今度からは、名指しで呼び合おうよタメな

「なんだし、私は麗奈で、構わないから。」

「じゃあ、僕も麗奈って呼ぶよ。」

「うん、よろしくね乾」

「手続きのあれで、通えるのは、正月明けからだなもつとも正月休みだが。」

「じゃあ三学期からだね。」

「あれ？でも私休み中何処にいればいいの？」

『ああ、それなんだが美鶴と話した結果、巖戸台分寮を開けることにした。』

「へーあそこ開けるんすか、なら今度遊びにいこっかな。」

「じゃあ今から皆で行きません？懐かしいのは、皆一緒にだし。」

「皆さんも住んでたんですね。」

「あん時は、充実してたよな。」

「だね。」

「こつから歩いてくんですか？」

「そういうわれれば…じゃあ真田さんの車…」

『馬鹿だろ…この人数が乗る訳無いだろ。』

「明彦、何人乗れるんだ？」

『俺を含ませて5人だ。』

「じゃあ男性組は明彦、女性組は私だ。」

一 手に分かれ巖戸台分寮へ向かう一行。

数分後巖戸台分寮前

「真田さん、運転上手いっすね。」

『ん？ そつか？』

「だつてあのスピードであんな角まがれないと普通。」

「まだ女性陣来てませんよ。」

『ちょっと早く来過ぎたか。』

「最初は、桐条先輩の方に乗りたかつたつすけど、あんなレース並のやつ体験できるなら、こっちで正確だつたす。」

『レースつてそんなにスピード出してないぞ。』

「車出す前の『シートベルトしっかり閉めとけ』の理由が、よくわかりましたよ…」

天田は、口口マルを抱えていたためシートベルトを緩めていたので半分げつそりしている。

「車の中の真田さんの言動は、要注意だな。」

「ええ。」

話してゐる間に女性陣が到着する。

「あー懐かしい！：何で天田君凹んでるの？」

「いえ… 口口マル抱えるからつてシートベルト緩めたからこいつなりました。」

「あーなるほど…」

「明彦の運転は、目を見張る物がある、まさしくプロ並だ。」

「確かにあれは、初心者にはきついね。」

『お喋りは止めて、そろそろ中に入らないか？』

「おわづ懐かしい！」

「このソファーに座ると、あの時に戻つたみたい。」

「いいなあこの昔懐かしい感じ…正月中ずっとといよつかなー」

「悪いが伊織このは学校関係者以外の入寮は、認められていない…たとえ休み中でもな。」

「そんな、こと言わずに…」

「駄目だ。」

「はあー、やっぱ駄目か…」

『さてつ俺は、そろそろでる。』

「あれ？もー出でちゃうんすか？」

『ああ、やり残した仕事が有るからな。』

「正月に、ですか？」

『たとえ年末年始と言つても、実際には休めないのが現状だ。』

「警察つて大変ですね…」

『さて、もう行かなきやなまたな。』

「んじやあ俺らもお開きにしますかつ。』

「そうだね。』

「じゃ、またね二人共。』

「はいっ、さよならー。』

「あれ？ 風花さんは、帰らないんですね？」

「私は、教員寮の変わりにここを使つことにしたの。』

「じゃあこれからよろしくお願ひしますね？』

「いわうらじそよろしくね。』

1月5日 月光館学園高等部 3・F教室

「おはよう～」

「よう、天田ー！ そついや聞いたか？』

「朝から元気だな…で、何を？」

「このクラス、転校生が来るつてよ。』

転校生と言われ思いつくのは一人しかいないが、とりあえず話を含ませる。

「それほんとか？ また前みたいにガセじやないのか？」

「いや、それなんだが運動部のヤツが休み中に手続きしてゐるの見た
らしいんだ。』

「らしいだろ、確実に見たつて言い切るならともかくな～』

「何なら、何かかけるか？」

「俺、確實に勝てる勝負じやないと乗つからねーから。』

「詰まんねーな、ならこつちは、どうだ？』

「今朝、鳥海が話してたんだけどよ、新任の女教師が来るつてよ…
しかも美人らしい。』

「ああ、それなら聞いてるぜ。」

「なんだ、知つてたか…でも楽しみだよな。」

月光館学園高等部内 職員室

「失礼します。」

「おつと、転校生ちゃんよね…私は、鳥海 美咲 よりじくね。」「よろしくお願ひしまーす!!!」

「おーとつ元気ビンビンね!私そつこつ子好きよ。クラス分けもう見た?」

「いえ、まだです。」

「あなたは、私の担当するF組よじや案内するからついて来て。「はいっ。」

再び、3・F教室

教室はやけに騒がしい。

「ほら、そこ静かにしなさい!」

「…………」

「じゃ、早速だけど転校生を紹介するから。ほら入つて来て…」

また、教室がざわつく。

「始めてまして、西条 麗奈つて言います。

いろいろとわからない事が有るので優しく教えてくれると嬉しいな。

」

自己紹介の後、三度ざわつく。

「可愛くね、あの子。」

「めっちゃ俺のタイプなんだけど。」

「彼氏とか、居んのかな。」

「ほら、静かにしなさい…えつと天田の隣が、空いてるわね。」

すべて承知してた天田だが、さすがにびっくりする。

「あの～先生、ここは今日サボつてるだけで…」

(よしつ、ナイスだ天田！)

回りの視線が痛い天田が空気を読むが、鳥海によってぶち壊される。

「そんなのいないのと一緒に、はいそこに決定ね。」

「はい。」

こちらに近づき隣に座る。

「よろしくねつ天田君。」

「う…うん。」

自分に向けられた笑みの裏に恐怖を、感じる天田であつた…

Episode 9 The god of death and a man

最近、夕方投稿が増えてきました。

「よろしくねつ 天田君。」
「う…うん。」

自分に向けられた笑みの裏に恐怖を、感じる天田であつた：

同時刻 都内某所スタジオ

一人の青年が、田まぐるしく動いている。

「おい、アシツ 鏡直してこい。」

「ウツス。」

「次の衣装持つて来て。」

「ウツス、今行きます。」

「これ、編集長ん所持つてつて。」

「ウイツス、了解つす。」

「おい、弁当全然足りねーぞ。」

「ウツス、今買つてきます。」

走り去つた青年を見送り、スタジオにいる人物が口を開く。

「あの、アシスタンント良いよな。」

「ああ、何でもやつてくれるしな。」

「まあ、いちいち言わなきやいけないのがあれだけどな。」

「そこは、新人だからしようがないだろ。」

「ま、あいつにはそれを上回る体力と、精神力がある。」

「今まで何人辞めたか…」

「あなたたちの命令が、多過ぎなんですよ。」

「…………」

「それにしても…あのカメラマン良いよな。」

「なんてゆうか、写真に命を感じますよね。」

「うーむ、ああ、う奴がうちにも欲しいな……」

「交渉して見ます?」

「彼有名ですし、大手からも勧誘されてるんじや……」

「大手か……」

そこに、先程の青年が戻つてくる。

「ただいま戻りました~」

「おう伊織、戻ったか。」

「いきなりだが、この写真、どう思つ。」

「どうつて、なんつーか生き生きしてますね。」

「お前にもわかるか、その写真の良さが。」

「ええ……何と無くですけど。」

「なら、お前はこの業界に向いてるかもな。」

「ウツス、アザツス」

「で、本題だがうちとしては、その写真を撮つた彼が欲しい。」

「はあ……」

「で、伊織お前勧誘して来てくれ。」

「へつ?」

「だから勧誘して来てくれ。」

「いや、その……素朴な疑問なんすけど、そういうのつてもっと偉い人がやるんじゃないんすか?」

「確かに最終的な決定は編集長だが勧誘は下つ端の仕事だ、って事で行つてこい。」

そういう話をしているとその彼が、こつちに寄つて来る。

「写真の出来は、どうですか?」

「素晴らしいよ。」

「ありがとうございます。」

「ところで提案なんだが。」

「はい……」

「君うちの所で、専属に……」

「有り難い申し出ですが……」

「あれ？この声どつかで…」

その一声に反応する。

「もしかして…順平君？」

「ああ、そうだけど…」

「やつぱり…僕だよ、凌辱だよ。」

「凌辱ってお前凌辱か？望月

凌辱。」

「一人は、知り合いか何か？」

「えと、昔馴染みつてゆうか…」

「親友です。」

「ておい！つかお前あん時…」

「それなんだけど、僕もよくわからぬんだよね…きずいたら公園に居てその辺ふらついてたら変なおじさんに“君、カメラで世界を見てみない？”って勧誘されて面白そぞだから付いてつたら、いつの間にか売れつ子カメラマンに成っちゃった。」

「成っちゃったじゃねーよ、あつそつだお前今フリーだろ？」

「えつこうんそうだけど…」

「なら俺と一緒に働かねーか？」

「君と一緒に…いいのかい？」

「良いから言つてんだろ。」

「でも僕は、あの時皆を酷い目に…」

「んな昔の事誰もきにしねえよ。」

「順平君…」

「順平でいいぜ凌辱。」

「一人で、戻る。」

「話しさ、ついたかい？」

「望月 凌辱です、先程の申し出有り難く受けさせてもらいます。」

「じゃあ、うちで働いてくれるんですか？」

「ええ、そうなります。」

「でかしたぞ伊織。」

「これでうちに安泰ですね！」

「よし、時間取れ！編集長に話してくる。」

「凌辱君は、休んでてつ。」

「あついえお構いなぐ。」

「あの、俺は何を…」

「お前はいいから凌辱君逃がすな。」

「急に賑やかになつたね~」

「このドタバタ感がいいんじゅねーか。」

「そう言われて見れば… そうだね。」

「だろ?」

「これからは、順平と一緒に~また昔みたいに遊べるね。」

「それ以前に、暇があればだけど。」

「そうだ…順平今一人暮らし?」

「そーだけど、どした?」

「一緒に、住まわせて欲しいんだけど。」

「そんなんだけなら別に…」

「どした?」

「まさかお前…あつち?」

「あつち?」

「お前…男が好きとか言わないよな?」

「まつさか~そんなわけないじゅない。」

「いやだつていきなりだつたからよ…」

「高校の時、僕が女の子とばっかり遊んでたの忘れたの?」

「そーいやそうだったな、でも何で俺と?マンションでも借りりゃ

「良いだろ。」

「僕、シャドウだから住民票とか無いんだよ。」

「あーそれですか。」

「お願い順平！家賃も払うし、それにもう野宿は、嫌なんだ…」

「はあーじょうがねーか…良いぜ。」

「ヤッター！ありがと順平やっぱ持つ物は、お金と友達だね。」

「たく…調子良いんだからよ、あつその前勝手に女連れ込むな

よ。」

「それは大丈夫、何で僕がモテてたかわかったから。」

「へー…で何でだ?」

「女の子達は、僕の魅力じゃなくて僕の中のDEATHにひかれてただけだったんだ。」

「お前の中のDEATH?」

「そう、人間誰しも日常に飽きたると死に触れてみたくなる、大方日常に飽きた女の子達が死そのものである僕の中のユクスに寄つて来ただけだったんだ。」

「そうだったのか…」

「実際、ゆかりさんは僕に興味が無かつたしね。」

「ゆかりっちは、有里一筋だったからな。」

「あつやつぱり? 僕もあの一人怪しいと思つてたんだよ。」

「もっぱら噂だったからな、それに急に名前呼びになつたり兆候があつたしな。」

「そういう事も、自分の理由も、わかつたのは順平達がユクスになつた僕と真つ正面からぶつかつてくれたからや。」

「凌辱…」

「んじや、これからよろしくね順平。」

「おう。」

「んじや、これから飲みに行こう!」

「おうつて…これから!…」

「そう、これからこれから全は急げだよ。」

「でもまだ俺仕事…」

「今日は、上がつて良いぞ伊織。」

「えついいんすか?」

「おお、お前のおかげで凌辱君ゲット出来たもんだからな。」

「んじやー行こー!」

「ちょっと待て凌辱、引っ張るんじやねー…」

「おつ酒か、行ってこい。」

「たまには行つてらつしゃい。」

「接待も大事な仕事だぞ順平。」

「たまには生き抜きしてこい。」

「順平は、僕が責任持つて預かりますので。」

「「「「行つてらつしゃい。」」」」

「俺の意見は無視！？」

「ほら、つべこべ言わずにさつと行くよ。」

Episode 10 Overcome liquor! (前編)

今回、『メトリー描画』と云うか…ぶっちゃけ半分以上おろ抜けです。

Episode 10 Overcome liquor!

「せり、つべじべぬかにわいかと行くよ。」

順平・凌辱ーの居酒屋でGOー！

(テレテツテテツテレテツテテツテレテツテツテツテツテテテテテ
ン)

「Jの番組は、J覧のスポンサーの提供でお送りします。」

ハナ○ルキ

ΠΟΠー♪

全日本居酒屋協会

スタジオ 団

株式会社ATOUS

一軒目 19:05

凌「すいません、生一つ。」

順「つまみも頼めよ凌辱。」

一軒目 21:25

凌「まだまだ行けるよね順平？」

順「おうつ今日は、朝まで飲むぜ～」

凌「わっすが順平よくわかつてる～」

三軒目 23:02

凌「すいませ～ん、ビールもう一杯」

順「そろそろ止めといた方がいいんじゃない？」

凌「そり～？」

四軒目 24:41

凌「すいませ～ん、ビール！」

順「日付変わっちゃったな……」

五軒目 25:32

凌「生二つ～」

順「おこおこ、凌辱そろそろやめとひ……」

六軒目 26:05

凌「たまには焼酎とか飲んでみる?」

順「おい凌辱ほんとひ……」

七軒目 26:52

凌「すいません、ビール！」

順「おい凌辱……」

八軒目 27:00

凌「すいません、ビール！」

順「おい凌！」

九軒目 27:30

凌「すいません、ビール！」

順「お……」

十軒目 27:55

凌「すいません、ビール！」

順「……」

十一軒目

凌「すいません、ビ……」

順「いい加減にしろ……！」

凌「えつ何が？」

順「何が？じやね～」

凌「い、痛いよ順平。」

順「お前、どんだけ飲む気だ、しかもいつまで飲む気だ。（怒）」

凌「ちよつ待つて、何でそんな怒つてるの……」

順「あんなに、飲んだら死んじまうだろうがー！」

凌「大丈夫だよ～僕毒物とか、効かないから。」

順「俺が、死んじまうだろうがよ！」

凌「あつ“ゴメン”“ゴメン”…うつかりして順平のこと忘れてたよ～テへ

順「テへ…じやね～（怒）」

凌「ちよつ…止めて順平、ギブツギブアップ」

順「俺止めたよな?止めとけって忠告したよな?」

凌「言つてたよな…言つて無かつたよな…」

順「言つてたよな? (怒)」

凌「はいっ言つてました、そして僕が悪かつた…だから離して。」

順「……」

凌「ハア、ハア全く、元はと言えば順平が朝まで飲むぞーなんて言
うから…」

順「そういう意味で言つたんじゃねー (怒) それに、言葉をそのまま受け取るつて小学生か!」

凌「うん、僕小学生 (笑)」

順「……ハアー (怒る) 気力無くした。」

凌「じゃあ、もう一杯行く?」

順「まだ言つか…」

回った店の数… 15軒

凌辱が飲んだお酒の数… 47杯

ジョッキ

順平が飲んだお酒の数… 4杯

ジョッキ

+ おつまみ 62皿

合計 25万7千3百2円

「ありがとついざれこましたー」

(テレテツテテツテレテツテテツテレテツテツテツテテテテテン)

「「」の番組は、「」覧のスポンサーの提供でお送りしました。」

株式会社サン○ス

ア○キー・メディアワークス

エ○ターブレイン

SO○Y

任○堂

株式会社AT○US

(テレテツテテツテレテツテテツテツテツテツテツテレテレテン。)

順平！凌辱！の居酒屋でGO!!

終わり。

順「つて終わりかよ！」

Episode 10 Overcome liquor! (後書き)

今週末忙しいので、更新が遅くなる…あることは後日に持ち越しになるかも知れません。

Episode 11 The justice is hard... (前書き)

土、日曜は多分書いてる暇無いので、今日明日で書けたら書いりつと思っています。

Episode 11 The justice is hard...

話しは戻り月光館学園高等部

「本日も、無事に一日が終わつたな…」

「息つくとそのまま机につつむく。」

「天田君…一緒に帰らない？」

天田の暗い気持ちを後ろから一声でぶつこわす麗奈。

「ゴメン、今一人にして欲しいんだけど。」

「い・つ・し・ょ・に・か・え・ら・な・い・?」

回りのクラスメイトからすればつらやましい限りだが、天田にとつては威圧感以外の何でもない。

「はい…わかりました。」

今日もまた、威圧感に負けトボトボと教室を出る。

「あのせ…もう一人で帰れるのに何で僕と帰るの?」

「真田さんに、言われたでしょつ一人で出歩くなつて。」

「ああ、そういえばそうだったね。」

「ていうか、何でそんなに暗いの?」

可愛い女の子と一緒に歸れるんだから少しあは嬉しそうにしなさいよ。

「確かに君は可愛いけど、自分で言つのはどうかと…」

「バン!!」

「@&*%#¢¥~」

左足に痛みが走りが声に成らない悲鳴を上げる。

「その言葉台なしだよ。」

「足がつ…」

「全く、戦つてる時はカツコイイのに。」

「そりゃどうも。」

「そだついつもペルソナ召喚してれば？そしたら常時カツコイ
じゃん。」

「カツコつけるために疲れたくないな…」

「モテるために、努力しないでどうすんの？」

「…ペルソナは精神擦り減らすから長時間召喚していると命にかかわ
るよ。」

「あ…」

「それに、皆に見えるから大騒ぎになる。」

「そつか…そつち考えて無かつた。」

「それもう終わりにして別の話ししない？」

「別の話しつて？」

「例えば、もうすぐセンターだけど麗奈は何処受けるの？」

「うーん、何処だろ？」

「…えつ」

「そういう乾は何処受けるの？」

「僕は、月光館かな。」

「えつ…てか月光館つて大学もやつてるの？」

「らしいよ？」

「私、高校が本部かと思つてたけどまさか大学とは…」

「真田さんやゆかりさんも通つたつて言つてたし、結構いいんじや
ないかな。」

「真田さんも行つてた所から私も頑張つて行こうかな。」

「ていうか、前から思つてたんだけどさ。」

「何？」

「真田さんの事好きなの？」

「えつ…？」

「何でそんなきょどるの？もしかしてほんとに好き？」

「いや、いきなりだつたから…うーんと好きつて言つよりも憧れの
方が近いかな？」

「憧れ？」

「そう、憧れ…よく言つ白馬の王子様みたいな。」

「真田さんの王子様…なんて言つか似合わないし想像したくない。」

「うん…私も想像したくない。」

「自分で言つたんじや…確かに真田さんなら王子様みたいに颯爽と駆け付けてくれるだろうね。」

「そう!それが言つたかったの。」

「告白とかしないの?」

「ずっと好きだったんです、付き合つてください…みたいな?」

「そんな、中学生じゃないんだから…」

「じゃあ、どんなのよ?」

「そうだな…私が高校卒業したら、結婚を前提に付き合つてください。…とかじゃない?」

「私の発想は、男子以下か…」

「つか、ほんとに告らないの?」

「なんて言つたか、わかるんだよね…」

「わかる?」

「そう、何と無くだけどわかる。

相手の気持ちが誰に向いてるのか…向いてないのか…」

「……」

「でも、今はただのガキンチョとしか思われ無くても最終的には私の方に振り向かせて見せるんだから…」

「強気で行けばなんとでも成るさ。」

「うん…」

番外編天田キレる?

カリカリカリカリッ

部屋中に、筆記音が響く。

その部屋の壁には、センターまで後10日という、標語が貼つてある。

「フーッ…」

一息つき再びペンを握った時、頭に女性の声が響く。

「忙しい時にゴメンなさいっ」

「いえ、大丈夫ですよ。」

「寮の近くで前の反応を感じしておそらくゴドクノマレビトと思われます。

今、麗奈ちゃんとコロちゃんが応戦してます、天田君も応援に…」

「この大事な時に来やがって…」

「えつ…あの天田君?」

「いえ、今行きます。」

「あつ天田君遅い！敵が多いんだから早く！」
「カラ・ネミ…『メギドラオン』」
「えつ！」

辺りに居た敵を一撃で吹き飛ばす。

「えーと、強力な力を感知しました、アルカナは、女教皇です。」

「ワンツワンツ」「デカツなあれ！？」
「この大事な時期に来やがって…」
低い声にびっくりして見ると、天田が居た…
「えと…天田君？その…何かあったの。」「…何で？」
「いや、その、何か今の天田君怖いな~と思って…」
「僕は別にいつも通りだよ。」「そ、そう…なら良いんだ。」

「うーんでも、あえて言つなら…あのはた迷惑な集団だな。」

「……」

よけい怖い天田に声が出ない麗奈。

ズオオオオ

「…カーラ・ネミッ！『イノセントアタック』！！」

敵が隙を付いて襲つてくるが天田が一撃で消滅させる。

「強つ！」

「…たくつ無駄な時間過！」させやがつて。」

「えつと…敵反応消滅しました、お…お疲れ様です。」

「わーて…勉強の続きだ。」

「口口ちゃん…忘れよつか。」

「キューーン…」

Episode 11 The justice is hard... (後書き)

最後の方、天田が変?な風になりますがたまにはあるだろ...って感じで書いてみました。

いつも読んでいただきありがとうございます。

欲を言えればお気に入り登録やポイントも入れてくれれば、幸いです。

Episode 12 Two emperors

～翌日～

パペラペラペラペラペラ

「…つい寝つ」

大きなあぐびをしぶっさからはじめ出す。
サッと着替えをし身支度を済ましロボマーに下りると、既に天田が新
聞を広げている。

「あつ…おはよ。」

「うん…おはよ。」

「あれ？いつもの元気が無いじゃん。」

「いや…や」

「え？」

「ううん、何でも無い。」

「そう…何かコロマルも寄つて来なくて軽く淋しいんだよね。」

確かに、普段ならありえない事が昨日の裏天田を見るとそれも納
得できる。

「それより、もう出る時間だよー学校行かない？」

「いいけど…何か違うない？昨日と。」

「そ、そつかなあーアハハハハ」

月光館学園高等部

「さてと…僕、職員室に用事があるから後でね。」

「う、うん後でねー……」

笑顔で見送ると、とたんに走り出す。

「まさか一重人格とは…」

ぶつぶつ呟きながら教室に向かつてると一人の男子生徒とすれ違う。
「えっ！」

「えーと…何?」

「あつ『ゴメン』何でも無いの。」

「そう。」

(今の感じどつかで…)

一方職員室前廊下

「…ちよいと時間くつたな。」

携帯を開き時間を確認すると教室に向かつて歩き出す。

「たくつ江古田話し長いんだよ、これだからイヤミ田つて呼ばれ…
うわ」

「おわっ！」

「イタタ…あつ『ゴメン』つてミズキ!..」

「たくつなんなんだ…天田か。」

「珍しい所で会うな。」

「お前もな、ああそだお前また寮に入つたんだつけ。」

「ああ、ちよつとした都合でな。」

「噂じや、大人気の転校生と二人つきりとか。」

「ハハツそんなわけ無いだろ。」

「ま、それもそだな…おつと俺担任に呼ばれてるんだつた、じゃ
あな天田。」

「おう、またな。」

(あいつの雰囲気どいかで…)

そういうしてゐる内に教室に着く、見ると麗奈は席に座り何か考えて
いる。

「何考へてんの？」

「いや、ちょっとね……」

天田も席に座り真似して考へる。

「……何考へてるの？」

「……たわいもない事。」

二人は、授業も聞かずただ一つの答えを探していた：そして三回目の授業チャイムが鳴ると突然答えが一人の脳裏に浮かぶ。

（あの時の男の子？）
(有里さん?)

「「いや、そりや無いな。」」

思わず、二人同時に呟いてしまい全員の視線が集まる。

「えつ何！？僕何か間違った？」

数学の先生は、きょどつてる。

「いえ、何でも無いです。」

キーンコーンカーンコーン

天田が、仕方なしに口を開くとチャイムが鳴る。

「これはもう、確かめるしかないね。」

そう言うと出口へ向かう麗奈。

「ちょっと麗奈～私達との約束は～」「ゴメンまた今度。」

そういうと近くに居た天田の襟を掴み引っ張っていく（拉致つてい

く）

「ちょっと…何で僕まで！？」

「つべこべ言わない！」

「たーすーけーてー…つづか助ける…！」

面白がつて助けない友人達に軽くキレる天田であった。

「玄関ホール」

「で？ここで何すると？」

「待ち伏せ。」

「…誰を？」

「名前は、分かんないけど…」

「それで玄関で待ち伏せ？」

「うん。」

「いつ来るかも分かんない相手を？」

「…うん。」

「あのさ…待ち伏せって多少情報掴んでからやるもんじゃない？」

「それに、やるならやるで待ち伏せの他に…」

「ああもう、うつさい！いろいろ口挟まないでくれる。

それにはんたじうせ暇でしょ、暇つぶしできるんだから良いじゃない。

「暇つぶしつて…受験生とは、思えないな…」

「しつ！来たよ。」

「ん？あれ…水無月じゃん。」

「えつ知り合い？」

見ると先程一人がすれ違った男子生徒だった。

「おっよう天田。噂の転校生とデートか？」

「なつ違つ…」

「あのなあ…これからデートって空気に入れるか？」

「…見えんな。」

「で？何か聞きたい事が有るんじゃないの？」

「あ、そうだった…でもここじゃ難だし喫茶でも行かない？」

「ああ良いよ、どうせ暇だつたし。」

「そんなあつさり…」

ボロニアンモール カフェ シャガール

「で、聞きたいことつて？」

「うーんと、じゃ単刀直入に聞くけどあなた私と会ったこと無い？」

「うーん…天田とは昔馴染みだから前から知ってるけど、君は知らないな」

「そう…。」

「何でそんな事聞くわけ？」

「あなたと今朝すれ違った時なんだか前にどこかで会つたような感じがしたのそれで。」

「ふーん…あれ？」

「どうしたの？」

「いや、何か変じゃない？」

「そういうえば、人の気配が少ないような…」

「「…」」

「まさかっ…！」

「…どうやらそのまさかみたいだ。」

「人が気づくと辺りは、仮面に囲まれていた。」

「もうつこうムシャクシャしてる時に…！」

「ここで愚痴つても仕方ないだろ…カラ・ネミ『マッドアサルト』

「…」

「…何日も来られると体が持たないっての、イシュタルツ『メギド』」

二人で応戦しているが一人を庇つてる状態なので明らかに不利だった。

「何で…いつも何かしら不利なのよ…」

「麗奈！後ろつ。」

「乾！前見て前。」

二人に敵が近づく。

（くつ万事休すか。）

天田が半ば諦めかけた時。

「『マハラギダイン』」

「えつ。」

「何でお前が……」

「フー……今日は珍しく定時に終わつたな。」

自身の腕時計を見て呟く。

「ちょうど近くに来たし……黒沢さんの所に顔出すか。」

車を走らせる真田

ポロニアンモール

「今日は、やけに人通りが無いな……」

何かに気づいた真田は、異様な空気を放つて一角に目を向ける。
（さつき黒沢さんに連絡した時俺と一緒に居た奴が入つてつたと言つていたな……）

「まさか！」

気づいた時にはその一角に向かつて走り出していた。

「カエサル『マハジオダイン』間に合つてくれよ……」

こちらに気づいた敵を蹴散らしながら急ぐ真田。

「くそつ！後少し、カエサルツ『デッドエンド』」

敵の隙間から見え隠れする人影を追い一心不乱に突っ込む。

「西条！天田！…」

異様な空気の大本にたどり着いた真田が見たのは、座り込んでいる一人の姿とそれと対人するかのように立っている怪物とその間に庇うように立つ一人の少年だった。

(何が、起きている?)

言葉を探ろうと黙っている真田を尻田に少年は手に持っている銃を自らのこめかみに当てる。

「お前、何を！」

「安心しな…手加減してやる。」

真田の声を搔き消すように低い声で咳き引き金を引く。

「プロメティウス…」

少年の背から浮き出て来たのは、炎をまとった四ツ腕の巨人だった。

「『ラグナロク』…」

「…」「…」「…」

回りにマグマの噴火が起こり、敵を消し炭にする。

『ラグナロクだと…』

『ミズキ、お前いつたい…』

一呼吸置いて話し始める。

「俺は、水無月 瞬 『ドクノマレビト』の一員だった。」「

『今…なんて。』

『どういう事だ…』

『さつきの行動を見てわかつてもらえたかもしけないが…』

一度三人を見据えてから言葉を続ける。

「俺は、奴らを裏切つて来た。」

「えつじゅあさつきのあれは…」

「おそらく俺が、お前らの仲間に成るのを止めに来たんだろ、俺一人で、片付けるつもりだったが…天田達には迷惑をかけたな。」

『お前があいつらを裏切つて来たのはわかった…だが俺らの所に来た目的は何だ。』

「俺を、仲間に入れて欲しい。」

『「…」「…』』

「俺は、奴らに恨みがありそれを果たしたい…だが俺一人じゃあ限度がある、あんたらみたいに一緒に戦つてくれる仲間が欲しい。頼む俺を仲間にしてくれ！」

「瞬…」

『なるほど、お前の力量を考えるとこちらにもメリットがあるな。』

「じゃあっ！」

『だがこちらとしてもすぐに認める訳には行かない。それは、わかってくれ。』

「ああそれは承知だ俺は日頃月光館に通つてゐるからそこで連絡をくれ。」

『わかつた』

『水無月っ！』

『天田？』

「えと、そのまた学校でな。」

「…おう、またな。」

そういうふうとゆっくりと出口へ向かっていく

Episode 12・5 Extra ? (前書き)

この話は、前と同じく登場人物紹介です。

とりあえず注意書。

これは、本編の続きではありません。

Episode 12 · 5 Extra ?

（登場人物紹介）

新キヤラ

水無月 瞬（ミナヅキ シュン）

年齢：18（天田達と同年齢）

ペルソナ：プロメティウス

アルカナ：皇帝

その内出すつもりの人達

神郷 憤（カンザト シン）

年齢：21

ペルソナ：アベル

アルカナ：皇帝

神郷 淵（カンザト ジュン）

年齢：18（天田達と同年齢）

ペルソナ：セト

アルカナ：審判

榎葉 サカキバ
拓朗 タクロウ

年齢：21

ペルソナ：スバルタクス

アルカナ：戦車

茅野 めぐみ（カヤノ メグミ）

年齢：21

ペルソナ：ディアナ

アルカナ：女帝

えーと、水無月は作者が原作で付けてるプレイヤー名ですので、他のキャラよりもひいき目になるかも知れません。

これからそういう場面を発見したら優しい目線でスルーしてください。

Episode 13
A strategy meeting (前書き)

9割以上が新規です。

『さて、今回集まつてもらつたのは他でも無い…水無月
どうするかといつゝことだ、全員意見を言つてくれ。』

僕は仲間に入れるべきだと思します

「彼の力は、本物です戦力的にも有利になります…あとここからは、私情になりますが彼は僕の昔馴染みで性格でも問題はありません。」「私も乾に賛成、目の前で見てすごかつたし、私も助けてもらつた

「私も賛成かな、いろいろ理由は有るけど一番は、天田君と友達同士つてことだけど。」

「風花、君の諜報能力から見てどうだ？」

『さて、これを踏まえて紹譜を出したいと思...』

Prrrrrrrrr

携帯がなり真田と美鶴が怪訝そうな顔をする。

一あつすんません俺つす。

「おはようございます!」
「おはようございます!」
「おはようございます!」

- もも懸し... キシキシ

平野のそばにしんじやなし?

「お前がうそと見てて

たて騒ぐと、こゝもなし……

力事が詰しして、人間が比喩的見立て叫ぶからこそ、のまま待つでござる。

比喩は異て語心にて語が外れるの體

何故それを早く言わない！

一般人の前でペルソナ関係の話をするわけにいかん『

「いえ、一般人では無くてですね…」

「一般人じゃないことは…新しいペルソナ使い?』

「いやそれも違つ…案外違くないかも。』

「何!? 本當か伊織!!』

「先輩達まず俺の話しお…」

『さつきの「」に呼ぶつてやつか? いいぞ呼んで来いビツセ今話し

は止まつてる。』

「はあ…じゃあ呼びます。

おい、来ていいぞ。』

『やつとかー待ちくたびれたよー』

「今、来ます。』

その順平の言葉に全員、目を階段へ向け降りてきた人物に、声を荒げる。

「 「 「 「 凌辱君…! 」 」 」

「やあつ…久しぶりだね。』

『お前…ほんとに凌辱なのか。』

「信じられん…あの時ニユクスと共に消えた物とばかり…

「えつと…誰ですか?』

「彼は、望月 凌辱私達の仲間だった男だ』

「へー仲間…だった?』

「ああ、彼は一度死んだ。』

「と言づと…幽靈か何か?』

幽靈という単語にゆかりが、反応する。

「僕は人々人間じゃないから幽靈つて表現はしないかな。』

「じゃあ、単に生き返った…てことだよね。』

「うん、そうなるね。』

「何故君は、生き返ったんだ。』

「それは僕もよくわからないんだ。」

凌辱は、全員に説明する。

「えつと…公園でさ迷つてる変なおじさんに付いてつたら売れつ子
カメラマンになつた?」

「うーん…ちょっと違つけどそんな感じだね。」

『…だいぶ違うだろ。』

「ゆかり大人になつて馬鹿になつた?」

「んなつ…違うわよただよく聞こえなかつただけよ。」

「おや? ここにいる可愛いレディは?」

『ここには、西条麗奈つてつて…』

「今度、僕と一緒に素敵なレストランへ…」

『おい、人の話しを最後まで…』

「レストランですつて真田さん今度行きません?」

『あ、ああ…暇な時にな。』

「やつたー約束ですよ。」

『…ガン無視』

「そう落ち込むなつて凌辱。」

『うう…ゆかりさんですら話しくらい聞いてくれたのに。』

「そうだ望月、君にも聞きたいことが有る。」

『…なんですか?』

「ここに新しい人物を入れようと思つてゐるんだが、君の意見が聞きたい。」

「うーん面識も無い相手をどうあるつて言われても…」

「それは、私達も同じだ。」

「皆会つて無いなら一度会つて見ればいいんじや…」

『…』

「あれ? どうしました?」

『くつ…その手があつたか。』

「皆が思い着かないことを言うとは… Excellent

『よし、天田明日ここに連れて来い。』

「明日ですか！？』

『できるだけ早い方が良い。それに…』

「…それに？」

『確かめる必要がある。』

「何をですか？」

『奴が、本当に味方になつたかどうか… それと奴の底力をな。』

『真田さん… 何するつもりですか。』

Episode 13 A strategy meeting(後書き)

次は、ちゃんとした長めの話しひつと語ります。

Episode 14 A thunder emperor vs. the

前の投稿は、誤字脱字があつたので修正しました。

翌日、放課後。

「…善意じやなくて友達呼ぶのつて罪悪感有るな。」
昨日のこと思い出したため息が出る。

扉を開けようとしてすると昨日の事が思い出される。

『確かめる必要が有る。』

「何をですか？」

『奴が、本当に味方になつたかどうか…それと奴の底力をな。
(真田さんいつたい何を…)』

軽く頭を降り再び扉に手をかけようとした時扉が開く。

「ミズキッ！」

「よう！」

「あつと…話しが有るか？」

「有るか？聞いてどうするんだ。」

「あついや。」

「ま、いいや。」
じや難だし屋上に行こうぜ。」

（屋上）

「答えは、どうなつた？」
「いや、その…」
「その感じだと駄目っぽいな。
「そんなんじや無くて…」
「じゃあ何だよ…」
「バンツ…！」

「…？」

扉を開けて一人の女子生徒が入ってくる

「れ、麗奈！？何でここに…」

「あんたが、うじうじしてるからに決まってるでしょー…それに学校
じゃあ名指しで呼ぶなって前にも言つたでしょ。」

「はい、すみません」

「夫婦漫才？」

「そこ、何か言つた？」

「いいえ。」

「私は用件言いに来ただけ、今晚私達の寮に来てもらうから。」「
何のために？」

「悪いけど、今理由話せ無いの。」

「…わかつたよ天田と一緒に行くから安心して。」

「了解んじゃそういう事で…」

麗奈は、去つて行つた。

「…大丈夫？」

「…大丈夫じゃない。」

巖戸台分寮

『おう、来たな。』

「真田さん！？」

「あなた確か前にも。」

『悪いが今から移動してもらひつ。天田達も一緒にな。』

「待つてください。」

「ミズキ？」

「天田達は関係無い、連れていくのは俺だけにしてください。」

『理由は？』

「戦いに巻き込みたくないんだ。」

「真田さん戦いつて何です！」

『戦いと言つてもちょっとした入団テストだ。』

『ならやらないわけに行きませんね。』

「ミズツ！」

「大丈夫だよ。」

一声かけると真田の方え歩く。

『さて、三人共車に乗れ。』

「ここは？」

真田に連れて来られた場所は古めかしい闘技場のような場所だった。
『ここには知り合いに頼んで借りた場所でなペルソナの召喚もできる。』

『あれ？ 前にも来たこと有るよつな…』

『きずいたか。』

「？」

『ここはアイギスのデータを軸に創られた擬似コロッセオだ。』

『コロッセオってあの時の！』

『そうだ、アイギス達と戦った時のあれを忠実に再現している。』

『じゃあ負けたらまたどちらか火柱に…』

「「火柱！？」

「火柱つてどういう事だ…」

「真田さんー乾！」

『……』

「そんな…」

『何、安心しろリスクを負うのは俺も一緒にだ。』

「なるほどリスクは元より承知ですか。」

『さてお喋りは止めてそろそろ始めるか。』

そういうとスーツの上着を脱ぎ投げる。

「行きますよ。」

水無月も真似て制服の上着を投げる。

(真田のは麗奈が、水無月のは天田が受け取る。)

『本気で来い！』

「言われ無くともそのつもりです。」

数秒睨みあつた後互いの召喚器を引き抜く。

「カエサルツ」

「プロメティウスツ」

「二人共すごい気迫だ…」

「だつてリスクが…」

「いや、違う。」

「？」

「リスクなんか関係無いただ単に戦いを楽しんでる。」

「『ジオダイン』」

「ふん当たりませんよ。」

「『ゴッドハンドツ』」

「甘いー。」

互いの攻撃を避け動き回っている両者の動きが止まる。

「ウォーミングアップは、このくらいでいいでしょう。」

「ああ、十分だ。」

「じゃあ本気で行きますよ。」

そういうと水無月の田付きが変わる。

「ふん、来い！返り討ちにしてやる。」

真田も負けじと挑発する。

「プロメティウス…『レフトハンド』」

水無月から出たプロメティウスが左下の腕に炎を溜め地面に叩きつけ炎の衝撃波を全体に飛ばす。

「全体攻撃か…ならカエサルツ『デッドエンド』」

カエサルの大剣で地面を削り土石流を作り相殺する。

「やりますねえ、『ライトハンド』」

次は右下の拳に炎を集め平手打ちの要領で火球を飛ばす。
(さつきより早いな…)

紙一重でかわす真田

「まだまだ行きますよ。『ライトハンド』」

「カエサルツ『マハジオダイン』」

「そんなんじや防げませんよ。」

「確かに…だが一秒時間が稼げれば十分だ！『ジオダイン』」

「しまつ…ぐおつ！」

真田の放った雷が直撃する。

「なるほど、目暗増しですかやりますねえ。」

「それも有るが時間稼ぎだ雷は避けれんからな。」

「なるほどね…だけどこの距離ならあなたも避けられませんよ。『レフトハンド』」

「不注意に近づきすぎたか…『ジオダイン』」

目の前の炎に雷を落とすが炎は衰え無い。

(くつジオダインじや足りんか…)

「モロに食らつたあなたに勝ち田は…－！」

土煙のを見て勝ちを宣言しようとすると、その土煙から真田のカエサルが飛び出て来る。

「『テラジドンンド』……」

「何ー！くつ……案外タフですね。」

「まだまだ負けてられないぞ。」

「次こそ決めますよ……」

「決められる物ならな……」

「二人共す』……。」

「だけどまだ両方本氣出して無いんじゃ……」

「えつあれだけやつて！？」

「真田さんの本氣は知ってるからわかるし瞬も本氣出すって言つてたけどまだ出して無いな。」

「水無月君は何でわかるの？」

「あいつは昔から本氣出すときは田付きだけじゃ無くて空氣も変わるんだ。」

「空氣ね~」

「そりゃ、わかりやすいんだ！」」「居ても感じのほど……」

「……」

「4連……」

「来るか！」「

「『ライトハンド』ッシ

「何だと！？」

四本の腕全部に溜めた炎を一気に打ち出す。

「……これは最後まで使いたくなかったが致し方ない！……（何かするきか……）

「うおおお力エサルツ『メギドラオン』」

力エサルが右手に持つ球体を上げると中に三つの光の球が現れ回転しながら火球に突っ込んで行く。

「メギドラオンつて！」

「そんなおどろかなくとも……」

「いやだって。」

「SEESのメンバーは、全員使えるよ。」

「そういえば乾も使ってたね。」

「あれ？ 僕使った事あつたっけ？」

「いやほら寮の近くに敵が来た時……」

そこまで言つてその時天田がキレてたのを思い出す。

(あつ…まずい。)

「あ～あん時かーそういうえば使つたね。」

「乾記憶有るの？」

「えつ有るに決まってるじやん何で？」

「いや、あんなキレたのに次の日普通だからてつきり一重人格かと

……

「そんな訳無いでしょ……」

「あー要らん気遣いしたー」

「たまにはいいんじゃない？」

「……何かむかつく~」

「バアアアアン!!」

「…相殺したか。」

「安心するのはまだ早いですよ…『ゴッドハンド』」

「そんな物きか…」

見ると通常のように上から落ちて来る物ではなく、プロメテイウスの左上の腕が光っている。

「…そんなんありか。」

「有りです…行け。」

「…直接攻撃だと！ 全く常識が通じん奴だな。『マハジオダイン』」

「また目暗増しですか無駄ですよ。」

拳は一直線に真田に向かってくる。

「くそつ『トッシュンド』」「

「そんなんじや防げ無いでしょ。」

「別に防ぐわけじゃない。」

そういうとカエサルは真田の方に向く。

「何を…」

そしてそのまま真田の足元へデッジンドを食らわせる。

「ぐおっ…」

後ろへ吹き飛ぶ真田に水無月の「コッシュンドの風圧が重なり大きく飛ばされる。

「ぐあつ…成功だ。」

「全く…常識外れはあなたの方だ普通自分に攻撃しませんよ。」

「あ…だがまともにコッシュンドを食らひよりました。」

「お互いダメージが有りますしそうそろ最後にしません?」

「…良いだろ?」

互いに呼吸を整えると瞬時に召喚器を抜く。

「プロメティウス…『ラグナロク』」「

「力工サルツ『真理の雷』」

「ドオオオオオン」

「キヤアツ!」

「おわつ!」

「終わつ…たの!」

「いや、これからだ!」

「うああああああ…」

「はあああああ…」

一人の掛け声と共に双方のペルソナにエネルギーが集まっていく。

「うおおおおお力エサルウウ『カイザーフィスト』オオ」

「はああああプロメティウスツ『フレアライザー』」

雷の力を右手に溜めた力エサルと最後の腕に炎を纏うプロメティウスが互いの拳をぶつけ合つ。

「うおおおおおああ…」

「はああああああ…」

その場は、強力な閃光に包まれた。

「…どうなつたの？」

「わからない。」

閃光が晴れると一人が立つていて。

「…引き分け？」

「真田さん…俺の勝ちです。」

「くそ…もう少しだつたのにな…」

「バタッ」

「真田さん!!」

「ちょつ麗奈!!」

二人が駆け付ける

「すごいな真田さんに勝つなんて。」

「…」

「水無月?」

「…危なかつた。」

「えつ?」

そして水無月も倒れた。

「あれ？ちょっと！」

「どうなんだ…これ。」

「えっと救急車！」

「待って！桐条先輩に連絡した方が早い。

ここじゃ圈外だ、電話して来るからちょっと待つって。」

「うん、わかった。」

天田は走り去つて行つた。

Episode 15 Existence (前書き)

今回、会話が主 + 長めという風で結構読みにくいくらいです。

「…………」

水無月は、見知らぬ場所に居るのに気が付く。
(…白い…天上?)

周囲を見渡すと見たことが有るような気がする。

「…病院? つてことは…辰巳記念病院か。」

「ガラツ」

音がした方を見ると一人の男性が立っている。

『 よう、気が付いたか。』

「 真田さん! 起きてたんですか。」

『 ああ、俺はお前ほどのダメージはなかつたみたいでな。』

「 ははは… フレアライザーは、遠距離技ですからね近距離だと威力
が半減するんです。」

『 なるほどな、どうりで俺の方が軽い訳だ…ん? 待てよ半減してあ
の威力なのか!!』

「 あの威力つて…結果的に真田さんの方が上じやないですか。」

『 まあそうだが…けど遠距離ならば!』

「 あの状況じゃ近距離戦しか無理ですよ…つてことド真田さんの勝
ちです。」

『 納得がいかんな…』

「 はいはい二人共そこまでにして。」

「 まだ戦いの話しじてるんですか。」

『 西条、天田。』

「 真田さん最初の目的忘れてません?」

『 目的?…ああ果たしたぞ。ただ俺的に納得いかんがな。』

『 いや、そうじゃ無くてですね…駄目っぽいねこりや。』

「 桐条先輩の予想大当たり。」

『予想？勝負の結果か？悪いがうやむやになつててな……』
「ああーもう、さつきのもそれも全然違うわよー！」

『…………』

『…………』

「そんな怒らなくて……も。」

場を落ち着かせようと天田が口を挟むが西条に睨まれる。

「えつと水無月君。」

「は……はい。」

「今日、私達の寮に来てもらひから。」

桐条先輩から話しが有るの。」

「あのー 一つ聞いても良い？」

「……何？」

「それって拒否権……」

「無いわよ。」

「…………はあ。」

「てゆーかあんた、仲間に成りたいんだつたら拒否権とか言つてる場合？」

「それとこれとは話しが別だろつ！桐条グループですら恐れ多いのに、その社長と話しあり出来んわ！！。」

「…………」

『…………』

「ですね。」

贊定する一人に睨みを効かす。

「そこ……何か言つた？」

『……天田、俺達何か言つてたか？』

「いえ、何にも。」

適当に呟わす一人をジト目で見ながら空氣を凍りつかせる一言を発する。

「あつ言い忘れてたけど、もし来なかつたらその時は……」

「そ、その時は……」

「“処刑する”って。」

「『処……処刑』」

「で、でも……俺なんかまだ具合悪いな～」

「大丈夫、さつき先生に聞いたら今すぐにでも退院できるって。」

引きつった二人を見て断るが軽く打ちのめされる。

「じゃやつこう事で……よろしくね～」

彼女が出て行つた後真田に処刑の意味を聞くと三人共暗くなり看護師さんに心配されながら重い足取りで出て行った。

（巖戸台分寮）

「…………」

『…………』

「…………」

「…………」

まだ処刑をひきびり暗いまま寮の前に立ります。

「えつと……やっぱり行かなきゃ駄目ですか？」

『ああ、お前が来ないと俺達が処刑される……』

「……行きますか。」

目配せして扉を開ける。

「おっよう！来たか新人。」

「順平さんか……脅かさないでください。」

「お、おっ……どうしたお前ら何か暗いぞ。」

「それが……処刑の一言で。」

「おい……処刑つてマジか……」

おどけた順平も処刑の言葉に暗く凍つつく。

「…………マジです。」

「…………そつか。」

『……だが安心するのはまだ早いぞ。』

真田の視線には麗奈がいる。

「あつ三人共来たんだ。」

覚悟を決めた三人が麗奈の方を警戒しながら見つめる。

「何で睨む？ま、いいや“氷の女王”がお待ちだよ。」

そういうて階段を指差す。

『フウー…よし行くぞ。』

「…わかりました。」

「覚悟は出来てます。」

「三人共頑張れよ！」

「よくわからないけど頑張つて。」

意気込む三人にエールを送る順平と凌辱。

『おう。』

「ありがとうござります。」

「行つてきます。」

そのエールに答えゆつくりとけど確実に一歩づつ上がつていった。

（4F）

『…着いたぞ。』

「ここの…なのか。」

「ああ、この先にいる。」

『よし！開けるぞ。』

「うつす。」

「了解です。」

『コソコソ…美鶴つ俺だ。』

「明彦が…入つて來い。」

「ガチヤ。」

扉を開け見渡すと四人の女性が座っている。

「えらい遅かつたな。」

『い、いろいろとあつてな…』

「…まあ良いまずわ皿己紹介と行こう。」

私は 桐条 美鶴だつ以後よろしくな。

「はあ…どうも。」

「私 岳羽 ゆかり よろしくね。」

「あついえ、こちらこそ。」

「アイギスです。

よろしくね。」

「外国の方ですか？」

「いや、そういう訳じやないんだが…まあおいおいな。」

「はあ。」

「山岸 風花 です。」

「前にも会いましたね。」

「さて、君の方もしてくれないか。」

「ああ、はい 水無月 瞬 です。」

「さて早速だが、君の意思を尊重し仲間にすることに決めた。」

「俺精一杯やりますんで、これからよろしくお願ひします。」

「…頼もしいじやないか。」

「いえ、そんな。」

「謙遜しなくともいい、話しに寄れば明彦を避けたらしいじやないか。」

「それ本当ですか！？」

『ああ、運が悪ければ重傷だな。』

「そんな大袈裟な…」

「全身火傷だる…十分重傷じゃないか。」

「そんな強いの？」

「いや、それでも…」

「前まで仲間だった物に躊躇無くラグナロク打ち込むくらいですか
ら…」

「なるほど、かつての仲間でも敵にまわれば容赦無しか。」

「それは天田達をかばつ…」

「もうその辺にしませんか?」

「そうだな。」

「じゃあ下降りよつか。」

（117）

「彼を正式に入隊させる事にした。」

「どうも、水無月 瞬です。」

「おひ、よひしくな。」

「よひしくね。」

「あつ、そういうやお前真田さんとやり合つたつて?」

「まあ…一様。」

「真田さん負けたつてほんとか?」

『ああ、奇しくもな…』

「いや、あれは負けたつて言つより共倒れでしょ。」

「うん、二人共倒れたしね。」

「そういやお前ら見たんだつけ。」

「ええ。」

「まあ。」

「良いなう俺も見たかったな真田さんの倒れる所。」

『……喧嘩売つてるのか。』

「それなんだが…」

「ソンシィーン」

「御令嬢、お届け物です。」

「そうか、『』苦労。」

「でわ、私はこれで。」

「ああ。」

使用人は出て行つた。

「…なんすかそれ。」

「ん？ これか？ これは、さつき話しに出た明彦達のビデオだ。」

「えつマジっすか！ 見たいっす見たいっす。」

「本来これは、明彦と彼の力について検証するために送らせたんだが…」

皆の期待の視線が集まる。（主に順平）

「…よし皆で見よつか。」

「よつしゃー！ ありがとうござこあす。」

「見たい人は作戦室に集まつてくれ。」

「うしつ！ 行こうぜ凌辱。」

「ちょっと待つてよ順平！」

準備のために席を立つた美鶴と風花に続き順平と凌辱も立ち上がる。

「私達も行こうよ。」

「そだね。」

順平達につられゆかりとアイギスも立つ。

「あれ？ 麗奈ちゃん達行かないの？」

「私は、生で見たから善いや。」

『俺ら当事者は、残るさ。』

「僕も見たんで善いです。」

「じゃあこいつか。」

「うん。」

4人で見送つたあと真田が水無月に話しかける。

『どうだ？ 此処は。』

「なんてゆうか女性が多くて華やかですね。」

「賑やかでいいでしょ。」

「まあね、それにこのデザイン。何処を撮っても画になる…」

麗奈の問いに答えながら、携帯をカメラにして周囲を写す。

『このデザインは、桐条グループが力を入れたらしいからな相当な物だぞ。』

「へー桐条…さすがといつか何といつか。」

「そういやさ、行く時処刑がどうとか言つてなかつた?」

「それっぽいのはなかつたけど…」

『ああ、もし処刑されれば今頃凍り付かされ全員で解凍の真っ最中だな。』

「　　」

「…えと、とりあえずこれからよろしくねつ瞬。」

「…ああ。」

また新たな日常が走り始めた。

Episode 16 Certain 1st (前書き)

何か今回やつつけ仕事と言つが、最後の方投げやりっぽくなつてしまふけど気にしないでください。

とある一室

殺風景な室内には備え付けの机とベッド、無造作に置かれた鞄が静寂に包まれた空間に溶け込む。

その静寂を演出しているのは、何も家具だけでは無い…こここの住人でさえ空間の一部に過ぎない。

一人の少年がベッドの上でうなされている。

「…うつ…うう…」

少年の唸り声は相当な物で、普通なら誰か駆け寄り「大丈夫?」と声をかけるだろうが、少年の声も一般的な考えもすべて静寂に包まれていく…

(此処は…何処だ?)

(俺は確かに寝て…夢か?それとも…)

[…現…実]

(現実?此処は察じやないようだが…)

[お前…に…とつて…の…現実]

(俺にとつての現実?どういう事だ。)

[その…うち…わ…かる…さ]

(おい!…投げやりかよ。)

周囲を見渡すが自分以外何も居ない。

(…俺一人でどうしようと?)

[…ヒック。]

(泣き声…か?)

〔どうして皆…僕をいじめるの?〕

〔おこおこ、どうした坊っちゃん…〕

その子供に声をかけるが顔を見て顔が引きつる。

(嘘だろ…何で。)

〔おじちゃんも皆も…嫌いだ。〕

(何…で…俺がいる?)

〔…僕をこじめる人なんていなくなつちやえ。〕

(やめやめ…)

〔全く、あの疫病神を預かる事になるとば…〕

(やめやめ…)

〔来るなー!〕の化け物…〕

(…やめやめ…)

〔もう…嫌だよ。〕

『狂乱せよ。』

〔えつ…〕

『血りの心に従え。』

〔僕の…心…〕

(駄目だ…)

『…狂気に従え。』

〔皆嫌いだ…〕

(やめぬ……それ以上は。)

「あんな家族ならいらない……あんな友達もいらない……」

『……己に……従え……』

「全部……切り捨てて……」

『……我的名を呼べ……』

(眞つちや……駄目だー)

〔ペ……ル……ソ……ナ……ンキ〕

『……狂気に、従え……』

「くつ……はあはあ、夢。」

氣づけば、先程の静寂の中静かに時を知らせる。

「2時……嫌な時に起きたな。」

力チ力チと音を立てる時計を手に取り呟く。

「まあ……影時間に起きなかつただけ増しか……」

「「ンシ「「ンシ。」」

突然のノックに壁に立てかけている刀に手を賭ける。

「……誰だ？」

「あと、僕だけど……」

「……天田?……どうした?」

ノックの正体が知り合いと解ったため刀を壁に戻す。

「いや、すんげーうなされてたからさ。」

(さつきの夢か……)

「えつマジ俺うなされてた?」

「ああ結構な……」

(隣まで聞こえたのか…)

「そうか、だが俺はもう大丈夫だ心配してくれてありがとうよ。」

「そつか…またなミズキ。」

「おひ。」

一人の会話が終わりまた寮内に静寂が訪れる。

（朝）

「…一度寝は、朝がきつこな。」

軽く愚痴りながら支度を済まし廊下に出ると天田と鉢合わせる。

「よつ！」

「おう。」

「いやー昨日は、焦つたよ。」

「…そんな酷かつたのか?」

「うんまあ。」

「どんな感じ?」

「…やめろ…とか。」

（あの夢のまんまじやねーか…）

「何の話しー?」

階段付近で麗奈も加わる。

（…めんどくさい奴が来たな。）

「…今、何か悪態ついたでしょ。」

「さあ、きのせいだろ。」

「ふーん…で何話してた?」

「俺が怖い夢見てうなされてたつー話し。」

「怖い夢でうなされるって…あんた以外に子供?」

「ま、そういう事にしといてくれや。」

すたすたとロビーに去つて行く。

「…軽く流された!」

ロビーには、水無月がソファーを陣取り新聞を広げている。

「あれ？ 私達だけ？」

昨日の人達がいなく、ガラつとしているロビーを見て疑問を投げ掛ける。「ゆかりさんとアイギスさんは、桐条先輩と一緒に仕事へ、風花さんは学校。」

「真田さんは？」

「ロードワークだとよ、さつき行つたばかりだからしばらく帰つて来ねーよ。」

「そんなん…」

うなだれてソファーに座りこむ。

「残りの一人は、寝てるだろうね。」

「つてことは、やっぱ私達だけか…」

「順平さんでも起こしてこれば？」

「そこまでしたくなー…」

隣を見ると一枚目新聞を読んでいる水無月がいる。

「何枚読む気よ…」

「ん、全部。」

水無月の視線を見るとまとめられた新聞コーナーがある。

「よく読む気になるよね。」

「新聞は大事な情報元だ、お前みたいにスポーツやテレビ欄しか見ない奴にはわからんだろうがな。」

「なつ…」

「それにしてもさすが桐条だな日本どころか世界中の新聞がある。その言葉を確かめに新聞コーナーに行くとその中に英字新聞を見つける。」

「…マジッ。」

「さて、そろそろ時間だ行こうぜ天田。」

「あ、ああ」

「ちょっと、置いてかないでよー。」

キーンコーンカーンコーン。

「午前も無事終わったー」

「さてと、さっさと昼食べて午後の予習でもするか…」

「…もう授業の話し。」

昼時で賑やかな教室で、一人の会話が弾んでる。

「そういや今瞬つて何組?」

「瞬…ああミズキか、B組だよ。」

「…今の間何?」

「ミズキのこと名指しで呼ぶ奴初めて見たから。」

「ふーん、まあ良いや今から呼びに行くから。」

「そう、頑張つて。」

「あんたも行くに決まってるでしょーそれにご飯食べながら勉強するなーー!」

「うわつ…何すんの!」

天田の右手にパン左手に参考書のスタイルにツツコミを入れる。二人が出てつて静まる教室。

「ねえ、やっぱりあの二人仲良すぎない?」

「やっぱ付き合つてんのか?」

「くつそー俺の麗奈ちゃんを。」

「しかも優等生の天田…」

「やはり勉強できる奴の方がモテるのか…」

「俺も勉強しようっかな。」

一方B組

「で、こつからどうすんの?」

「どうつてパパートと行つてパパートと 連れて来る。」「誰が?」

「もちろんあんた。」

「無理矢理連れて来てそりゃ無いんじゃないの?」

「無理矢理つて昔馴染みでしょ。」

「連れて来るつて言い張ったのは君だろ?」

「そりゃ そうだけど……」

「てか、一人で行けるのに何で僕連れて来た?」

「何でつて……」

「今更ながら一人で行くの怖いとか言つたら本氣で怒るからね。」

「天田君……いつもと違つて黒い……」

「ああ、黒いよでもその辺どうでもいいからさ、速く連れてきなよ。」

「……わかつたわよ。」

意を決したのか取つてにてをかける。

「ガラガラッ!」

「失礼しまーす。」

B組の男子達は、いきなりの来客にざわめく。

最初軽く周囲を見ていたが有る一点に向かい歩き出す。

「水無月君、えと私達とお昼一緒に食べない?」

「…何で?」

「何でつてほら…いろいろ有るでしょ。」

「それ自体は、良いけど動くのめんどくさいんだよね。」

(こいつ…)

けだるそうな目で麗奈を見ていたが外に天田が困り果てた顔でこちらに何かを訴えてるのを見て動き出す。

「しゃーねえ、行くか。」

そつ言ひますたすたと出て行く。

お昼時で騒がしくも楽しげな廊下を三人の人影が揺れる。

「で?どういう流れでこうなつた訳?」

「さあー、僕に聞かれてもねえ。」

「なんだ、お前も知らねーのか。」

「そんな知りたいならセーの常識知らずのお姫様にでも聞いたら?」

「…誰が常識知らずよ。」

「天田君、今聞きました?自分に都合の悪い所だけ訂正したよ。」

「随分都合が良い耳を持つていてるんだねえ。」

「ああ、もうつるさい!」

「逆ギレしてきたぜよ。」

「ほんと野蛮なお姫様だこと。」

黒天田とノリが良い水無月一人の攻撃に耐え教室に着く。

三人で席に着き急いで食べる。

「そういうやさ朝怖い夢見てうなされたって言ってたけど、内容は?」

「…俺が知人を殺す夢。」

「えつ……」

「……嘘だろ?」

「嘘だよ、当たりまえにな。」

奇しくも楽しい時間が過ぎているのを感じる自分がいた。

Episode 16 Certain 1st (後書き)

今週の土日から来週の木曜辺りまで定期テストで投稿できませんのでご了承を。

Episode 17 A heart to waver (前編)

どうも水素です。

やっと暗黒のテストDaysを抜けましたいやー長かった！
ところ訳で、ですね本日から執筆再開するのでよろしくお願ひします。
す。m(ーー)m

三人は、ゆったりと時間が流れる商店街を歩いている。

「……」

「……」

「えーと…」

心なしかきまづこ空気が三人を包んでいる。

「あつほら、ワック見えてきたぜ…」

「あ…ああ」

「……うん」

水無月は、先程までのしまつたといふ顔を戻し話して乗つかるが、西条はまだ申し訳なさそうな顔をしている。

「ど、とつあえず座りつけ天田。」

「えつ…あ、うん席取つて来るー…」

「……うん。」

あまづこ空気のまま席に座る。

「わーい、何食べる?…」

「……」

「……」

あまづこ空気で包まれているせいかワックポテトは普段よりも温っぽく感じる。

瞬(やつぱ俺の話しあげてんのか?)
麗(悪い事しあげたかな?)

瞬（知人を殺した…なんてストレート過ぎたかな、でもちやんと）
まかしたしな…）

麗（瞬は、嘘だよって言つてたけど私わかるんだよね…何と無くだけど嘘じやないって。）

瞬（…もしかして嘘じやないってのバレタかな？ハア…自分の演技力の無さにため息が出るぜ。）

麗（私つて最悪だな…人の嫌な所無理に聞いた上に心配させるなんて…）

「「ハア……」」

思考が一人同時に止まる…二人同時にため息が出る。

「えつ。」

「あつ。」

「「…………」」

「「その……ゴメン」なさい」

「「…………」」

「何で君が謝るの？」

「何か悪い事しちゃったかなって思つたから…瞬は？」

「俺！？俺は何と無く謝つた方が良いかな～って。」

「人が、視線を合わせると周りの騒がしさは消え静まる。（不思議な感じ…）のまま彼の瞳に吸い込まれそう。」

そう思うと瞬の顔が近付いて来る感覚がする。
(えつ…)

そこで横からやじが飛び周りの静けさが戻る。

「へえー二人がそんな関係だつたとは〜。」

「バツ…！」

直ぐさま声の方を向くとニヤニヤした天田がいた。

「なつ…！…いや、ちがつ…！」

「ハイハイ…そんな豪快にキヨドら無くとも大丈夫だから。」

「——! / / / だから違うてばああーー。」

「大声を上げると逆に怪しく見えるからやめたほうがいいよ？それ

そう言われ周囲を見ると客の視線が自分に集まっていた。

原作による

「で? 一つから好きなの?」

「だから違つ！！」

…ああ、メンズすかに本人の前じゃ言えないか。」

「...はたまた」の「た」が「たま」の「た」に置き換わる。

「天田、余り女子をハジめちや駄目だぜ。」

「なつ！」

別にいじめてる訳じゃないただ話を聞いてるだけさ

「ハザウチ一瞬はつぱ子をなつ」

「お前」は悪一が俺に安一挑発はきかんぞ。

「何だつまんないの。」

「まんなく悪かたな」

思にヤモリの用意たり此ノシが

携帯を開くと先づ一時を過ぎていて、

「んじゃ、出ますか。」

三人は、店を後にした。

その三人が出た後一人の少年が、ワックから出てくる。

「スノーフレーク、麗奈。予想以上の美しさだ。」

「…彼女が欲しい！僕だけの物にしたい。」

不気味な少年は足早に進んでいくが足が止まる。

「だが邪魔がいる水無月 瞬、彼女に近付く虫けらめ…僕が退治してやる…そうだ、ついでに天田とか言つハエも一緒に潰してくれる。」

ただでさえ気味悪い路地を少年がさらに不気味さを作り出している。そこへ一人の男が近付いていく。

「コツコツコツ」

『あなたの願いはそれですか…』

「なつ…お前は。」

『フフ…奪いたいのでしょうか、愛でたいのでしょうか。』

「知らん…お前何か知らん！」

『さあ…ためらひ必要は、ありませんよ。』

「く、来るな！」

『私があなたに『えた力で…』

『何もかも強奪してしまいなさい…』

Episode 17 A heart to waver (後書き)

この辺から前にも書きましたが“ファミ通クリアコンピックス”から出ている「テビルサマナー葛葉ライドウ対ゴドクノマーベリ」の設定やら台詞やらを抜き出したりします。

Episode 18 The suffering of the empero

長くなつたので会話パートと戦闘パートに分ける事にしました。

（翌日）

ロビーに珍しく全員が集合する。

「氷死体？」

『ああ、ポートアイランドの裏路地で路上オールしていた若者の人が氷柱になつて見つかつた。』

「氷死体つて…」

「ゆかり、顔青いよ大丈夫？」

「だ、大丈夫に決まつてるでしょ…」

「怖がつちゃつてまー」

「なつ！こ怖がつて無いつつの…！」

「へーゆかりさん」ううの苦手何だ〜

「うぐ…」

「ま、まあまあ順平君も凌辱君もその辺に…」

「ハハハ、ところで質問なんすけど人間が簡単に氷塊になるんすか

？』

「「「ならない」な」でしょう」

順平の問いに三人が一斉に答える。

「そ、そなんすか…」

「でも人間の構成物の半分は水つていうじゃないですか…」

「確かに体内の水分だけを氷結させるのは理論上可能だが人一人を氷柱にするのは無理だ。」

「でも理論上可能何ですね？」

「あくまで体内全部が水分としたらだ。」

「でもできるんですね?」

「……難しいな。」

「人体には水分だけじゃなくカリウムやナトリウムなどの鉄分、脂肪などの有機物があるからそれらを氷結させるには絶対零度下の冷気が必要なの。」

「絶対零度なんて自然界じゃあ南極の万年雪の下くらいしか起きないぜ。」

「前テレビで液体窒素で氷点下がどうとか言つてましたけどそれじゃ無理なんですか?」

「液体窒素なんて使つたら鑑識にバレテニユースになつてるぞ。」「『だがニユースは原因不明の氷死体としか言つていない、という事は…答えは一つだな。』

「ああ。」

「ええ。」

「そうですね。」

『この事件の犯人は…』

「犯人誰っすか!? わかつたんすか!!」

「伊織、今それを明彦が言う所だ。」

「順平さん急に話しへ入つて来ないで欲しいです。」

「だつてよー…さつきまで難しくてついていけねーよ。」

「だからつて急に割り込むのはどうかと思うけど…」

「じゃあゆかりっち分かったのかよ?」

「そりゃ全部は分からぬけど…だからつて急に騒ぐなって話しよ!」

「二人共喧嘩しないで!」

順平とゆかりが喧嘩し始め風花が止めようとすると止まらない。

「伊織、岳羽少し黙つてくれないか…」

鶴の一聲ならぬ美鶴の一聲で「ピタッ」と止まる。

「明彦、
続きを。」

『あ、ああさつきの続きだが犯人は大方ペルソナ使いだ。』

「それ本当ですか！」

ああ自然界では起こりえなし現象 人為的な根拠が無い氷塊

〔ブウーツ ブウーツ〕

話しが終わる前に警戒ブザーが鳴り響く。

「私だ。」

ました。』

「何！？本当に山岸！？」

「ハイツ、『ロノ』」

「分かに三じた 場所は が 一上アハニシヤニ禪の裏路地とその周邊です。」

「なるほど……ナニ一つもビリッタハゼ」

「あつらはつ」マフラーが
「へへ、今夕は腕が鳴るぜ！行くぞ魔王！」

『たくつ あんまりはしゃいでへ

「分かつてますよー」

「待つてよ順平！」

「……たゞ一ぐ本業は分かってんのかあい」「弘達あむにい。」

「うん、そだね。」

「あの一首なんこれから戦闘が起るんで分かつてます？」

一分かってるからこそ、少しでもリラックスして行きたいんだよね。

〔瞬君…〕

「さーて俺らも行くかーあんまり先輩方を待たしちゃ遅けねーしな。

「

「そうだな。」

「ちょっとー何でいつも私を置いてくのよーー。」

「お前が動くの遅いんだろ。」

「女の子は、あんたらと違つていろいろ準備があんのよー。」

「戦場に行くのに何の準備があんだけ…死装束か?」

「何で死装束なのよ!」

「じゃあ、アレか? ジャンヌ・ダルクみたいに甲冑でも付けるのか

?

「それも違うわよー。」

『どうした? 行かないのか?』

『明彦か…いや何かな微笑ましくなつてな。』

『あいつらか…確か 岳羽や有里もあんな感じだつたな。』

『そういえば、そつだつたな…懐かしい。』

『あいつらもまた俺達みたいに仲間を作つて行くんだろうな…』

『…そつだな。』

賑やかに出ていく二人を見つめる一人、どこか寂しげにだが嬉しそうにも見える。

『真田さん桐条せんぱーい何やつてんすかー』

『早くしないとおひてっちゃいますよー』

『おわづ人の台詞取んじやねーよ。』

『良いじゃないですかたまには。』

『さてあいつらが騒ぐ前に行くか。』

『ああ、そつだな。』

二人は歩き出した。

Episode 18 The suffering of the emperor

そのうち戦闘パートも投稿します。

Episode 19 The suffering of the emperor

戦闘パートも、3つに分けました。

Episode 19 The suffering of the emp

～ポートアイランンド駅裏路地～

『反応があつたのはここか…』

「あれ？何もいないじゃ無いつすか…」

「そんなはずわ…山岸…」

「少し待つてください…反応は確かにそこから感じます。」

『全員辺りを警戒しろ…近くに居るが。』

その言葉に背中合わせに円陣を組む。
暗闇から一人の男が歩いてくる。

「おや、これはこれほどなたかと思えば貴方達ですか…」

『お前…なるほどな、今回も原因はおまえらか。』

「左様、さすが特別課外活動部…とでも言つておきましょつか。」

『褒め言葉として受け取つておいつ…だがお喋りは此処までだ…!..』

真田が走り出し攻撃するが…直前に止められる。

『ちつ…』

バックステップで距離を取る。

「貴方の相手は私ではありませんよ。
クラウド…」

掛け声と共に男が現れる。

「後は任せましたよ……」

「……御意のままに」

そつ言つて牆間に消えむ。

『待て……』

真田が追おうとするが男が立ち止だかる。

「悪いがお前の相手は俺だ。」

『そこをどけえ！！』

『…………』

「退く気は無いか。」

『美鶴？』

「なら……力づくで通をせしむりつい。」

全員が臨戦体勢になる。

「その意気込みは買うが、俺にばかり構つてて良いのか？」

『……どうこう意味だ。』

「すぐに分かるさ……」

『なら何か起る前にお前を倒すまでだ！』

真田が動くと同時に他のメンバーも攻撃しようと動いた瞬間……

「バア――ン――」

爆発音が響く。

「おわっ……何だよ！」の音

「ちょっと何！？…どつか爆発したの？」

「何が起きてる…山岸！状況を！！」

「ポートアイランド駅前広場に魔力を感知…この感じ事件の犯人です。」

「事件つてあの氷死体の！？」

「氷塊の次は、爆弾かよ！」

「いえ、それはちょっと違うみたいですね。」

「…どういう事だ？」

「駅前に居るのは犯人だけですがその周辺に微量の魔力反応があります。」

「微量の魔力反応？」

「ハイ、広範囲に反応がありますからおそらく「ドクノマレビトの残党かと。」

「やつかいだな…よしチームを三つに分けるぞ、犯人側は高校生三人だ。」

「…了解

「了解です。」

「わかりました。」

「あの男は私と明彦、それに伊織、岳羽君達もだ。」

「うつす！」

「了解です。」

「残りは、残党に当たれ。…行くぞ！」

（天田・水無月・西条）

「…確かこの辺りのはずだな？」

「ああ、そのはず何だけど…」

「人どころか生き物がいるかも怪しいわね…」

「よし、三人別行動だ。俺はこのまま直進、天田は左、西条が右だ。」

「分かつた。」

「任して！」

「じゃ行くぞ！」

「おうー！」

……5分後

「いたか？」

「いや、いない。」

「うつちも駄目。」

「どうする？ もう一度行くか？」

「いや… 一度風花さんに連絡とろ…」

「うわああああー！」

「今の一… どっちから聞こえた？」

「えっと、あっちだと思う。」

麗奈が指差した方には、一本の細い道がある。

「ちつ… 見落とした！」

「良いから行くよー！」

「おおう。」

三人は、声のした方向に走り出した。
数分走った所で前方に人影を見つける。

「あれ？…一人？さつきの悲鳴、確か一人だけだったよね？」

「…」」れだから現場慣れしてない奴は。」

「…どういう事？」

「悲鳴が聞こえたのが一人つて事は、片方は犯人つて事だらうがよ

！」

「！」

「そんな辺り前な事もきづけないのか！！」

「……」

麗奈は怒鳴られ下を向いてる。

「…まあ良い着いたぞ。」

三人の目の前には取り壊し予定のビルが建っている。

「えつと、ここ。」

「おそらくな。」

「じゃあ、あのドアの向こうに…」

天田の言つた通り一本の通路の先にドアがある。

「…やーてどうする？」

「どうするも何も…行くしか無いでしょ！」

「殺人犯をこのまま野放しにはできない！」

「…行くぞ。」

三人はドアの前に立つ。

「じゃ開けるよ。」

「「待て。」

さも辺り前のようにドアノブに手を掛けようとする麗奈を一人が止める。

「な…何よ？」

「普通に開けるとか…馬鹿としか言ひようがねーな。」

「行動に移す前に少しばかり考えようよ。」

「なによ一人して…人の事バカバカいうんじゃ無いわよ。」

「…実際馬鹿だろ。」

「馬鹿じや無いわよ！あんたらが頭良すぎなんでしょ！！！」

「ハイハイ：分かった分かった俺達が悪うございました。」

「二人共お喋り止めて…行くよ。」

天田に無言で頷く一人。

「いい？321で行くよ、3…2…1…！」

天田のカウントと共に、水無月の足が動いた。

「つらああああ！！」

刹那、目の前にあつたドアが弧を描いて飛んで行つた。

「ガツシャアア…」

「…えつ」

「なつ…」

「ふう…」

驚く一人を尻目に一息つく水無月。

「何やつてんの…！」

「…何も。」

「…何も。じゃ無いわよ！何で蹴破る必要があんのよ…！」

「ハア…あんな、突入する前あんだけ騒ぎや待ち伏せされんに決まつてるだろ。」

「あつ…」

「だからそいつら蹴散らす感じでやつたんだが…」

「？」

田の前に居るのは、ひしゃげたドアと共に倒れてる恐そうな男達…じゃなく一人の少年だった。

「まさか単独犯とはな…」

「えつ…あの制服。」

「月光館…だな。」

言葉どおり月光館学園の制服を着た少年が、氷塊の前に立っている。

(氷塊…ちつ遅かつたか。)

「…お前が犯人か。」

「犯人？何の事だか…」

「とぼけるな！その氷塊…お前がやつたんだろ？」

「えつ…」

「そんな…」

西条は、口を抑え泣き声になり天田は唇を噛み締めている。

「さつあと白状したらどうだ？」「

「白状も何も…」

「俺は睨み合いが嫌いでね…何するか分からんぞ…」「僕はただの彫刻家の卵…それだけだ。」

少年は彫刻刀を取り出すと水無月に向かって投げ付ける。それを腰にかけてある刀で薙ぎ払う。

「やつと化けの皮が剥がれたか。」

「それは、お互い様でしょう…その殺氣私と同類ですよ。」

「悪いがお前みたいな三下と一緒にすんな虫ずが走る…」

双刀を逆手に持ち放たれた彫刻刀を弾きながら突っ込む。

「ちつ…」

少年も応戦するため单刀を持つがリーチが違いすぎて話しにならない。

「オラオラどうした?…さつきまでの威勢が無いぜ!」

「くつ…くそ!」

单刀を突き出すが軽く交わされ横つ腹に蹴りを喰らい後ろに飛ばされる。

「ぐつ…」

「何だ経験者相手は、初めてか?」

「ならば…『フリーード』」

少年の背後に氷でできたゴーレムが現れる。

「行け！『マハブフダイン』」

「なつ…マハダイン系！！」

「少しばら楽しめそうだ…プロメティウス『マハラギダイン』」

ゴーレムの放った広範囲魔法も難無く相殺する。

「まだだ！ゴーレム『絶対零度』」

「この技…事件の！！」

「人を氷塊にするあれか…だが俺にはきかんぞ。」

「あんたに聞かなくとも、あっちの二人はどうかな？」「

「しまつ…天田！！」

「それにあっちに注意が行ってるあんたも同じだ。」

「…狙いはこっちか。」

「そうさ…『極寒凍結』」

(ちつ…プロメティウス…)

一人に冷気が迫っている。

「瞬！！」

「早く逃げて！」

「逃げるって何処へ！？」

「何処でも良いから…早くしろ…！」

「…分かった！」

麗奈が駆け出したが冷気がすぐそこに近付いている。

「…仕方ない。」

「ドンツ」

「えつ…」

間に合わないと悟ったのか天田が西条を突き飛ばした。

「ぐつ…乾…！」

「くつ…カラ…ネ…」

天田は冷氣に包まれた。

「瞬！…乾！…そんなん」

凍った天田の側で俯く麗奈。

「二人共…私のせい…」

彼女の目から涙がこぼれる。

「やつと邪魔が消えたか。」

「あんた今…何て言つた？」

「何だ聞こえなかつたのか？…ならむつへ一度言つてやつう邪魔な、」//

が消えたとな。」

「…もない。」

(…もない。)

「さあ西条、私の者にならんか？毎晩愛でてやるわ。」

「…許さない。」

(…許さない。)

「…何だ？」

「許さない！…」
（許さない！…）

麗奈の体が金色に包まれていく。

「何だ…何が起きてる…」

「私の仲間を…」
（俺の仲間を…）

「私の大切な人達を…」
（俺の大事な仲間を…）

「絶対に…許さない…！」
（絶対に…許さない…！）

麗奈の体が完全に金色に包まれた。

（風花・コロマル）

「桐条先輩つその敵に、氷結は聞きましたアイギス達の応援に行つてください。」

分かった…岳羽も連れて行く、後は任せたぞ明彦。
『こつちはいいから早く行け！』

分かった…山岸アイギス達の元へ向かう案内を頼む
「了解です。

（中略）

その場から500m先に広場がありますからそこで合流してください

い。

了解だ。

「ワンワン！」

「口ちゃん♪どうしたの？」

「ワンワン！」

「やつちに何か有るの？」

口マルは北の方を向いて吠えている。

「やつちって確か麗奈ちゃん達…」
(まさか…麗奈ちゃん達に何か！？)

「コノ！」

ペルソナを召喚して口マルが吠えていた方を探る。

「お願い！間に合つて…居た。麗奈ちゃん後の一人は…」

山岸が見たのは、氷と化した後だった。

「そんな…いやまだ間に合ひついで…口ちゃん…」

「ワンシ！」

「一人を助け…」

…やない。

「えつ…麗奈ちゃん！」

…許さない。

「今、口ちゃん向かわせるからそれまで…」
許さない！

麗奈の体が光に包まれた。

私の仲間を…

「えつ？これって…」

私の大切な人達を…

「あの時のアイギスと同じ…」

絶対に許さない！！

「…有里…君？」

（天田・水無月・西条）

今、裏路地には氷付けにされた天田、水無月…その二人を氷にした犯人…そして金色に光る少女がいる

「何が…どうなつてる？」

「許さない。」

（許さない。）

「あんただけは…」
（お前だけは…）

「くつ…来るな。」

「絶対に…」

（絶対に…）

「来るなあああ！」

「許さない！…」

（許さない！…）

「フリードック！あいつを近づけさせんなーー！」

「汝の名は…」
(汝の名は…)

「オルフェウス。」
(オルフェウス。)

麗奈から出て来たオルフェウスは通常と違い赤くそして神々しい。

「『嘆きの旋律』。」
(『嘆きの旋律』。)

オルフェウスはゴーレムと対人し琴を鳴らした。

「ポロン…」

「ぐあああああ！」

男は頭を抱え込み倒れ、ゴーレムは碎け天田達の氷も溶けた。

「己の罪を思い知れ…」
(『己の罪を思い知れ…』)

Episode 20 The suffering of the emperor

最近、全くと言って良いほど時間が無く軽く放置せざるを得なかつたんですが、今日から再開します。

Episode 20 The suffering of the emperor

（天田・水無月・西条）

裏路地のビルの中に犯人を含めた4人が倒れている。

（…此処は何処だ？）

又もや不思議な空間に居る。

（確か俺は戦つていて凍らされて…）

〔戦なら終わつたさ。〕

（なつ…誰だ？）

〔ふんつ昔の相棒を忘れるとは…“今”に被れておるの。〕

（その声…炎鬼か！）

〔左様…〕

〔覚えておいでか。〕

（ちょっと忘れてたけどな…）

〔…まあよい、
しかしおぬし…〕

不様じやの。」

(「ぬせーよ。」)

「我と組んでいた時は、いんなんならなかつたのこの。」

(…何が言いたい。)

「また我と共に戦わんか?」

(どうこう事だ?)

「我をまたおぬしのペルソナとして共に戦つてやひといひつておる
のじや」

(…プロメティウスは、どうなる?)

「あの魔神か?…どうにもならんわ…ただ、今回みたいに危ない時に
は我的名を呼べ、それだけだ…」

意識がゆりくつと落ちていく。

「ワンコンコンコン…」

田が覚めると先程のコンクコードが田に入る。

「うむ…

わわわのビルか。」

「ワン！」

目の前には白い犬が居る。

「お前確か… ハロマルだつけ?」

۱۰۷

「……そんな声出すな。俺は大丈夫だ！」

ゆくつと起き上がる。

「さて、ほかの皆は何処だ？」

לעון ירושלים

卷之三

コロマルの所に行くと麗奈が倒れてる。

「クウン？」

「せい」

分かってんだよ王田マル、分かってんだけど……

男子が女子の体をしかも動けない体を触るってのは...ねえ?」

「不可抗力つて言われても…」

〔不可抗力かと〕

罪悪感しか得られない気がする。」

「とつあえず、エスケープロードが使えませんから外に連れ出して
ください」

「……」解です

決心すると麗奈を背中に抱きつい。

「あの～風花さん？」

ただ今、背中の感覚が敏感になつてゐる感じがするんですが。
気のせいでしょうか？」

「気のせいです、たあ、後ろのところですから頑張つてください
い」

「はい……」

「よーいしょっとー」

「お疲れ様です、じゃ今から使つか離れてね」

「へーこれが…

麗奈は白い光に包まれたかと思つと消えていた。

初めて見たな。」

〔無事移動完了〕です、次は天田君を起^いにしてください〕

「あつ… 天田忘れてた。行くぞコロマル！」

「ワン！」

一人と一匹は走り出した。

「おーい… 天田？」

「ワンワン！」

「返事くらいしろって… 冷た！」

天田の体は、氷のように冷え切つていてる。

〔まずいです！早く温めないと〕

「まずいって言われても…」

「ワンワン。」

「おつコロマルなんか有るのか？」

「ワン！」

「じゃ任せたぜ」

「アオーン…」

コロマルの体が青白い光に包まれていく。

〔コロちゃん、ペルソナは駄目…〕

「いや良い！ やれコロマル」

風花が慌てて止めようとするが、水無月がコロマルを促す。

〔BURRN！〕

倒れてる天田の数センチ前に火の玉が着弾する。

「熱つちーー！」

「ほら、大丈夫だ。」

「何が大丈夫だ何が！」

天田は今にも瞬に殴り掛かる勢いで怒鳴つている。

「そんだけ怒鳴れりや大丈夫だ」

「お前！…普通大火傷の重傷だぞ！…」

「大丈夫だつて、普通火傷通り越して即死だから（笑）」

「……」

天田はワナワナ震えてる。

「あり？どーした天田、 優等生が台なしだぞー」

「ふ……」

「…ふ？」

「ふざけんな————！」

「おわっ！天田がキレた！！

「ロマル逃げつぞ」

「逃がすか！？」

「待てや、『ラアーーー』

「フハハハ誰が待つか。」

不規則な鬼ごっこが始まった。

「ワンワン

ロマルは楽しそうに一人を追いかけて行く。

「アハハハハ…捕まえてご覧〜」

「…キモいわ！」

「何だお気に召さなかつたか…」

「当たり前だ…」

「なら、これならビードだ。」

召喚器を引き抜く。

「ああ、シラークの始まりだ…『プロメテイウス』」

瞬の周りに蒸気が舞う。

「熱つ…」こんな田暗増し効く……か

天田の田の前には麗奈が立つてゐる。

「なつ…ビーなつてんだ?」

「『やあ…ビーなつてゐでしょ!』」

「お前…ミズキだよな?」

「『その通り、俺は水無月 瞬 だぜ』」

「何でそんな格好…

まさかお前女装が趣…」

「『ひげよー』」

「じゃあ何でそんな格好で？」

「『あえて言つなりサービスだ』」

「サービス？」

「『そ。男相手に追いかけっこしてのもつまんねーだり?だからせめて格好だけでも。』」

「何だそれ。」

「ちなみに声は、地声だ。」

「その姿で、男の声出すなーーー。」

「その姿で?」

「あつ……」

しばらく沈黙が流れ。

「『アハハハつ本人にばらされたくなかったら捕まへて』『見つ』」

「なつ待て『うーー。』

「『ホラ乾一早く来無いと逃げちやつがー』」

「絶対捕まえる。」

「『そんな怖い顔してるとモテないぞ』

「...ニベ元ござひせ、アシ」

「『ヤルつて、乾私の事そんな目で見てたの……最低。』」

「…おお言え世一、アリバト」

『もう乾何て知らない！！』

「なにがよ」と待てよ! -

「…も、話しあげ無いて」

そんなん

卷之三

2

ノノノノ

な……何笑ってんだよ！」

『さういふ事ぢやないか』と、おおきな胸の元で、

「... プチッ」

「『どーした天田？顔が引き攣つてるぞー』」

「…そーいやミズキお前だつたなーすっかり騙されたぜ」

「『あれ? 天田くんもしかして怒つた?』」

「いいや…怒つちやねーな」

「『『ん、んつ…』』」

「でも…」の感情は怒るよりもキレるって感覚だ…！」

「うわーー！」

鬼ごっこ再開

「待たんか」「ラアー！」

「誰が待つかー！」

「お前に選ばせてやる。」

「何をだー！」

「今すぐ止まつて殴られるか…ペルソナで死ぬか…」

「どっちも嫌じゃー！」

「ぶつ殺す…『カーラ・ネ!!』」

周囲を走り回り逃げる瞬の後を雷が走る。

風花

〔天田君、水無月君、無事なら先輩達のサポートにつ
づく〕

新編一文典故 卷之二

■ ■ ■

「キノーン」

〔口せりゃん?

どうしたの？ そんな声出して

コロマルは、絶えず一方を見てる。

「？：あつちに何か有るの？」

「ロマルの見てる方向に意識を集中せるとギヤー、ワーッと
ハハ顔と共に一人の姿が、見える。

〔居た……口からやんありがとなつ。〕

「鬼ごっこ一人組」

「たすけてー」

逃げ回る瞬、その後方から橙の巨人共に天田が追う。

Г л а в а
Х е л п е

「……『イノセントアタック』」

「どわっ……

危ねーなクソやろうー殺す気かつーー。」

「今更、気付いたのか」

「（まぢー、あいつ目がマジだ。）のまじやそのうち捕まっちゃう。」「

「（正直、疲れてきた。でも、今更怒り冷めた何て言えないよな）

「（この状況どうしよう…）」「

一人が内心困つてると頭に声が響く。

「二人共一何やつてるんですけどーー。」

「がつー頭が…」

「何するんですか風花さん。」「

「何するんですかじや無いー。」この大事な時に何遊んでるんかーー。」

「えーとですね…いろいろと説が。」「

「言ひ訳何かしてゐ暇が有るならわざと援軍に行って来て下さい

！」

「「ハイ！！」」

二人は、アタフタと走つて行つた。

Episode 20 The suffering of the emperor

今日中にもう一話べらりと投稿します。

Episode 21 The suffering of the empero

何か最後らへんグダグダと言つた若干へんな感じに思ひますけどスルーしてください。

Episode 21 The suffering of the empero

（真田・桐条・岳羽・伊織）

真田と男が、向かい合つたまま動かない。

『お前の目的は何だ?』

「さつとも言つただろ?...足止めだ。」

『...悪いが、お前みたいな暇人に付き合つ程暇じゃないんでな、さつさとどいて貰おうか?!』

真田は、男に向かつて走り出す。

「つ明彦!/?考え無しに突つ込むな!!」

「あのー先輩。」

「岳羽?何だ!」

「真田先輩に釣られて馬鹿が一人突つ走りました。」

「.....」

（真田・伊織）

『はじめには、性に合わん!』

「へへへ、先手必勝つてね。」

真田と合流した順平が共に攻撃する。

「『わ』あおおおああ」

「ふんつ若にな…ぬああああ…」

西手で牽制される。

「おわつー。」

『わ…やはり一筋縄ではいかんか。』

拳を構え直し再び向かい合つ。

『順平！隙をみてまた仕掛けるべーー。』

辺りは静まり返つてこる。

『おーー返事くらーしきーー。』

真田が振り返るが順平は居ない。

『…順平？』

～岳羽・桐条～

「たくつあの馬鹿何処行つた」「うあああ」あれ?」の声…」

「岳羽！危ない！！」

「えつ……」

桐条が岳羽を引き込むと同時に、声の主が突っ込んで来る。

「一体何がどうなつて……つて順平!? あんた何で此処に?」

「痛つてて……ん？ ゆかりつち？ 何で……」

「いつちが、聞きたいわよー。」

うーんと 確かあのにかつにホツサソ!】 真田わんば!?

「黒いなうが、ううた」

「うーかあんた！意氣揚々と突っ走つてた割にすぐやられるってどういう事よ！！」

「じゃつがねーだろー！」

相手めちゃくちゃ強いんだからよ。」「

「ビーだが、相手が強いんじゃ無くてあんたが、弱すぎるだけじゃ無いの？」

「んだとー！！」

「何よーーー！」

「お前達ー喧嘩している場合かーー時と場所を考えろーー！」

（真田）

真田が先程から攻撃を仕掛けるが全部いなされる。

『クソツ…埒があかん』

「お前の力は、そんな物か？」

『…まだだ！…』

召喚器に手を掛ける真田

「出番だつ…『カエサルツ』」

真田から出て来たカエサルを見て男が、呟く。

「…なるほど、あの方が、お前と鬭わせるの理由が分かつた」

「どういう事だ！…」

「どうせとも、見ればお前も分かる…召喚『ポンペイウス』」

「（ポンペイウスとカエサル…）の二つの名で考えられる事は、

「つだけだ）

「ポンペイウス……なるほど、ローマ内戦の再現をしようとした時の
か？」

「正確には再現では無いな……の方は俺が勝つのを望んでいる。」

「お前らの悪い通りに行くのは癪だが……良こそ、サイを投げてやる
……！」

「行くぞカエサルっ『トリドンデ』」

「ポンペイウス…『コシドハンド』」

カエサルの剣とポンペイウスの拳がぶつかり合い周囲に衝撃音が響く。

「悪いが、お前のデータは把握している…『ブフダイン』」

真田に氷塊が放たれると横つ飛びで回避する。

「相性最悪だな……『ジオダイン』」

「そんなちんけな雷じゃ、たいしてダメージにならんだ…『マハブ
フダイン』」

「まざいな…『ジオダイン』」

「ほつ、防衛を捨てたかその心意氣お見事…『マハブフダイン』」

(手傷くらいしか負わせられなかつたか…)

「後は、任せたぞ伊織・岳羽…美鶴」

周囲を冷気が包み込んだ。

（岳羽・伊織・桐条）

「（明彦？）」

「どーしたんすか？」

「早く行かないと、真田先輩だけじゃ心配です。」

「ああ、すぐ行く。

（今、一瞬…）」

美鶴が歩き出した時周囲に轟音が響く。

「おー…今のって。」

（まさか…）

一人が美鶴は、走り出していた。

「ちよつ…先輩！？」

(妙な胸騒ぎがする…頼む無事で居てくれ)

三人が目にしたのは氷に飲まれる真田の姿だった。

「明彦？…返事をしろ明彦！」

「……そんな。」

「真田さん！ 真田さん！ 何で…畜生…！」

Episode 22 The suffering of the emperor

好きな技が、原作に無いのは、軽くショックですよね。

(何だ……！」
はせ）

真つ暗な空間で真田は横たわっている。

(とつあえず、此処から、体が動かん）

なんとか動かそうとするがびくともしない。

(手足は駄目か……指、駄目……おつと首もか……体！」と凍り付いた感じ
だな）

なんとか体をよじりながら、もがく事もできない。

(口づらの状況になると『弱になるな、心まで凍らされたか……）

(確かに子供の頃シンジに殴られた時もこんな感じだったな……

シンジ……お前もこんな感じだったのか？）

何も無い虚空に思いを飛ばす。

(なあシンジ、お前はどうして死んで“死”を受け入れたんだ？教
えてくれよシンジ……なあ、シンジ……）

真田の頬を一筋の水滴が伝つ。

(俺は、このまま死ぬのが怖い、自分の時間が終わるのが怖い、あいつらと離れるのが……)

(“怖いんだ”)

（岳羽・伊織・桐条）

美鶴が、真田の体を譲りしている。

「明彦……明彦……」

呼びかけても反応が無い。

「お前……ギリテーゐるぢねえ……」

「順平なんかと意見が合つ事なんて無いと思ってた。でも今回ばかりは……」

「——発騒ましてやうなこと気が済まない（ねえ）——」

「行くぞー・ゆかつちー……」

「言われ無くても分かつてゐる……」

「つかつか……」

「はああああ……」

順平が出した火急にゆかりの暴風が混ざり膨張して行く。

「『リックスレイド』

「何だと…？」

「俺達の怒りを！」

「仲間を傷つけられた痛みを…」

「『思い知れ…！』」

「『トリスアギオン』」

（真田）

（いろいろな事が、怖い、俺が居なくなるのも、あいつらと分かれ
るのも、俺のすべてが“死”的一文字で片付けられるのが怖い…）

真田の頬を伝つた涙が、ペンドントに触れる。

「怖くたつて良い。」

（…誰だ？）

「怖くたつて良いだろ？」

(「Jの姫... まさか）

〔それが... 死を恐れるのが、人間何だからよ。〕

(シンジワ -シンジなのかー)

〔.....〕

(答えてくれよシンジ... 僕は、Jからビヒリツヤいいんだーーー)

〔.....〕

(あの時、力だけじゃどうしようも無かつて分かったのに... また同じ過ちを繰り返してゐる。)

〔.....〕

(「こな俺はどうすれば良いんだー」)

「ガツーーー」

真田は、何かに殴られた。

〔せつときから、聞いてりやグチグチ弱音ばつか吐きやがつて... こんなならまだ昔のお前の方がまだマシだぜー〕

(グツ..... イテ H)

〔お前には... まだ守る物が有るだろ〕

(お前に殴りられるなんて、こつ以来だらうな……

だが、おかげで田が覚めた……)

〔礼なり俺じやなくリーダーに立つんだな……〕

(? もう一つ事だ)

〔どうしてお前…まあここ、それと行け。〕

(おこー・どうして事だ! つかやんと説明しやーーー)

〔ここから行け。桐條によろしくな……〕

(おこー…)

〔ああ、それと光りに従え。〕

(……光り?)

～畠羽・伊織・桐條～

「「トリスアギオン」」

男が巨大な炎に飲み込まれる。

「どうだ、あなたへしゃつー!」

「オレッチのフルパワーを喰らう……」

男が片膝を付いている。

「さすがに焦つたが……まだ耐えられる、威力不足だな。」

「……んなの有りかよ」

「ううそ……」

「種切れか? なら」ういちの番だな。『マハブフダイン』

地面が凍り付いていく。

「下が駄目なら上に逃げるまでー』『イシスツ』』

「おおう……逃げるが勝ちってか? 『トリスマギストス』

『逃がさん…』『ハッシュハンドル』』

上空に逃げる一人に追い打ちを掛ける。

「ハッハアー順平様にそんな物効くかー」

軽々とかわす順平。

「……確かに素早いな、だが。」

ゆかりの方を見て言ひ。

「やつちの女は、どうかな?」

「…危ねーゆかりつち…！」

「もう遅い『ゴッドハンド』」

順平が気付いた時にはゆかりに金色の腕が迫っている。

「えつ……」

「ゆかりつち…！」

めをつぶり顔をかばうが衝撃が来ない。

「…あれ？」

めを開けると目の前に凍りの壁が有り、ゴッドハンドを妨げている。

「おー、これって…」

「…敵ながらお見事。」

「岳羽…大丈夫か？」

「桐条先輩…！」

だが突然崩れ落ちる。

「！ 先輩！？」

「済まない…衝撃すべてを受け流せなかつたよつだ。」

「ゆかうつむけ！回復……。」

「分かつてゐる……。」

「怖かつたんだ……真次郎、湊、……明彦、その上君まで失つたら私は……。」

「分かつた、分かつたから……喋らなきでへだせ……。」

「先輩っ！桐条先輩……。」

「済まない明彦、お前を救えなかつた……そしてお父様、今そちらに参ります。」

『いや、お前は欲やつてくれた。』

（真田）

真田は何も無い空間を漂つている。

（……この暗闇の何処に光りが有るんだ？）

歩みを止め辺りを探そづとする。だが足が、体が、頭に動け！進め！と促す。

（だが何と無く感じる……）

どのくらい進んでいたのだらつへ気付いた時、真田は有る一点に進んでいた。

そしてその先に……

(もしかして……あの一番星みたいな奴か?)

真田の目線の先に、それこそ星の様な光りがぽつんと暗闇に存在している。

(まだあんなに有るのか…)

真田はげつそりした顔で星の様な光りを見る。

だが“死”という物への恐怖が、それに何より眞田にまた会いたいといふ思いが、眞田の体を光りへと近づける。

(まだ行ける…)

悲鳴を上げる体に鞭打ち再び歩き出す…

もう何時間歩いたんだろう、体どこから心までも崩れ落ちやうだ。

(もう少し何だ……もう少しで)

その場に倒れこんだ。

(最後の最後で力尽きるか…)

駄目だな俺は。

シンジの時も、有里の時も、踏ん張らなきゃいけない時に踏ん張れない……）

（俺は、どうしたいんだ……

「お前は、よくやつたよ……褒めたたえても良いくらいな、此処まで来たんだ、もう休んでも良いだろ？」

そうだな……正直もう疲れた。身も心もボロボロだ……

『馬鹿野郎！さつきシンジが託した思いを、気持ちを、無駄にする氣か！…』

でも……このまま投げ出して良いのか？

「人生諦めも必要だ、そしてお前は、よくやつた方さシンジや美紀だつて快く迎えてくれるさ。」

そうか……そうだな。

『おい、諦めるのか！天田に……いや天田だけじゃ無い、仲間に“諦めるな”と言い続けたお前が諦めてどうするんだ！』

……何とでも言え。

『お前は、言つたな！警察に入ったのは自分よりも立場が低い人達を守るためにだと。たとえ、この腕が届く範囲しか救えずとも、必ずその人達を守り抜くと！』

『守り抜けよ！大切な仲間達をーー！』

……ギリッ

『踏ん張れよ！頑張れよ！』で踏ん張らなきゃ……誰があいつらを、
美鶴を助けてやるんだよーー！』

（うおおおおー！）

雄叫びと共に真田の手が光りに触れる。

協力な閃光が辺りを包む。

（暖かい…）

真田の体は、光りに包まれている。

（熱くも無く、寒くも無い…心地好い）

目をつぶり光りの中に浮かぶ。

（だが、この何処か懐かしい感じは…）

何処からか声が聞こえてくる。

岳羽…大丈夫か？

桐条先輩！！

だが突然崩れ落ちる。

！ 先輩！？

済まない…衝撃すべてを受け流せなかつたよつだ。

ゆかりつち！回復！！

分かつてゐ！！

怖かつたんだ……新次郎、湊、…明彦、その上君まで失つたら私は…

分かつた、分かつたから…喋らないでください！

先輩つ！桐条先輩！！

済まない明彦、お前を救えなかつた……そしてお父様、今そちらに参ります。

(美鶴？美鶴！)

(俺は、見てるだけで何もできないのか……)

真田の心情に反応して光りが近づく。

(これ…ペンダントか?)

そこにまた一つも付けてくるはずのペンダントが光りを放ちながら青白く光っている。

(これを取りれば良いのか?)

真田が取るつとあるとペンダントの方が近付き首にかかる。

(こつも付けたのになんだか懐かしいな…)

（過去）

3月2日　三送会

「真田さん、卒業おめでとうございます。」

『何だ、お前まで…わざわざまで山羽や伊織に散々言われたんだが』

「まあまあ、めでたいんだから良いじゃないですか。」

『うへこののは苦手なんだがな…』

「そんな真田さんにはプレゼントです。」

『……何で俺に?』

「卒業祝いです。」

『俺は、まだ卒業して無いんだがな…』

「最初は、明日渡すつもつだったんですが、真田さんの事だから当

『田じゅ多分無理つて結論に行き、今日渡す事にしました。』

『軽く不快感を得たが…まあいい、有り難く受け取つてやる。』

「珍しいですね、素直に受け取るなんて」

『こんな時くらつ後輩の顔を立てんとな』

「さすが真田さん、良く分かつてこらっしゃる。』

『まあいい、早速開けるだつ?』

「どうぞ、どうぞ。』

包み紙を破り箱を開けると怪しい光りを放つペンダントが綺麗に収まつてゐる。

『これは、何処かで見たな…』

『絶冷石のペンダントです。』

『確か、氷結が効かなくなるつて言つて俺に持たせてた青い石か。』

『ええ、その通りです。』

『だが何で今更?戦いはもう…』

『多分、これからも真田さんを守つてくれますよ。』

『氷結、無効、これから……そつかー美鶴からの攻撃をこれで…』

「あの…真田さん?」

『助かる…』

「えつ?」

『今までの輩は、卒業することに對してしか言って来なかつた、俺の身を案じたのはお前だけだ。』

「アレ? 何か誤解…」

『有難うな有里!俺の未来にちょっとした希望が見えた!…』

「完全に誤解してゐるけど…ちゃんと渡せたしいつか。」

（現在）

（わづか、俺の命を守ってくれていたのか…）

ペンダントを握る。

（力を貸せ有里。俺にはまだ…やることがある…）

光りと共に虚空へ落ちていく…

（岳羽・伊織・桐条）

「桐条先輩つ！」

「じつかりしてくださこーーー。」

「良こんだ……私には贖罪の意義がある、世間、家族、そして仲間さえも巻き込んだ……」

「誰も巻き込まれたなんて思って無いのですー。」

「やうか……伊織は」

「あいつならまだ諦めずに戦つてます、だから、先輩も諦めて弱音なんて吐かないでください。」

四四四と立ち上がる美鶴。

『……済まない、君達には守りあわてばかりだ……今度は、私が』

『いや、お前は死へやつた。』

「えつ……しの極あやか？」

「明彦……」

『今度は、俺の番だな。』

Episode 22 The suffering of the emp

トロスマギオン出したし…メギドラダインでも書いつかな?

Episode 23 The suffering of the empero

久々に1ページ投稿だ。

あと最初と最後の真田の『』に。が入つてますが気分で入れただけ
なので、スルーしてください。

Episode 23 The suffering of the empero

『今度は、俺の番だな。』

「えーと……真田さんですよね?」

『何だ岳羽? 幽靈にでも見えるか?』

「あついえ…」

会話の途中で、美鶴が立ち上がる。

『美鶴…悪い心配

「パンツ…!」

渴いた音が、辺りに響く。

「！」の馬鹿…どれだけ心配したと思つてゐる

『……スマン』

「昔つからそりだつ！人に心配ばかり押し付けて、どんどん先に行つてしまつ…あのまま、お前が起きなかつたらと思つと…」

『……』

「どれだけ寝坊すれば気が済む…」

『悪い……遅くなつた』

「遅すぎだ……馬鹿者」

「グオッ……」

「順平……」

順平が飛んで来る（本田一一度田）

「ちよつとーーオレッチ頑張つたのにサラッとし過ぎない？解説」

「つーかあんた何でそんなタイミング悪いのよー。空氣読みなさこよ
空氣ー。」

「ふつふーん、オレッチくそですから」

「へー……あんた自覚してるんだ」

「あー……こぐらり皿巻ネタでも呑むぜゆかつち……」

『騒いでる所悪いが順平、選手交代だ』

「えつ真田さん?て」とは……蘇つ『死んで無いぞ俺は……』そ、そ
うすか

『まあ、確かに……死にかけたがな』

「先輩…」

『寝てる間にシンジを見てな…“しつかりしろ”って殴られたよ』

「真田さん…」

『おい、デカ男!待たせたな、第一ラウンドを始めよ!じやないか』

真田が、歩こうとする腕を捕まれる。

『……美鶴?』

「私も…まだ戦える!」

『無茶を言つな!それに、病み上がり何だから』

「それは…お前もだらう、それに…今、お前を一人にしちゃ駄目な
気がするんだ」

『美鶴…』

「あと、これは私以外にも言える事だが…もつと仲間を頼れ」

『…そりだつたな』

男に、向き直る真田。

『悪いが、変則タッグマッチだ、そしてこれが俺の…いや、俺達二人の力だ!!』

真田の出したカエサルにアルミテシアが重なる。

「『ハックスレイド』」「

「魅惑の電撃……」

周囲に赤みを帯びた雷が飛散する。

「……やつたのか？」

『いや……逃げられたみたいだな』

「やつか……やつ……」

『おい……たく無理するからだ。出羽つ肩貸してくれ……』

「あつはい……」

『ん? 何寝てる順平、帰るぞ。』

「……何か最近ゆかりつちだけじゃ無く、先輩も俺の扱い酷くないですか?」

『何だ、今更気ずいたのか?』

「ひどいっ……」

三人+約一名は、驕がしく歩き出した。

「約一名って何だ! ……もつとちやんとしたる作者……つか、オレッチ

を約すな！

Episode 23 The suffering of the empero

えーと、都合上アイギスと凌辱の残党討伐編は、カットしました。

あと次回から新章になります。

第一章 後書き！

の予定でしたが普通に振り返った所で、文が長くなるだけなので、第一章のちょっとした説明をちょろつと。

すばりサブタイは、私立月光館学園編

ん？変わつて無いって…そりゃあ字だけじゃそうです。

次からの月光館学園は、本部の大学なのです！

天田、水無月、西条の三人もとつとう卒業です。

ちなみにやつとトリニティソウルのキャラが書けます、長かつた：
何度感想で「トリニティソウル出さないんですか？」と書かれたか
…（実際そんな書かれて無い

さて、ここで人物構成や設定をちょろつと。

まず三人の入試から始まり、入試 卒業式 入学式の順で書こうと思ひます。

次に、人物構成ですが、まず三人+ で神郷 淳（カンザト ジュン） が出て来ます。

次に月光館学園にいるメンバーですが入学式のサークル勧誘で、四

人の前に神郷 慎（カンザト シン）が、ここで会話で名前だけですが茅野 めぐみ（カヤノ メグミ）が出て来ます。

で、この四人の入るサークルの部長は…見てのお楽しみで。

こんな感じですかね、それではまた次回会いましょ。

第一章からサブタイを日本語にしました。

和訳免許なもんで…

（翌日） 1月 11日

「お前達ちょっと集まれ」

マツタリした朝の時間が、急に凍てつきラウンジが緊張感で包まれ、誰も口を開こうとしないが…何処にでも例外はいるものだ。

「なんすか～そんな怖い顔して、せっかくの美人才オーラが台なしですぜ」

呼ばれた三人の一人 水無月 瞬 火炎系のペルソナのおかげか凍てつく波動も彼の前では湿気に変わる。

「いや…眞面目に聞こいつよ」

次に口を開いたのは 天田 乾 氷結は苦手じゃないが、耐性が無ければ意味はなさそうだ。

「私は、どっちかと言つと今の空気が良いかな～」

最後は、西条 麗奈 三人の内最後の一人だ、特に弱点は無いがダメージがある所を見ると…よほど強い冷氣らしい。

で…何故、今更キャラ紹介をしているのかと言つと、この章での主な登場人物は、この三人のように学生なのである。

第一章 プロローグ

「三人共、明後日センター試験だが…勉強は順調か?」

「ハイツ!」

「アレ? 明後日だけ?」

「さ、さあ…」

上から天田、水無月、西条の順である。

『おいおい…後ろの一人そんなんで大丈夫か?』

「なーに、心配いりませんって。ちょうどとクリアしますよ」

『今の状況で、軽口を叩けるのは、順平の様な馬鹿か自信のある奴のどちらかだが…お前は、大丈夫そうだな』

「ええ、モチツス自信しか湧きませんから」

『ふん、頼もしいな、とこりで西条お前は…』

真田と共に天田と水無月が、麗奈を見るとそこには、人気漫画「明後日のジョージ」の主人公 ジョージ・M・ライカン のキメゼリフ「燃え尽きたぜ…ジョージ」のように真っ白になつた麗奈がいた。

ちなみに「明後日のジョージ」は、親の都合で日本に来た青年ジョージが好きなボクシングをやううとジムに行つたが、そこはムエタイのジムで仕方なく、ムエタイに打ち込む話しだ。

『お、おーーー・どうしたーー..』

「もう、何もかも燃え尽きました…」

『どうこう事だ?ちゃんと説明しない』

「実は……」

麗奈は、皆に昨日の戦いで氣を失つた後この頃の記憶が所々抜け落ちてゐる話をした。

「…記憶が無いとなると大事だな」

『どうか頭打つたりしなかつたか?』

「うーん…」

「あの…さすがに氣絶した後に打つたなら覚えて無いんじゃ」

「確かに…天田、水無月、近くで見ていて何か…一人は何処に行つた?」

辺りにいない水無月の声が階段から聞こえる。

「あいーす…呼びました?」

『たく、何処行つてたんだお前ら?参考書?』

「先輩達と一緒に記憶ビリーフについて前に、もっと大事な事気付きましょ
うよ。」

「その大事な事とは何だ?」

「俺達には、後一日しか無いって事ですよ」

『お前……自分達だけでも勉強したいってか?』

真田を含め全員が、一人を軽蔑の目で見る。

『仲間が大変な時に何考えてやがる』

真田は、今にもキレそうだ。

「ちゅうっ……やっぱこりミズキ」

「なーに大丈夫だって俺に任せなさいー!」

心配する天田に全員に聞こえるように言つとカウンジの中央に歩いて行く。

「良いですか?もう一度言いますよ、俺達には後一日しか無いんです

『まだ言つかーー!』

真田が水無月の胸倉を掴むが、気にせず続ける。

「だが、それは俺達だけじゃ無い」

『……………』

胸倉を掴んだまま聞く真田。

「…まだ氣づかないんすか? まつ真田さんですからね」

『 つ …… 』

真田に、殴られるが怯まず話し続ける。

「良いですか?俺達に「口しか無いって事は、そこにいる麗奈にも
「口しか無い。」

つまり、そこでの記憶があやふやな麗奈を、センター受けさせて合格
されるまでに学力を戻す時間が後「口しか無いって事なんですよ。」

「 「 「 「 「あつ……」 「 」 」 」 」

「で、真田さん。あなたが今やる」とは俺を殴る事じゃなくて、さ
つさとあこつに勉強を教えてやる」とじゃないんですね?」

「えつじゅあ…その参考書は一人だけで勉強するためじゃなくて、
私のために持つて来たの?」

「やうだよ、じゃなきゃ天田が賛成するかよ…」

しばしの沈黙

「 「 「 「 「ええーーーーーーーー」 」 」

「えつじゅあやつあまでの青春ドラマチックなアレは?」

「えっ？ 知らないってすよ。真田たちのはせとけりじょ

「えーーー…じやあせりあまでの妙な息のあいかたは、何なのぞ？」

「さあ？ ってか良いんすか？ どんどん時間が…」

「その一言で、荒ただしくなる。

「三岸！ ゆかり！ 今すぐ準備だーー！」

「まつハイ！」

「つよ、了解です！」

「麗奈ちゃん、僕が一人つきりで勉強を…」

「あなたは、ダメです」

「何言ってんだ凌辱… それにアソイわやんまで」

「だつてー…」

「昔みたいに凌辱君が絡んだら反対しなきゃダメかと…」

『…一人共、高校の勉強知らないだろ』

「真田さん。何か俺に言つ事があるんじゃ無いですか？」

『その……悪かつたって』

「一時的とはいえ、全員から軽蔑されたついで殴られたんですからね～」

『だから…悪かつたと云つていいだろ～』

「…じゃあ許す変わりに俺の云つ事何でも一つ聞いてください」

『何で俺が…「あー口ん中切れでんな…しばらく飯が食えな〜や〜わかったよ…』

「言いましたね。約束ですよ」

「クアアア…」

「ちゅう… ハロハロ ちひり…」

「キヤン…」

「あつ、ガメンハロハロ、足踏んじやつた」

ハロハルは天田の方へ逃げて行った。

「山岸！君は、数学と理科系、岳羽は社会科。残りは、私が教える三時間事のシフト制だ」

「えつ、休憩無しですか！？」

「今更何を言つてる…寝てる時間も惜しこと思え！」

「は、ハイ！」

いつも慌ただしくも楽しそうに日常が過ぎ去つて行く。

1月 13日 センター試験

朝早く、廊下に珍しく話し声が聞こえる。

「かああー…ねみーなさい」

「始発逃すと手遅れだからね、仕方ないよ」

いつもと違う制服姿の二人が、歩きながら話す姿は、対照的だ。

「5時、6時ならわかるが何故4時起き?」

「向こうに着くのに6時初じゃないと…」

「でも、神奈川だろ?特急使えば後一時間くらい寝てられるのに…」

「特急使つと向こうに着くのギリギリになるんだよね。それだけは、回避したい…」

会話を止めた天田の目の前に、4人の女性がダイニングテーブルに座っている。

「はよーすー朝から大変ですね」

「じ苦勞様です」

水無月が、場を温め天田が労う。

「おはよー…一人共」

「もうそんな時間？…まだ4時じゃん」

「えーと…とりあえず大丈夫ですか？」

「普段なら大丈夫って言つんだけど…」

「さすがに一日間ぶつ通しはね…」

「まあ、なんつーか…『愁傷様』です」

四人でたわいもない話しをしていくと、[カウ]きずいた美鶴が話しかけて来る。

「お前達、朝早くじうした？」

「いえ、始発で行こうかと思いまして」

「悪いが一人共、出るのはもう少し待つてくれないか…」

「何かあつたんすか？」

「それがな…まだ最後の詰めが残つているんだ」

テーブルの端に、放心状態でシャーペンを走らせていく麗奈がいる。

「あー…じゃあ、俺ら特急で行きますよ。」

「そうすりやあと一時間くらい余裕出来ますから」

「すまないがそれで頼む」

「いえ、仲間のためですか。」

「さーて、少し寝つかな~」

「お前最初から…」

「ん? 何か言つたかなー天田君」

「……いや」

「ゆかりさん達も休んだら……」

先輩一人に声を掛けよつと振り返ると机に体を預けていた。

「寝てるね完全に」

「それならそれで良いさ……さて俺も寝よつとー。」

そつ言い、ソファーに体を預けた後ゆつくじと意識を手放した。

（月光館学園前）

「キッ！ー！」

正門前に金持ちが乗る様なリムジンが止まる。

周りの学生は、立ち止まり眺め、警備の先生は緊張して固まっている。

その原因は車から降りてきた一人の人物だ。

「お騒がせしてすみません」

「あつ……い、いえ」

（おい……アレって）

（桐条 美鶴！？）

（えーと…誰？）

（お前馬鹿か！桐条グループの社長だろ！…）

（スゲー！生で見たの初めてだ）

学生達が、噂して騒いでる。

「えーと…今日は、お子さんの受験か何かですか？」

（お子さん…って）

（社長相手に敬語使えよ）

（あの人クビだな）

「いえ、後輩のです」

（（（…………後輩？）））

外野の意見が、一つにまとまつた時車のドアが開く。

「結局車か……」

「んー…外の空気つまい」

「…お前今まで寝てただろ」

「うわーすごい人」

「てゆーか、私達まで降りる意味有るの風花?」

上から天田、麗奈、瞬、風花、ゆかりだ。

「お前達、挨拶くらいしないか」

「どうも、騒がし…」

「待った先輩!挨拶は後回しで…!」

「おい!待てよ挨拶ぐらい…」

自分を呼び止めた天田に携帯を突き出す。

「な、何?」

「天田…今の時間見てみろ

「8・55…だけど」

「試験開始は何時だ?」

「確か9…」

それだけ言つと一人は、走り出した。
(麗奈をひきびつて)

（第012番教室）

「危なかつた…」

「瞬…ありがと」

「……おひ」

「つか、よく麗奈抱えながら走れたな」

「…やわな鍛え方してねえからな」

『そろそろか…これより国語科の試験を開始する』

試験官の開始の合図が響く。

（中略）

『…………終了だ！そいつ鉛筆置け！

そのまま解答用紙を裏にして速やかに退室しなさい。』

「あーー…やつと冒休みだよ」

「確かに長一よな」

「2科田だよ、2科田。国語と英語で何で直到までかかるのー。」

「まあ、まだ数学が残つてんだけどな」

「……ハア」

「…………」

騒がしくも楽しそうな二人を眺める天田。

「…隣、良い?」

「うん?ああ、良いですよ」

一人の中性的な少年が天田の隣に座る。

「ええと、僕天田 乾つて書つんだ。君は?」

「神郷 洋 よろしくね」

「ああ、うん。じかんじやくじへ

「それにしても後ろの一人す」こね…」

「えつーああ…さつきから」の調子なんだ」

「今もだけじ朝も」

「朝？ああ。でも、朝のは僕も関わってたからあんまり話したくな
つて渾教室一緒にだつたんだ」

「…一緒も何も隣の席じやん」

「…………ええつ！」

「…いくら何でも隣にいる人の顔くらいは覚えた方が良いと思つよ」

「朝のじたじたで周り見てる暇無かつた」

「確かにアレはす」「かつた…」
御想像にお任せします。

「朝はホント参つた」

「あつそつだ、もうすぐ昼休み終わるから休憩室戻らない？」

「「コメン後ろの二人何とかしなきゃいけないから先に行つて」

「…わかつた。んじゃ先行つてるね」

これが天田と彼の最初の出会いだった。

第一章 月光館学園編 Episode 2 先へ行く一人、後の一人は…

二月

それは、冬の終わりを知らせ、春への準備をさせる月。そして…

結果発表の月だ。

今、巖戸台分寮では三人を待つ大人達で異様な空気が寮内を埋め尽くしている。

順平（以下順）「何か妙な気分だよな～」

風花（以下風）「フフフ そうだね」

凌辱（以下凌）「子供を待つ親ってこんな感じなのかな…」

美鶴（以下美）「そうだな」

風「ですね…」

凌「ところで、後ろから変な音が聞こえるんだけど… 何かな?」

その言葉どつり凌辱の後ろからへんからガサガサと音が聞こえる。

風「えっ私?」

順「いや、位置的に風花じゃないしょ」「

美「これは…外からだな」

順「外つて事は、裏口辺りで何かやつてんすか?」

風「でも?何のために?…」

順「そりや…ひ、探し物とかだろ」

美「だが目的がわからない、何を探している?」

凌「そりゃー、ゆかりさんとかの私物とか

順「まつさかー!そんなストーカーじみた事する奴…」

順、風、美「「「ストーカー!?」「」」

凌「僕、冗談で言つたんだけど

順「ちよつ…凌辱…見てこいよ

凌「…何で僕が「言いだしつペだり!」わかつたよ

凌辱は、スタスター歩いてく。

凌（んじや開けるよ）

順（いき

風（頑張つて凌辱君）

美（後方支援は、任せろ）

順平と風花は、ティーカップを、美鶴は召喚器を持ちながら凌辱を見詰める。

凌「どなたですかーーー！」

凌辱がドアを開けた…

「ん？何しているんだ凌辱」

順「…真田さんかよーーー！」

凌「ていうか、真田さんは、何をしているんです？」

真田（以下真）「ああ、明日出す『三』の準備をな

凌「そうですか～…アレ？どうしたの順平？」

順「いや…緊張感と共に何か抜けてった」

風「でもよかつた～本当にストーカーじゃなくて」

真「ストーカー…？何処だ、何処にいるー！」

順「いや、あの違くてですね…」

真「何故俺に早く言わん…山岸、誰が被害を受けている…」

風「えと、その…」

真「まさか、お前か！」

美「落ち着け、明彦！」

真「落ち着いてられるかー！」

美「…誰も被害に遭つたとは言つて無いだろ」

真「……何？」

説明中…

真「なるほど、俺とお前ら双方の勘違いが原因と言つ事か…」

風「そうなりますね…」

真「だが何かあつた後じや遅いからな…遠慮無く俺に言えよ」

真田は、「確かにこいつ時の書類が…」と呟きながら、部屋へ戻つて行つた。

順「…何か真田さんが取り乱すのって珍しいですね」

風「あつそつ言われて見れば確かに…」

美「あいつは昔からああだ、自分の事は平氣だが、仲間や友達の事になるとむきになる

順「何か真田さんらしいな……」

凌「だね……」

順「だね……つてお前戦つてた頃の真田さん知らないだろ」

凌「あつうん。知らない」

順「お前な……」

風「フフッ」

外から犬の鳴き声が聞こえる。

風「あつゆかりちゃん達帰つて来たんじゃない?」

その言葉と同時に玄関の扉が開く。

岳羽（以下岳）「ただいま～わ～」

アイギス（以下ア）「ゆかり大丈夫?」

順「よつお帰り二人共」

風「口口ちゃんとお帰り」

「ワンワン」

岳「中、暖かい！」

ア「本當だ、外と温度大分違'」

風「そんな違'の?」

岳「もう寒いの何の」

美「一月といえどまだ冬だからな」

順「ゆかりっち、寒いなら暖ためてやろうか?」

岳「はいはい、何バカ言つてんの…てかバカじゃないの?」

順「つか、一回も言つたな…!」

凌「なら、僕が…」

ア「バカじゃないの?」

順「あらやだ。何この『ジャヴュ…』

全員「アハハハハ！」

岳「今の台詞懐かしい~いつだっけ?」

順「えと確か…あれだ! 文化祭の片付けん時

ア「そうだったね」

順「あん時は、面白かったな~有里と友近が、コントやって…その

後宮本も混ざつて「こんなかで女装が似合つのは俺だー」って話しかんなつて…

ア「で私が、混ざつたんだつけ

順「そうそう、であいつに「こんなかで誰が可愛い?」って聞いたら、「俺だろ」って乗つて来てさ~」

ア「で、友近君が順平に振つたんだよね」

順「そこでアイちゃんがやらかして俺の首が…」

ア「アレは、順平がいけないよ

順「うひ…まあそこでゆかりつちと友近のダブルパンチをくらつた

凌「何か楽しそうだな~」

順「ああ、楽しかったぜー友近がいて…あいつがいてさ

岳「何気に充実してたよね…」

ア「うん…ゆかりは、リーダー一筋だもんねーー」

岳「なつ急に何言ひ出すのよー」

凌「彼に会いたい…会いたい!会いたいの…理屈なんて無いの…だつける

岳「なつ…つか何で凌辱君知つてんのよー」

凌「あの封印の部屋まで聞こえてきたよ」

岳「えつ…てことは湊君にも」

凌「うん…バツチリ…（笑）」

岳「…死にたい」

ア「ゆかりー皆山おめでとう…」

風「あの時のアレって告白だったんだ」

凌「こうこうのドラマに有りそうだよね…10年たつたらまた会
いに来る…みたいな」

順「つかあいつならどんな事しても戻つて来そうだな」

風「そうだね」

ア「戻つて來たらちゃんとプロポーズしなきゃ駄目だよゆかり！」

岳「まだ、戻つて來るって決ましたわけじゃ…」

この時私達は、これが本当に成る事を知らなかつた。 岳羽

瞬「ただいま戻りましたー！」

天田（以下天）「同じく戻りましたー！」

麗奈（以下麗）「ただいま～」

順「おっすー三人共、惜しかったなーもうちょい早くこねばゆかり
つちの告白が見れたぜ」

瞬「えつゆかりさん誰に…つか告る人いたんすか？」

岳「ビーいう意味かな…瞬君？」

瞬「怒るって事は、居るんだ…なーるほーどねー」

天「ゆかりさん彼氏居たんだ。てつきりリーダー一筋かと」

順「そのリーダーだよ天田君」

天「えつ…二つの間に?」

順「実は、Hレボスの前ん…」

岳「あーもう!その話し良いからー終わり。ところで、天田君連結
果は?」

順「…逃げたな」

凌「…逃げたね」

瞬「完全に逃げましたね…」

岳「そこの三馬鹿つるむかー!」

じゅ、天田君からー!」

後ろでブーイングが聞こえるが無視して話をする。

天「えつ僕からですか！？」

順「答え無くて良いぞ天田一」

瞬「告白の真意は…」

岳「後悔の心を…」

天「えと、口で言つてアレ何でこれで…」

岳羽に証書を渡し順平達の方へ行く天田。

順「最後の抵抗だけだがまあ良い」

瞬「いやいや、天田にしてはよくやつましたよ順平さん」

岳「…合格…やつたじやん天田君…聞いて無いし…」

天「聞いてます。

ありがとうござります」

岳「あつ「メン…えと次水無月…」

瞬「答える前に告白の真相を…」

順「良いぞーその調子だ」

岳「何馬鹿言つてこの…おつ合格ーおめでとう…うひハイツは、本当に聞いて無いや」

瞬「ええ、聞いてません」

岳「聞こえてるんだから、ちやんと聞け……」

瞬「あつちよつ…首が、首が締まる」

岳「あつ…『メン大丈夫?』

風「ゆかりちゃん、今はひより…」

順「ゆかりっち、冗談抜きでそれは直そうぜ!…」

岳「う…わかったわよ。次麗奈」

麗「残念ながら不合格でした~」

瞬「まあ、一日で合格できる方がスゲーよな」

天「確かに…」

岳「まあ、状況が状況だったし仕方ないね次頑張ろー。」

麗「う…時間があれば」

瞬「とりあえず合否は置いといて…誰が、先輩方に報告するの?」

全員「……」

順「Uの流れだと…ゆかりちじやね?」

岳「何で私…」

凌「僕もゆかりさんだと思つた」

岳「凌辱君まで止め…」

瞬「俺も一人に同意す」

岳「風花～」

風「えと…その、「メンゆかりちゃん」

岳「天田君、麗奈ちゃん！」

天「……」

麗「……」

岳「田を逸らすなーー！」

美「何を騒いでる？」

岳「あつ……」

順（「ひ）で遭遇かよー！」

瞬（隊長…北川ますか？）

凌（「ほ、逃げましょ。全体に退避命令を）

美「ところで三人共結果は、どうだった?」

瞬(「ちゅうまー キングされました!」)

順(焦るなーまだチャンスはある)

凌(下手に動くと死ぬなこりや…全体待機命令を崩すな!)

岳「えと、私と風花が預かってます…」

風「ハイ…」

真「それで、どうだつた?」

岳「えと…まず男子の一人から」

美「E x c e l l e n t ! ! 一人共よくやつた!」

真「ほう、もすがだな」

天「ありがとうございます!」

瞬「だから言つたでしょ真田さん。軽く突破しますつて

真「俺は、あんな軽い気持ちで受かるか心配だつたが…余計だつたな」

瞬(第一撃、回避しました!)

凌（だが本番は次だよ。油断は禁物だ）

瞬、順（了解）

岳「で、これが女子の結果です」

先に真田が受け取る。

真「……心なしか一文字多いのは『氣のせい』か？」

麗「えと…『氣のせい』じゃないです」

美「だが試験前のアレでは仕方ない。次意地でも合格するんだ！」

麗「は、はい！」

先輩方は、去つて行つた。

順「…何も起きなかつたな」

瞬「ですね、てっきりキレるかと思つてたのに…」

麗「私も…あんな怖かつたの久しぶりだ」

天「ま、何も無くてよかつた」

岳「本当にたく…寿命縮まるかと思つた」

ア「ほんと…」

岳「あなたは、寿命無いでしょ！」

ア「なつ幾戒じだつて壽命へらへ有るんだから=

「おひでー田は終わつた。」

だが

美「そうだ、西条。今日から私の部屋にこい、毎晩勉強だ」

約一名事実上処刑宣告を下された。

第一章 月光館学園編 Episode 3 麗奈「あー試験中に天の声が答へ

久しぶりにシリアス…かな?

第一章 月光館学園編 Episode 3 麗奈「あー試験中に天の声が答

一月中盤

麗奈は、再び月光館学園にいた。

（一般入試 前期試験）

読者の皆さんには。
どうも麗奈です。

作者と同じ様な挨拶をしたところで、何故私が此処に居るのかと言
うと…前回のセンター利用入試で一日間の付け焼け刃も空しく不合
格になつたから。

それもこれもすべてあの時…

「これより前期試験を開始する…」

…話しの途中で監督の先生が来たようですがタイミング悪いなおい！

そんなこんなで試験ですが全くと言って良いほど解らない。あの鬼
もとい氷の女王は、私に何を教えて來たのでしょうか？全く持つて
謎だ。

さてさつき中斷された話しの続きを…えつ 試験中？まだ一分も経つ
てません。

それに解らない物をどうしようと…どうにもなりません。
事で話しの続きを…

何故私がこんなに馬鹿になつたと書いた時に聞こえた声が原因ですね、昔と言つても一、二ヶ月前ですが……一回田は、真田さんと初めて会つた夜ですね。あの時真田さんはカツ ハハカツター……まだこの時は、記憶は健在でした問題は次ですね。

一回田は、最近の話と言つても一ヶ月前ですけど。

その時は、乾と瞬と私のスリーマンセルで敵に立ち向かい一人がやられた時にリミッターが運良く外れた……外れてしまつた時に出てきましたその時は何故か私とリンクしてましたが……その後記憶が消えさり今に至る。

リミッターの副作用かな？

で今願うのは、その声の主に責任取つてもらい私の変わりに

【責任とゆうか？】

おっと幻聴が、こんな都合良べあの声が出る訳……

【実際僕が迷惑掛けたのは事実だしね】

(えと……それホント?)

【僕は嘘付かないよ】

(じゃあ、お願いします)

【えと……ペンは持つてね。答え教えるから】

(……解りました)

10分後……

(終わったー終わまで解らなかつたのが嘘みたい)

【お役に立てて光榮です】

(やうじこえば、名前何で言つたか?)

【アレへ~言つてなかつたっけ…まあ良こや、僕は 有里 湊 帆と
同じペルソナ使いだよ】

(ん?どつかで聞いた事有るよ?な…)

【あんまり似たような名前いないと困りけどなー】

(何で私に声を?)

【んー…一番共鳴しやすかつたから…かな?】

(それだけ?)

【後、話し相手が欲しかったんだ】

(話し相手?)

【そり、何度も何度も同じ事の繰り返しでノイローゼになつた
（ちなみに何を繰り返しているんです?）

【……時間】

(時間?)

【えへ、僕は時の回廊に囚われてるんだ】

(時の...回廊?)

【わつ、それに捕まると他の時間から抜け出せ無くなる。】

(そんな物が...)

【僕の場合高一で止まってるんだ。敵と戦い命を落とした...ナビ儀
が付くと最初に戻つてゐる...文字通り永遠の17歳さ】

(そんなの...キツすぎる)

【...優しいんだね君さ】

(そんなの聞いて普通でいらっしゃるほど心は強くないですか?)

【なら優しくつこでに聞いて欲しい...】

(?)

麗奈の田の前に白い少年が現れる。

【本当に、君にワイルドの力を渡せれば良いんだだけ】

【今の僕では、話をするので精一杯のようだ...】

【次...いつ話せるか分からないから、今伝える...みんなにも...伝え

て欲しい】

(みんなって特別課外活動部の?)

少年は静かに頷く。

【近い将来、ニコクスが復活する】

(ニコクス?)

【そう……ニコクスだ……いや……ニコクスだけじゃ無い……】

【Hレボス、クジラ、イザナミ、アメノサギリ……これまで退けて
来た強敵が一斉に……】

(……強敵?)

【本来なら僕も共に戦うんだが……如何せん囚われの身だ……】

【スマナイ……君達を頼るしか無いんだ……】

少年の頬を、涙が伝つ。

(……)

【此処から先は、遺言と思つてくれて良い】

(ー!?)

【みんなに、頼りないリーダーでスマナイと……】

【そして…ゆかり…に…約束…れなく…て…「ゴメン】

言葉が、途切れて行く。

「待つて…！」

突然大声を出したために全員がこっちを見る。

「…」（りりりり…静かにしなさい…）

「す、すみません」

「えーこれで！本日の試験を終了する」

麗奈は、帰り支度をしながら思い出す。

（さつきの…伝えなきや 駄目だよね）

女生徒1 「麗奈～帰る」

女生徒2 「つか、さつきのビーフした？」

麗奈 「ゴメン…一人共！私、用事有るから先行くね…！」

女生徒1 「あつちよつと…麗奈～！」

（絶対に伝えなきや…）

彼女は止まらない…心の何処かでタイムマニッシュトが徐々に迫つて着

て いる事を 知つてい るから...

第一章 月光館学園編 Episode 3 麗奈「あー試験中に天の声が答へ

ちなみに次回も多分シリアス気味

第一章 月光館学園編 Episode 4 伝えたい言葉（前書き）

車の擬音ってどんなんだろ？

第一章 月光館学園編 Episode 4 伝えたい言葉

日が沈み掛け一通りの少ない路地を一人の少女が走っている。

(早く…できるだけ早く…)

もう彼女の記憶からあの声の事は徐々に失われていた…

「絶対！…間に合わせるんだから…！」

彼女の原動力は何か？

話しを聞く事しかできない罪悪感か？

あの少年に対する同情か？

本来ならばそのどちらかだろう、遺言を伝えてくれと言われて伝えないほど冷血な人間はあまりいない。

では何故彼女は、走っているか？

(プロポーズの返事とか重要過ぎる…)

2割の乙女心と8割の勘違いだ。

「伝えたい言葉」

「てゆーか、さつき聞いたばかりなのに何でもひらく分からぬのよー」

説明するのは簡単だ。

彼、有里 湊の思考が強すぎるのだ…

彼女、麗奈にとつては単なる少年としか思つてないだろうが、世界を救う力を持った少年だ。

そんな彼の思考だ。

彼女のよつな覚醒前のペルソナでは、一瞬で一般人へと成り下がる。故に脳を護ろうと、本能が排除するのだ。

「ああもう、とつあえず走るー。」

今世の中での彼の思考を受け止められるものな、やつはいなーだろう。しこて言えば…

同じワイルドの少年か…

あの青い部屋の住人達か…

これからワイルドに成る少年だけで有る。

「では、お疲れ様です！参事官殿……！」

『そんな堅苦しく無くていい、昔みたく先輩で良いぞ』

「いえ、公私混同する訳には……」

『……面倒な奴だ』

「絶対！間に合わせるんだから……！」

『……西条？あんなに走つて何処に……』

真田は車に走り出した。

「あつひよひと先輩！」

『スマン！後任せて良いか！……』

「あつハイ！お任せください……！」

車で走り出した。

「ハア ハア そのままじや間に合わない

「プラー！」

『西条！乗れ！』

「真田さん！」

「バタン」

『たく…あんなに走つて何処行く氣だ?』

「ゆ…ゆかりさん…何処に」

『岳羽?…あ、よくわからんがどうあえず帰るが』

「お願いします~」

『…大分疲れてるな』

「…」

『…寝たのか?』

(……)

光が眩しい。

(……ん)

いや、光だけじゃないその空間自体が輝いている。

その中心にぽつんと少女が、座っている。

(… ここ何処?)

そこには、少女以外何もいない。

(何か前にもこんなことあったようななかつたよくな...)

【…またあつたね】

(…朝の少年?)

【僕何かの言葉を聞いてくれてありがとう…でももひとつなんだ】

(良くない!)

【ビクッ...】

(何がもつこによー未練タラタラのくせに強がってんじや無いわよ
!...)

【君に何が分かる!】

(分からぬいわよーそれに分かりたくも無いー)

【もう僕のせいだ誰かが犠牲になるのは嫌何だー】

(犠牲に何か成らなー!)

【もつ成つてゐ】

(何処が…)

【今は記憶で済んでるが、これから何が起きるか分からない…】

(自惚てんじゃ無いわよ！誰があんたのために体張るもんか…)

【じゅあ…】

(ゆかうさんのためよ。あんた10年近く待たされる彼女の気持ち
考えたことあんの？)

【……】

(一言でも良い、一瞬でも良い…あんたに会いたいし言葉が聞きた
い…やう思つのが普通じゃ無いの)

【……】

(分かつたなら私に任せとのんびりしてなさい)

麗奈は光に溶けて行く。

【分かりたくも無い…か】

「ん…アレ…」何処？

『寮だ』

風「麗奈ちゃんすつと寝てたからね」

瞬「寝過ぎだ。ひつ」

「ふああー……良べ寝た」

順「おっしゃつと起きたか眠り姫」

瞬「……なんすかそれ

風「そつこえば、寝言でゆかりちゃんがどうとか言ってたけど何か

用事?」

「ナヒだ、ゆかりさん何処に?」

順「口ロマルの散歩に行つたせつて麗奈ひづー。」

麗奈はまた走り出す。
静まり返る暗闇の中を

第一章 月光館学園編 Episode 4 伝えたい言葉（後書き）

これからマイペースで突き進みます。

文才欲しいな～畜生！

第一章 月光館学園編 Episode 5 伝えなきやなりぬ思い

「もうゆかりさん何処行つたのよ……」

少女は、駆け抜ける暗闇の中を行く宛ても無く…

Person a3F ↪ After Days

第一章 月光館学園編 Episode 5 伝えなきやなりぬ思い

(ノロマルの散歩つて事は、神社だよね)

麗奈は神社へと向かう。

♪ 第一ステージ 長鳴神社 ♪

どうやら敵はいないようだ。

ドウスル?

戦う

散策

逃げる

麗奈は御神籤を引いた。「凶」精神的に50のダメージをくらつた。

「…何やってんだろ私

麗奈は黄昏れた。

（第一ステージ 巖戸台商店街）

人の気配がしない…

ドウスル？

戦う

散策

逃げる

麗奈は逃げました。

（第二ステージ 巖戸台文寮）

「結局帰つてきちゃつたし…何やってんだろ」

トボトボとした足取りで中に入る。

『帰ってきたか。どうだ？見付かったか？』

『いいえ…駄目でした』

『…そつか』

「だったらさー高い所から探せばいいんじゃね?」

「高い所？」

「そーそ、屋上とか」

「誰も一人で一人遊びません。

そんな事を呟きながらドアを開けると、

卷之三

静けさを纏う虚無の中に女性が佇み空を眺めている。

あれ……麗奈ちゃんが」「風た――――!」<――?――?

探しましたよはかじさん！」

「アーティスト何で」

それは……

「どうしたの？」

一
何だつ
け?

「ガクツ」

思わず呟つける

「んーと… とりあえずどんな用だつたの?」

「伝言頼まれて… けどそれ忘れちゃ意味無いでしょ私…！」

「ちょっと落ち着いて、ほひ田でも見てや」

「月?」

二人揃つて空を見上げる。

「そーいえば何で此処に?」

「んー何だろ… 月を見に?」

「月に思い出でも?」

「まあちよつとね…」

「へー… 恋人?」

「な… 何言つてるの! 私に恋人なんていないし」

「でも順平さん達…」

「だからいないつての… むしろ募集中」

「… アイギスさんが出会いは有るはずなのにおかしいって

「アイギス……」

「それに今の表情……誰か待ってるみたい」

「誰もそんな顔してな……いや、本当は待ってるのかも」

「……」

「あの日……約束したのにな……」

「……約束……」

「そ、約束したの」

「約束……約束」

「……麗奈ちゃん？」

「そつか……約束」

「ねえ、大丈夫？」

「思い出した……」

「えつ？」

「思い出したー！」

「えと……何を？」

「やつ もの「伝言」の内容」

「伝言？……ああ最初に言つてた奴？」

「ゆかり…約束守れ無くてゴメン…つて」

「…約束？誰かしたつけ？」

「あーよかつた～これだけが心残りだった～」

「ねえそれ誰に言われたの？」

「それが名前忘れちやつて…覚えて無いです」

「どひゅう人？」

「どひゅう人？」

「えと特徴とか…服装とか」

「つーんと…制服？」

「制服？何処の？」

「月光館の男子の」

「…学生？髪型とかは？」

「何かキタローみたいでした」

「（月光館の制服でキタロー…）まさかね」

「あと首から音楽プレイヤー…」

「……」

「ゆかつさん？」

「ああ、『メン、分かった伝言ありがと。寒いし中止る？』」

麗奈を扉に向かわせ自分も歩き出す。

（まさか君なの？湊君…）

第一章 月光館学園編 Episode 6 突然の休暇

海…そこは、真夏の観光地で有り誰もが一度は行った事のある場所である。

順「うおーやつと着いたぜ…やーべーしまーーー！」

『相変わらずのわい奴だな』

岳「わー懐かしい…何年ぶりだろ」

風「前来た時は高校生だったもんね」

天「皆さんテンション高いですね」

凌「海＝水着！？」

瞬「此処にも一人居るけどな」

麗「あんた嬉しく無いの？」

瞬「いや、嬉しいけどな…」

麗「けど？」

瞬「何でこの時期？」

（～3週間前）

美「旅行？」

岳「ええ、三人の合格祝いもかねて」

順「ゆかりっちが言い出すって珍しいじゃん」

『基本お前のポジションドもんな』

順「そりゃ、で何処行くん？」

岳「久々に屋久島行きたいなーと思つて」

麗「屋久島！？行きたいです！」

瞬「お前まだ合格した訳じや…」

麗「良いのーそれに桐条先輩だって、この点数なら合格確実だつて

美「確かにそろは言つたが万が一…」

順「行きましょうよ先輩！」

麗「先輩！」

美「…水無月、天田」

瞬「俺は、反対っす」

天「僕も、それに今の季節に海はひよつと…」

美「凌辱、アイギス君達はどうだ?」

凌「僕は行きたいよ」

ア「私は…止めといた方が良いと思つ」

『俺もだ、たとえ合格確実でも落ちる可能性があるなら残った方が良いだろ』

美「賛成4反対4か…山岸、君はどうだ?」

風「えつ私?」

岳「行きたいよね風花!」

風「それは……」

順「ようじんじゅ決…」

瞬「一教師として止め無くて良いんすか?」

風「そうだけど…」

順「瞬ーお前ーーー」

瞬「いや、遊びに行こうとする受験生を教師が止めなきゃ駄目でしょ」

よ「

「ワンワン

順 「ロロマル?」

「ワンワン

由 「…向て言ひしるの?」

順 「俺に聞くなよ…アイちゃん

ア 「……

岳 「アイギス?」

ア 「ロロマルも行きたいってさ

全員 「…

順 「ん?待てよ…」とば5対4!

瞬 「風花さん反対何だから?テュースでしょ

順 「うなりや桐条先輩にかかるてんな…」

美 「まあ待て今結果を調べている所だ」

麗 「結果?」

美 「ああ…そろそろ来る頃だが」

[バニナニナ - バニナニナ]

美「来たか、どうだ…そつか」苦勞、「トがつて良」
「

岳「あの…何の結果」

美「おめでとひ西条…合格だ」

麗「えつ…じやあ屋久島…」

順「これで心置きなく行けるぜー」

『反論も無くなつたしな。向こうで使つ筋トレ器具を…』

瞬「今、筋トレって聞けたよ!…空耳?」

順「いや、あの人は空耳じや済まないぞ」

（現在）

順「つか良くプロマル思に着いたよな」

瞬「まあ、プライベートジエットで持つんでしょ」

「ワンワンド」

ア「プロマルさんも感謝してるので」

瞬「よひこーんじや プロマル、後で俺に付き合ひてくれや」

「ワン！！」

天「何すんの？」

瞬「別に？ただ犬と海つて合つよな～って話し、なあ？」

「ワン！」

天「何か怪しい」

こうして屋久島一日目が始まった。

第一章 月光館学園編 Episode 7 突然の休暇 ? (前書き)

自分の思い通りに進まない…何故だ?

順「んじゃ荷物を置いた所で…早速ビーチに突撃！？」

岳「つてもう行くの？そんな早く準備…あれ？前にもこんな事」

天「あつたんですか？」

風「前にも言つてたよね順平君」

岳「まんまあん時だし…『ジヤヴュかつての』

瞬「つか、今三月つすけど…海入つて良いんすか？」

全員「……」

真「死んだなあいつ」

天「えと…見に行つた方が」

瞬「ああじゃあ、凍死してた時のために俺とコロマルで、あと真田さんいりや大丈夫つしょ」

天「何でコロマルも？」

辺りを見回すが凌辱の姿は無い。

瞬「順平さんだけなら俺一人で良いけど凌辱さんもいないからな

由「いつの間にか…」

瞬「んじゃ、行きますか」

「ワン」

真「そうだな」

～ペーチ（この辺適切）～

瞬達が砂浜に着くと、打ち上げられた魚のようになびいて波打際に倒れる帽子君とそれを突くマフラー（微妙に色落ちしている）が田に入った。

瞬「あー…見事に打ち上げられたなこいつ」

「フンフン」

ゴロマルはかぎ分けるを使つたーだが何も分からなかつた。

真「まるで、クジラの座礁だな」

凌「クジラのトコロシコウー!？」

瞬「おー良く知つてんな凌哥さん」

凌「どんなシコウ?」

瞬「んー? そうだな…馬鹿でかいクジラが馬鹿でかい輪を潜るんだ

ジャンプして「

凌「ジャンプして！？」

瞬「そう、そして着水した瞬間大量の水が観客席にザバーーって」

順「そんなショウ有るか！」

瞬「あ、起きたんだ」

凌「おはよっ順平。でさつきのショウの……」

瞬「残念ながら…日本じゃ見れないな」

凌「ええつー見れないの！ー！」

瞬「アメリカ…いやカナダ辺りなら」

凌「見れるの？」

瞬「…かもね」

順「…ガン無視？」

真「無視どころか、忘れられてるな」

順「ああ…そうすかじやあ俺帰り…」

凌「順平…！」

順「ぐうおー」

凌「アメリカに行こーつー。」

順「お前…腹に、で何でアメリカ?」こーで良いだろ!」

凌「此処じゃThereショウが見れない」

真「ショウが何かは知らんが…確かに座礁なら見れるかも知れん」

順「座礁?」

凌「ほら順平! 行くよ今すぐ!」

順「おい、ちよつ…海パン引っ張んな。それに俺に金無いの知つて
んだろ!」

凌「ああー…そうだったね」

順「何かムカつくなおい」

瞬「真田さんならお金持つてますよね? 公務員だし」

真「まあ男の一人暮らしだからな、無駄な金は使わん」

瞬「真田さんが、アメリカ連れてつてくれる…」

凌「本当…? 行きましょー! ショウのため」

真「シヨウ? 何の出し物……」

真田は、黄色い悪魔に連れてかれた。

順「……何気ひどいなお前」

瞬「あれ? そうですか?」

順「……」

瞬「まあまあ、助けてあげたんだから」

順「……元はお前が原因だろ」

瞬「そうとも言つますね」

順「……」

瞬「とりあえず助けたんで、俺の頼み聞いてくれます?」

順「……頼み?」

第一章 月光館学園編 Episode 7 突然の休暇 ?（後書き）

さつ もと 入学させないと……話しが進まん。

第一章 月光館学園編 Episode 8 突然の休暇？

「合体奥義？」

驚いたような、でも楽しげな目で俺を見てきた。

「ええ」

「それってアレ？どつかの漫画みたいに“魂の共鳴”みたいな」

「漫画って…俺らも漫画みたいな物でしょ。でもそんな感じですね、合わせるのは魔力ですけど」

「でもさあ、そういうの“共通点”とかいるんじゃねーの？」

「ああ、有りますよ火炎系つていう」

「……えつそれだけ？」

「それだけって…俺、口ロマル、順平さんで共通点なんてこれしか無いでしょ」

「いや、けど普通神話とかの繋がり…」

「火の神、地獄の番犬、あと何だつけ…三倍偉大なヘルメス？に繋がりなんてこれっぽっちも無いですよ」

「おい、何だその三倍偉大なヘルメスって結局ヘルメスのままなの

俺？

「さあ？ Wikipediaで調べただけ何で良く分からないつす」

「Wikipedia…で何て書いてあつたん？」

「えと、鍊金術師ヘルメスとヘルメス神とトート神を合わせた物だつけ…」

「鍊金術師と神様は分かるが……二番目関係ねえだろーーー！」

「知らんつすよんな事…大方めんじくさくなつてまとめたんじゃないですか？」

「それにトート神猿だぞ猿、猿なんかとまとめられたくねえ！」

「パロディ要素が…」

「笑いなんか要らん！」

「ハイハイ、そんな事より始めますよ特訓。ほり口ロママル起きる、寝るんじや無い」

「ウウ～～～

「順平さん、いつまでも猿、猿言つて無い」

「ハア～～～

（特訓開始）

「で、どうやんの特訓」

「そりゃ、順平さんが言つた漫画みたいに魔力を…」

水無月は力を振り絞つてゐるが…何も起き無い。

「……黙田だなこれ

「……黙田ですね」

「……」

「いひなつたら直接ペルソナ出してやるしか無いが…」

（改善案）

三角形に向かい合いペルソナの魔力を火炎として三角の中心に集める。

「… なあ瞬」

「… なんすか？」

「… いれ危なくねーか？」

「危ないですよ」

「いや、危ないってあつわつていつなー」

「俺だつてやりたく無かつたけどじょうが無いでしょ」

「ちなみに… どんくらい危ない？」

「……ポ○モンの大爆発くらい（笑）」

「めひやくひや危ねーじやねーかー!?」

「キヤン…！」

「ちょつ…力が偏つ」

刹那、ビーチとその周辺に爆音が響き渡つた。

（夜）

三人は別荘に向かつて歩いていた

「ハアハア…何だあの威力。下手すりや死ぬぞ」

「火炎吸収が効かないとか…ガードキルも混ざつてたのか」

「キュー…」

「でもよ、初めてにしちゃ中々じや」

「自爆で中々じや…完成度低くなりますよ」

「へッヘッヘッ…」

「どうした二人共えらく疲れてるけど」

「どうした？そいつはですね先輩…あんたが最後バランス崩して、俺の方に爆発が来たんだー！！！」

「ウワウ！」

三人が騒いでる夜の中、一匹の蝶がこの地に舞い降りた……

第一章 月光館学園編 Episode 9 青い蝶に誘われて…

蝶になつた夢を私が見ていたのか 私になつた夢を蝶が見ていたのか…

時の狭間、心の狭間で私は何を見るのか

: m e m e n t o m o r i

(……)

俺は気が付くと良く分からぬ空間に居た

何も無い空間、その一言で呟きれる

一寸先も闇に覆われたこの世界で、俺は何処へ向かうのか…

視界の先に見える淡い光を頼りに一步、また一步と歩いて行く…

俺の歩幅に合わせるようじゅらじゅらとうめくそれは生き物なのか…それ以外なのか…

そんな事を考える内に足が止まってしまった俺、ふと気が付くと右手には一匹の蝶

(…あの光の正体なのか?)

その思考を感じたのか飛び去る蝶。だがつかず離れず…俺の視界を
優雅に舞う

青い蝶に誘われて…

俺は、何処へ行くのか…

第一章 月光館学園編 Episode 10 夢の迷宮（前書き）

いつもからから6話くらい使ってペルソナ3M の夢時間やわたりと題
います。

俺は気が付くと見慣れない場所にいた…

何処かの広場のようだが、誰も見当たらない

「……何処だ此処？」

周囲を見渡すと立ち上ると両手に何かの感触があるのに気がつく

「……」

武器だ、これまでの戦闘でも愛用して来た双剣が両手に収まっている

「…何故に武器？おつと召喚器もか こんな持つて來たっけ…

いや、召喚器は持つて來たなうん。

武器も持つて來たんだ多分…うん、そういう事にしよ

血口なりの納得をした所で改めて周囲を見回す。

足元にはマーブル状のタイルが敷き詰められており、所々樹の根が張り出している。

そこそこ大きい広場なのだろう、奥の方は暗がりになつており木が自生してゐためちょっとした森を感じさせる。

ふと上を見上げると天高く伸びた木々の枝葉が絡まり天井を覆つており淡い木漏れ日が優しく辺りを照らしていた。

目線を上から戻すと周囲には動いてない時計台や学校の備品が散らかっている。

そのガラクタや木々、床のタイルに木漏れ日が当たる度に反射し何処か幻想的な空間に感じられる。

「ここ何処だよ全く

…木が生えてるって事は森か山ん中に入っちゃったのか？」

「それにしておかしいよな、森にタイル張つたって意味ないしな…」

それから一、三分考えるがある物が目に入った所で思考を止める。

…椅子だ

「つお、これ校長室にある高けえやつじやんー」とりあえず座るとしますか

（10分後）

爆睡していた。

「えと…起きそつに無いんだけど

「おーー!!ズキ起きるー。」

「うわなつたら定番の罰ゲームを

『止めてね』

「あありゅう何でっすか真田さん」

『「こつの腕良くみる』

「腕？」

『何か掘んでも』

「多分…双剣だね」

『ああ、そのまま起いじてたら首が無くなつてたな順平』

「…怖い…」

「…じやあいつ起いりますんで…」

『…遠距離から攻撃』

「じゃ私が」

「まつたまつたアイギスそんなトカイ銃撃つたりとすがに死ぬから
「！」

「て」とは…私！？

『それしか無いな』

「岳羽頼めるか？」

「…はい。もうどうなつても知らないんだから…」

一本の矢が彼に向かつて放たれた……

結論を言つと、矢は当たらなかつた矢は…

だが矢を避けた事により椅子のバランスが崩れ…

「ぐうおー！」

床に顔面を強打した。

「うわっ…痛そ」

『さて水無月が起きた所で、お前達に説明する』

「何をですか？」

「此処が何処なのか」

「先輩達は、分かるんです?」

『ああ、一度來た事がある』

「へー…で何処です此処?」

「オネイロス…夢と時間の狭間だそ�だ」

「何か…タルタロスみたいで嫌ですね」

『「そうか天田は初めてか』

「…タルタルソース?」

「お前それ食い物。

タルタロス、ギリシア神話に登場する神であり、かつ奈落そのもの
…後生では地獄とされる生きた迷宮だよ

「…詳しいじゃないか、だが我々の言つタルタロスは違う」

「違う?」

「シャドウと呼ばれる怪物が巣くつ迷宮の塔…君の言つ通り生きた
迷宮だ」

第一章 月光館学園編 Episode 10 夢の迷宮（後書き）

…青い部屋でも書きますか。

第一章 月光館学園編 Episode 11 青い部屋の住人

「……なるほど、タルタロスが何か分かりましたで此処はどいつも場所で？」

「確かに…日常に捕われた物が迷い込む夢の迷宮」

「夢？…私達今寝てるんです？」

「ああ、今も寝てるんだが…私達が何かに捕われている限り目覚めないそうだ」

「それって…」

『植物人間の出来上がりだな』

「…………」

「ああ、そこまでは良い」

「……良いんすか？」

『良いんじや無いか？本人がああ言つてるんだ』

「……良いんだ」

「問題は…誰が捕われているか」

「誰つて…俺ら全員じやないんすか？」

『一度迷い込んだ奴が再び迷うとは考えにくい』

「ああ……やつなるとだ」

「俺達、か」

美鶴の言葉に肯定する。

「やつだ。ぐづぐづしては居られない行くぞ」

「あつ待つてくださいー！」

風花が全員を引き止める。

『どうした？』

「いえ、その……さすがに一度に全員のサポートは無理です」

「そつか、いつも四人だけ」

「さすがに仕方ないか……だとすると

リーダーがいるな……」

その一言で全員が目を背ける… ただ一人を除いて

「ハイツハイハイ……お… 「明彦、やれるか？」ええー…」

『正直、やる気はしないが… 順平に任せるとつマシか』

「…スルーされた上げなされた」

『よし、先行メンバーは俺、天田、水無月、西条だ』

「「はい！」

「う～す」

『…行く「たびたびすみません!」何だ』

「気になつた事が…」

「気になつた事?』

「あの扉なんですけど」

風花の示す先に青く光る扉がある。

「あれ…あんな扉あつたっけ?」

「アレは…ベルベットルーム!？」

「知つてゐのか!」

「ええ…それに、皆さんも「存知のはず」

『俺らもか?』

アイギスは静かに頷く

「眞さん、一度入ったんですから」

(… なあなあ)

(何よ?)

(俺ら入った事あつたつけ?)

(… あ、有るんじやない?)

「…エレボスの時か」

「ん? エレボス?」

『最後ん時だ』

『……最後?』

『もういい、問題は…』

美 「誰が鍵を持つてるか」

ア 「ですね」

「鍵?」

「ええ、あそこに入るには“契約者の鍵”がいるんですが…」

「アイちゃん持つて無いわけ?」

「生憎、ワイルドの力と一緒に」

「そうか…」

「ならさ今、鍵を持つてる人がワイルド?」

『そりなるんじや無いか?』

沈黙

「ねえ、瞬」

「ん?」

「何かさ、タルタロスとか何かの鍵とか分からぬ事多くない?」

「まあな…ん?ポケット光つてつけど携帯か?」

「え?あつそうかも…あれ?なにこれ、鍵?」

全員「……」

「アイちゃん…あれ?」

「多分…そうですね」

「じゃあ、これで開くのか…」

「へー…じゃ早速「ガタツ」」

『…どうした?』

「いや…鍵は開いたんですけど「ガタガタツ」」

「開かないのか…」

「ハイ…」

「ふつふつふ…ならオレッチがー！」「ガタツ」…

順平は凹んだ。

『普通に考えてアイギスじゃないのか？』

「私ですか…」

「可能性はある。やつてみてくれ」

「あまり期待しない方が…」「ガタツ」やつぱり

「次は誰です？」

「やつだな…岳羽、山岸」

「私達だつてさ、行こ風花」

「あつうん」

「どう風花？開きそやつ？」

「うーん駄目みたい」

「じゃ私か…うつ予想以上に堅い」

「やはり駄目か…明彦はどうだ

『駄目だ、ドアノブは動くが扉自体が動かん』

「私も駄目だつたしな…」

「ふつ……やつと僕の出番が来「バチャイ」……」

「弾かれた！？」

「……「バチャイ」」

凌辱は順平の隣に座り凹んだ。

「犠牲者が二人に…」

『馬鹿が犠牲になつたな』

「天田やつてみ」

「えつ俺！？」

「大丈夫だつて……多分」

「おい……今、多分「言つて無いです」「ガタ」」

「天田も駄目となると…」

『決まつたな』

「まつさかー！そんなどつかの主人公「ガチャ」じゃないんだから

…」

周囲が光りに包まる

気が付くと見知らぬ部屋に居る。

心地好いピアノ

所々青い布が掛かつた複数の扉

全体的に青い装飾

そして…鼻の長い老人

『ようこそいらっしゃいました水無月 瞬様』

「ん…此処は何処だ？ あんたは誰だ？」

『我が名はイゴール… そしてここはベルベットルームで』
… ここは夢と現実、精神と物質の狭間にある場所… ですが、ここで
は夢と現実だけにしましょう』

「ん？ なんでだ？」

『あなたが今いるここは夢、夢の中では精神や物質の概念はございません
ませぬ… そしてここもまた夢の一部、今のベルベットルームにはやはり
精神や物質の概念は存在しておりませぬ』

「なるほど…」

『さて、先程拝見させていただいた所… あなたは、これまでの客人
同様変わった定めをお持ちだ』

「……とこいつと？」

『「そりですね、強いて言つなれば……人になりそこねたピノッキオとでも言いましょうか』

「……（自分の顔見て言つてんのか？）」

『「ところで、ここにもうひとり住人が居るのですが……あなたには“男の人”と“女人”どちらが見えますかな？」』

「女人です」

『「……素早いですね』

「やつですか？」

『「さて……」挨拶させましょ」』

鼻の長い老人手を指す先そこには

「マリアアナでござります……以後お見知り置きを」

青い「口」スロリが居た

「マリアアナちゃんねよろしく」

「いえ、じぢらじや……ふつつか者ですが」

「えつ？」

「あっ……／＼／＼

『「」の娘はまだ半人前でしてな』

「そうですかー別に大丈夫ですよ」

「あ、ありがとうございます」

『「」で……長い間お手止めしてしまいましたな』

「いえ、楽しかったですか？」

『「」では、再び会つ時まで……』

周囲が再び光りに包まれる

第一章 月光館学園編 Episode 11 青い部屋の住人（後書き）

新キャラの容姿等はご想像にお任せします。

第一章 月光館学園編 Episode 12 恋愛の庭カイーナ

光りが收まると先程まで居たマーブルタイツに戻つて來た。

『どうだつたんだ?』

出て来てそいつ真田さんが声をかけて来る

「わりと普通でしたよ」

『さうか…ならそろそろ行くぞ』

「了解つす」

真田さんの問い合わせに答え。天田、麗奈と共に切株のような入口に歩いて行つた。

Episode 12 恋愛の庭カイーナ

切株を抜けると奇妙な光景に出会い。

コンクリート質の床と壁が廃墟を連想させる

適当に進みながら周囲を見渡し、口々に感想を漏らす。

「うーわ…予想外だね」

「…何か気味悪い」

「うーん、タルタロスよつもマシか…」

上から瞬、麗奈、乾である。

『三人共お喋りは良いが…そろそろ来るべ』

真田の注意と共に周囲からグチャグチャ音が聞こえて来る。

前方からシャドウ反応。注意してください

「やつとお出ましか…」

「…ゴクコ」

「せつと来いや」

敵、後三秒で接触します…3・2・1…敵 来ます！

風花さんのアナウンスの後に田に入ったのは、黒い固まりに青い仮面が付いた変な奴だった。

「えーと…なにこれ?」

「何つてシャドウだ

「ああ～…違う意味でショックだわ～」

「卅年のマーヤだから」

「マーヴル?」

「あれだよあれ」

天田が指指しながら説明する。

「どんな奴なの？」

「シヤジカの母で一番『マハラギオン』……弱い」

「あれ…消えちまつた。弱つ」

マーヤタイプは弱いです…臆病のマーヤはその中で一番弱いで
すから

「……無駄に魔力使つた」

「一桁階はザコだ一気に行くぞ」

「あいあい」

55

敵、狂愛のクビト三体アルカナは恋愛です

「やつから言つてゐるが…変な外見してんじゃね———！」

「弓か… 撃たれる前に打つ！」

「先手必勝ですね」

「…私、出番無いや」

{ 10 F }

敵、死甲蟲二体アルカナは皇帝です

「やつとまともなのが来たぜ」

「あんまり調子乗つてると「わーっ！」…大丈夫か～？」

「…あまいぜ虫けら、その角貰つたーーー！」

[G y a a a a]

{ 15 F }

「ん? 何だ……鳥?」

えーと…ブラックレイブンですね。アルカナは隠者

「鳥だな」

「真田さん…カタカナにしましょうよカラスって」

カラスに反応したのか攻撃して來た。

「クアア――――！」

「うおー！キレたー？」

魔力を感知…アギラオですね

「あら？…心なしか俺の方を見てるんですけど」

〔ギャーーーー〕

「やつぱりかーーー！」

火の玉が飛ばされたが瞬に当たる前に消える

「悪いけど…火炎効かねえんだよ」

言葉の後に跳躍し、ブラックレイブンを真つ一つに叩き割る。

お疲れ様です。それと…5階上に強力な反応があるので注意してください

「強力な反応ね…さつさと倒して戻るわぜ」

「…山岸。今5階上つて言つたな」

はい、そうですけど…どうかしました？

「忘れたのか？確かに20階には…

最初の が居る」

ちょいと“影雪子”参照

～怨嗟のカイーナ 19F～

「…やつと付いたな」

「ええ…」

「途中、カブトムシやらカラスやら…はたまた幽霊みたいのに邪魔されただけど」

「あんなのは序章に過ぎん。本番はこいつからだ…

「気合を入れて行くぞ!」

「　「　「おおおーーー..」」

リーダーの掛け声と共に、俺達は階段を駆け上がった。

～20F～

そこは今まで以上に静かで薄気味悪い。

この氣味悪さの正体が何なのか分からぬまま廊下に酷似したフロアを進む。

先程のシャドウとは違う…もひとドロドロした、そう

まるで人間の畏怖のよつた…

Episode 13 漆黒の女神

少し進むと壁に突き当たり、そこには緑色のオブジェが建っている。

「真田さん、何すかそれ？」

「これか？唯一の移動手段だ」

オブジェの足元をいじりながら説明する。

「何処かにスイッチが有るはず何だが…

有里はこの辺をいじつてたな」

「あの…真田さん？」

「まあ待て、今スイッチを…ん？思つたより上だな。これなら立つた方が早…？」

装飾が邪魔して届かないだと…くつそれで足元からか

「あの、真田や」「やつとしておひへ…うそ

（10分後）

「…………やつと付いたな

「めつちや時間食つてゐるぢやないですか」

「じょ……じょつかないだらつ……こじるのは初めて何だ

「」「…………」「」

「あつ、わ、うひ……それよつ氣付いてるか?」

静かに肯定する俺達。今、皆の視線の先には連絡橋の先に有る扉と立ち塞がるよつて回転する一枚の

ペルソナカード

『あらーーー誰かと思つたらあんたじやない』

「イシュタル!-?」

「何かヤバ氣だな

「僕らも行つた方が…」

麗奈の元へ行こうとする一人を真田が止める。

「真田さんー?」

「どう見てもヤバいぜあれは…」

「…一人共手を出すな」

「どうして…あのままじゃ…」

「…何か有るんすか?」

「ああ…このは自分で乗り越えるしか無いんだ…自分で乗り越える
しかな…」

「真田さん…」

『うーんちょっと違うかなー私は（アルケー）イシュタル…もう
一人のあなたよ』

「…もう一人の、私？」

『そ、もう少し詳しく言つと…あなたの影よお姫様』

「…私の影?どうこう事?」

『言つたでしょ影だつて、欲望、願望、嫉妬、怨み…みんな引き
受けるあなたの裏方。故になーんでも知つてる』

「…何が言いたいの?」

『あなたはずつと待つてた…寂れた都市から私を連れ出してくれる
王子様を』

「……何を言つてゐるの？」

『退屈な日々、変わらない日常、こんなつまらない毎日なんでもう嫌』

「……違ひ……そんな事……」

『でもあの日私は変わった……だって王子様が来ててくれたから』

「……違ひ……」

『でも、王子様は私を連れ出してくれただけ……また退屈な日々に戻つちやう』

「私……そんな事」

『それで私はまた期待するの今度は一人の王子様が私を連れ出してくれるのを』

「思つてない……」

『自分に正直に成りなさい、いくら言葉で否定しようが心は否定出来ないわよ』

「確かに心の何処かで期待してたのかもね。でも、今はそんな事」

召喚器に手をかけ一気に引き抜いた。

「思つちゃいない！！』イシュタル』

「姫さん復活つてか？」

「無事乗り切つたみたいだな」

「早く行きましょー…さすがに一対一はきつこ」

「ああ…やうだな！」

『私に逆らつ氣？良いわだつたら…力付くで認めさせぬまで…！』

イシュタルの咆哮と共に黒い球体が飛んで来る。

「（…できるだけ避けて、消費を抑えて攻撃する）イシュタルつ『メギドフ』ッ…！」

『へいえ、「マハジオンガ」アアアアア…！…』

広範囲に電撃を放つてくる

「（ギリギリまで引き付けて…避ける…）お願ひ…『メギドフ』」

『ちよこまかと…田障り何だよおおおお』

黒い衝撃波が周囲に放たれるが…

実際、今の彼女にはこのくらいの攻撃を交わすのは十分余裕だらう…

「（大丈夫、やつきみたいに行けば…避けれん…）」

気が緩みさえしなければ…

「 デッ 」

えつ?

「 ぐつ……（右足引つ掛けた）」

『 やつと捕まえた、お姫様…さあ、死にな…』

動けない彼女に一本の雷が放たれる。

「 ……（駄目、この足じゃ避けれない）」

彼女が諦めかけた時…

「 パアアアン 」

「俺を忘れてもらひつちや困るな」

「 その台詞良いつすね 」

電撃が弾かれた。

「 真田さんー、瞬一ビリして… 」

「俺らだけじゃないぜ」

「えつ？」

「『イノセントタック』」

「女の子を虐めるのは、良い趣味とは言えませんね……」

一
乾！

一出たな、エセ紳士

細々ても無いじ
せじ無いじ

おおこじや失敬上

卷之三

「なーに、人間誰しも心ん中に影くらい有るさ…でも問題は影がある事じやなくて、影とどう向き合つかじやねーのか?」

瞬

「何だ今日は真面目だな」

「俺だってたまにはカッコイイ事を言いますよ」

「ふつ……さてメインディッシュが残ってるか？」

「……んで俺に叫つかすか？」お姫様で良いでしょ

「……それ恥ずかしいから止めて」

「で……食べる？ 食べない？ もうだー！」

「……私が元凶何だし責任とるね」

足を引きずりながらゆっくり歩き の前に立つ。

「……私の都合で作り出したくせに、私の都合で消しちゃうなんて、自分でも理不分明だつて思つてゐる」

『なにか元凶』

「でも、これだけは……たとえ此処であなたが消えても私があなたを消さねー」

『……』

「私の中でずっと一緒になる……今度はもう拒絶したりしないからー！」

「だから、今は……安らかに眠つて」

『やつ……期待してるわ……』

イシュタルは光りの粒子に成り西条麗奈の体に戻った……

フロアに光りが差し込んで来る…

周囲が徐々に明るくなるにつれ彼女の顔も何処か明るく見えた…

何か駄文の雰囲気

第一章 月光館学園編 Episode 14 偽りの疑心

昔誰かが話してた…

「…………んつ…………」

それは、誰だか知らないが…

(…………此処は?)

誰しも一度は聞いた事が有るだろ?…

(…………えつ……)

目の前の光景に絶句する…

見慣れた建物は崩れ、所々赤い血の様な液体で汚れ、目の前には奇妙な建造物が建っている。

…〇〇の日に夢を見ていけないって、なぜならその時見るのは…

緑色の月明かりが辺りを照らす、ふと足元に何かが過ぎる…

「……えつ……そんな……」

そこにあるのは…

精氣の無い腕と、見慣れた腕章…

血塗られた災厄の夢

「イヤアアアアアアア」

第一章 Episode 14 偽りの疑心

「……わやん……奈ちやん」

誰かによつて掛けられる声に飛び起める。

「ハア……ハア……風花さん?」

「大丈夫? ずつとひなされてたけど」

「ハアー……えと、はー。おかげさまで」

麗奈は風花が持っていた水を飲み一息付いた。

「ならよかっただ…麗奈ちゃんねー」こうなされてたから。

よければ、話しぐよ?」

「……いえ、大丈夫です

仲間が死ぬ夢なんて)

「そう……なら朝ご飯用意してあるそつだから行け」

「えと…あつはい」

麗奈はラウンジへ引つ張られて行つた。

卷之三

「おせよハリゼニモ……何コレ」

「知らん」

「うわっ！…何だ瞬か、びっくりさせないでよ」

「……お前が勝手にびっくりしたんじゃねーか。人のせいにするな」

「いきなり声掛けるのが悪いんでしょーー」

「ああ、わいこ。……とりあえずお前、邪魔だぞ」

「えつ？」

頷きながら瞬の後ろを見ると何人かつつかえてた。

「...」のんなたー！」

麗奈は逃げ出した……

「さて…全員揃つたか？」

「んー……順平と凌辱がいないな」

あのバカ共！」

水無月 伊繩はどこへいた？

「あ～…えと、起こそうとしたら枕抱いて「チドリーン」って幸せ
そうな顔で咳いてたんで置いてきました」

「明彦、凌辱はどうした？」

「夜中にいきなり、岳羽達の名前を呴きながら出て行つたつきり帰つて来なかつた」

.....」

「ゆかりさん…仕留めたんすか？」

「えつ……あ……いや?」

((((仕留めたな))))

「なつ…何よその田線」

「いや、あの色欲魔人を倒すなんて…さすがゆかりさん

「まあ…自業自得だがな」

その時、扉の外から騒がしく例の一人が入つて來た。

「急げ凌辱! 朝飯食いつぱぐれつぞ」

「待つてよ順平…朝食でそんな急がなくとも」

「バカヤロー! 桐条財閥の朝食だぞ。前みたいに豪華に違いない…
よつて食わなきやも! グシヤツ! 」

勢いよく飛び込んで來た順平の顔に真田の拳が減り込んだ。

「ん? あースマン!」

「さ 真田さん…何故…裏拳」

順平は崩れ落ちた

「順平…………」

「背中越しに寒気を感じたんでな、つい

「反射的に裏拳放つハジハヒ…」

ピクピクしながら床に伸びてる順平を見ながら瞬が呟いた時…

「お前は『ゴルゴかーー』

一人の勇者が居た

(((真田さんにはシシ ハンだー)))

「れ、麗奈ちゃん? 今シシ ハンのはまちゅうと…」

「えつ?」

「今は駄目だら」

「……」

「シシ ハン入れるなら順平さんが崩れた時だろ」

「あつ… あつか」

「へ、そつちかよーー」

「あつ順平さん」

「遅いお皿覚めですね」

「つか真田さんこシシ ハンなつてのを注意したんじゃねーのかよー」

「こや… だつて」

そつちか順平の後ろを指す。

「なあ明彦…「ゴルゴ」とは何だ？」

「確かに何かの漫画だつたが…詳しく述べは知らん」

「…何で「ゴルゴ」分かんねーんだーーーーー！」

「ちよっと順平…落ち着きなさこよ」

「順平さんストップ！ー！」

「天田！一緒に抑えるぞ」

「わかつた！」

…ソラして騒がしく時間が過ぎて行つた。

「つーか…俺、朝飯食つてねーーーーー！」

第一章 月光館学園編 Episode 14 偽りの疑心（後書き）

つなぎの文章の良い書き方が分からん…

いつも水素です。

とりあえず久しぶりな更新のお詫びとこれからもちょいちょい遅れるよ…って言う報告、そして今日未明感想にて報告されたりョウジのじの字が間違っている点について。

本来「凌時」

現在「凌辱」×

本来ならここで修正作業に入るのでショウガビも……

生憎と時間がなく。

この「凌辱」もリョウジと読める事、それと都合良く「生を返らした」設定になつていいため……

家の凌時君は凌辱君 のまま行く事にしました。（笑）

以上水素でした。

「そういうや凌辱お前何で廊下で寝てたん?」

「ん~…それなんだけどよく覚えて無いんだ」

「…よく覚えて無い?」

「うん昨日のテレビで、やつてた寝起きドッキリ再現しようとして

…」

「狩られた訳か…」

「…瞬君?言葉が間違つて無い?」

「あれ? そうですかね?」

「お前達、その辺にしろ…「コンコンッ」来たか」

「お嬢様、朝食の準備が出来ましたのでお持ちしました…」

「分かった、入ってくれ」

古風な木製のドアを開け大小様々なトレーを持つたメイド達が入って来る

「失礼します…本日の朝食はポーチドサーモンとミントサラダをご用意しました。

付け合わせはトースト、スコーンとカンパニュが焼けてあります
がどれになさいますか?」

「そうだな…スコーンを頼む」

「次にモーニングティーですがセイロンを、ティーセットはウエッ

ジウツチの蒼白だ」用意致しました

「…良し番りだ」

「では、『おひつじ』…」

メイド達は下がつて行つた。

「　　」

「…どうした？食べないのか？」

「…えつ？」

「今のは話…何？」

「料理の説明が何かでしょ？うか？」

「いや、そりや分かるよ天田」

「いやーそれにしても桐条先輩マジもんのお嬢様なのね…」

「桐条財閥の社長ですからね」

「前から思つてたけど…社長になれる余計に思つりますやうだよね
「わよつとゆかりーー！」

「うわっちゅー……すこませんー！」

だが当の本人からのお咎めは無く、不思議に思つたゆかりが頭を上
げると…

「あつこれ皿につすね」

「うちのちのもイケるぞ水無月」

料理をぱくつく馬鹿一人が居た。

「えつ…ええ」

「おお…」この雰囲気で普通に食える奴が居たとは、「あの一人には礼儀つて物が無いんでしょうか?」

「二人共少しば遠慮したら…」

一
レキシヨン

「美鶴が言うんだ良いだろ」

それは食ねた言ふことは無むか

「…何で俺が怒られなきゃ」

「…」此處まで来て駄々」ねの止め拂ひよ」
レサ

床に正座させられている二名（馬鹿？＆筋肉馬鹿）はさておき、テープルでは談話が繰り広げられていた。

「あっここのスコーン美味しい」

「ええ！手作り！！どれどれ！」
「よね？」

「済まないが凌辱今回は無いんだ」

「ええ～… 美鶴さんの手作り～」

「プツツ… 凌辱、お前凹みますわ」

「フフツ 何か凌辱看見てると学生の頃思い出すな…」

「あの時は楽しかったよね～… 順平が騒いで、先輩達に怒られて」

「おこおこ、俺だけかよ」

「ねえねえ順平」

「お？」

「前來た時は何してたのを」

「そりゃあ… 夏だったから海だろ」

「…ふんふん、なるほど」

「そんなん聞いてどうすんだよ？」

「いやせつからくだから、前と同じ事したりどうかな?」

「前と同じ?」

「そ、過去の思い出振つ返りましょー」

「あつそれ良いかも!」

「ええちゅう… ゆかりちゃん?」

「あれ? ゆかりっちがノリ気なの珍しいな… つてちょい待つた!!」

「? 何よ順平」

「お前ら今の時期分かってんのか? 二月だぞ、二月一・初日には俺が死にかけたの忘れたのか?」

「大丈夫よそんくらい…ねつアイギス?」

גַּתְתָּה... גַּתְתָּה

ପ୍ରକାଶକ

「えと… もうきゅかりに言われてサーモグラフで外見てみたんだ。

「何か怖いんだけど」

「海水温とその周辺の温度値が上昇してゐる」

גַּם־

「ちよつと違うかな？」

第三回

「砂浜に高エネルギー反応があるの」

土下座組

「ビクッ！」

「どうした水無月一

「いや、何でも無いです」

反対側

[ג']

「？」

「どうしたの？」

「今、ローマルの耳が一瞬…」

談話組

「エネルギー？何でそんなもんが」

「多分、ここ何田かに誰かが海に向かってエネルギーを放つたとか…」

「そんな事…出来んの？」

「普通は無理だけど…」

「けど？」

「ペルソナの力なら簡単に出来る」

「えつじやあ…」の中の誰かがペルソナを使つたって事ですか？何のために…？」

「さあ、そこまでは分かつて無いの」

「そのエネルギーのえと…種類とか調べれば誰のペルソナか分かるんじや…」

「うん、そう思つて調べてみたんだ。そしたら…」

(あれ…「」の空氣まづくね?)

土下座組

「？ どうした水無月？ さつきから変だぞ？」
「いえ……今まで土下座してれば良いんだろうと」
「ふむ、確かにな……」

談話組

「……それは？」

「火炎、つまり火のペルソナね」

「火つて事は……」

ほとんどの視線が一人に集まる

「……」

「瞬君……」「水無月……」

「さーて……散歩にでも行つか！」

「ワンツー！」

「Let's go……待て……！」

誰かに後ろから羽交い締めにされる

「ここ数日何してたの？」

「あの……西条さん？ その声怖いな……アハハ
「私、何事も内緒にされるの嫌いなの」

締め付けがきつくなる

「背中に何か当たるんですけど…」

「そんな事どうでもいいの」

「……」

「……」

「ロロマル先に行け

「ウオウー」

「ロロマルは逃げ出しちゃったが…

「はー」「ちかひかひかね」

「キュー」

ゆかりに抱えられ連れてかれた

「合体奥義? あんたらそんなやつってたの?..?」

「そんなん言つなー男のロマンだー。」

「ワンショーン」

「…俺はいつまでもこのまま?」

「ひつしないと逃げるでしょ?」

「まっさかーそんな事しませんぜ?」

「じゃあ何で体が前に動くのかな?」

「さあー?」

「あの二人、逃げるのを止めるつて言つよ？」

「後ろから麗奈ちゃんが抱き着いてジャレてるよ」としか見えない

「だが、重心の動き方とかは間違いなく逃走者と捕獲者のそれだ」

「へーそりなんですか…うう、全く分からぬ」

「でも何でそこまで？」

「まあ、おやぢく…意地の張り合いだろ?」

説明組

「ワンツ、ウォン」

「なるほどあなたたち三人の魔力を…」

「で、どうよアイちゃん? 成功率何%?」

「…約60%だね」

「えつ…何その微妙な数字」

「だがこれが成功すれば我々の火力不足を改善できるかも知れない

…」

「あれ桐条先輩…あんま驚かないんすね」

「ん? ああ水無月から聞かされていたからな」

「なんだ、伝えてたんかあいつ……てっきり怒られるかと」

「……それはそうと実物を見ないと何とも言えないがな」

「えつてことは……実演会?..」

「どうだ水無用?..」

「……俺的には反対ですね」

「ええ～何でだよ」

「まず、成功率がそんなに高くない事、次にこの技を使つと温度が上昇する事」

「一つ目は分かるけど、二つ目は何で?..」

「俺らの技は属性が火炎のため必然的に周りの温度が上がる。そのため俺らも含み周りの者は水着になる必要がある」

「それが何?普通じゃ……まさかあんた初なの?珍しくだらねえ事言つてんじゃねえよ……ならせつきの時に鼻血でも出して倒れてるわなつ／＼あれば……「離さなかつたのはそっちだろ……まあ俺的にラツキーだつたけどねえ」

「……／＼」

赤い顔で睨みつけてくる麗奈

「……続けるやつ。で、そつなるとだ一名集中が途切れの人人が出て来

る

「…………」

「…………」

「順平さん……」

全員（主に女性陣）の目が順平に突き刺される。

「何その哀れみを含むような視線は…予想してました的な空気は…見んなよ、俺を見んなよ」

「…………まあそれで失敗する確率が上がると。それでも良いならやりますけど」

「とりあえず一度見てみないか？」

「そうですね」

「ひじで一行は砂浜に向かつた

水着に着替えて外に出るところは…

太陽の光を反射しキラキラと輝く砂浜。

透き通るほど透明度を誇るエメラルドグリーンの海水。

そして…

今の時期を忘れるほどビの気温。

此処に来た人々は決まっていつ漏らす…

「……暑い……」

と……

瞬「おいおこ何だ」の気温今二円だぞ

天田「いへり屋久島でも……これは

真田「異常だな」

「キューーん……」

男性メンバーのほとんどが意氣消沈している中…

順平「前の良かつたが……やはり成長期を過ぎた完成体が気になる」

凌辱「完成体!？」

約一「名は元氣だった。」

天「何でみんな元氣なんでしょう……」

真「さあな」

瞬「ああ……海入りて……つか口陰から出れねえ」

「キューーン」

「お待たせー……って暑つう何これー!?

順「まず最初は西条選手ー女子高生とは思えない素晴らしいボディです」

麗奈「…何あれ?」

瞬「やあ?熱にやられたらんじやね?」

麗「ああ…なるほど」

「うわほんと夏みたい…」

順「次は岳羽選手…やはり普段から絞っているのか?あのウエストは健在です!」

岳羽「此処のテント使って良いの?」

瞬（スゲー完全に無視った）

真「良いんじゃない?」

「あれ?データよりも暑いんじゃないアイギス?」

「うーん… そうかも」

順「おおっと… 次は山岸選手とアイギス選手両名の登場です。山岸選手はパソコンを持ったまま、アイギス選手はワンピースとこう少し変わった姿にそそられまーす」

風花「…………えと」

アイギス「…無視よ」

岳「お疲れ」

瞬「海辺にパソコンって大丈夫ですか?」

風「ああそれなら… いろいろ改造してあるから大丈夫（そのくらい当然でしょ~）」

瞬「… 改造ですか

（あなたのは改造とは言えないでしょ… ビーチやつやそんなモンスター・マシンが出来んだよ）

風「そう。改造… 瞬君もやつてみる？ やるなら教えるよ…（あなたも同類でしょ？ やり方くじー…）」

瞬「あー、じゃあ帰つたら是非

（一緒にしないでくださいよ。俺はあんたみたいな化け物じゃない）

「

風「そう、なら帰つたらね。（酷いわね人の事を化け物だなんて… まあ良いわ、気が向いたらまた話しましょ）」

天&麗「……」

順「そして、取りを勤めますのはやはりこの人！桐条先輩だ！！！」

「ん？なんのことだ？」

岳「やつぱり先輩綺麗～」

風「ほんと羨ましいな～」

桐条「そつそうか？」

順「さて凌辱さん全員の入場が終わりましたがどなたが好みですか？」

凌「うーんそうだね…岳羽さんも良いけど美鶴さんもね」

順「なるほど…よつしーのままの空氣で水浴びトヨモー！」

瞬「止めなくて良いんすかあれ？」

真「ほつとくのが一番なんだが…」

天「あの…真面目に誰か止めた方が」

麗「じゃあ私が「チャキ」」

そう言い召喚器を構える麗奈

瞬「までまでまで……」でメギドを撃つなー砂浜消し去るつもり
「ガルダイン！」か…

海の方に田を向けると順平達だけ綺麗に倒れてる

岳「たくいい加減にしろっての」

瞬「お疲れ様です！姐御！…」

岳「えつ？ちよつ…」

瞬「ほらっ天田ーお前もだ」

天「ええ！？」

瞬「すいやせんね全く」「カチャ」とりあえず止めようか…イ
エッサー

桐「…そろそろ初めたいんだが、良いか？」

瞬「あっすいません」

砂浜の中央に一人と一匹を残しテントに非難した特別課外活動部

瞬「…さーて、いつちよります　か」

一気に空氣に殺気が混ざり独特な粘り気を生む

瞬「先に言つときますが..失敗は許されませんよ」

順「お...おひ」

「.....」

「ロロマルは真つ直ぐな田で見詰めてくる

瞬「うつし..初めますかね」

「ロロマルを挟み込むように立つ順平と瞬そして同時に引き金を引く
.. 撃鉄の小気味良い音が虚空中に響き三体の虚像が浮かび上がる

それぞが火球を繰り出しまるで重力場に引き寄せられるかのように
に集まつていく..

集まつた炎は捻れ歪みそれ自体が生き物かのように周囲に暖かな光
を撒き散らす。

それに見取れているのだろうか..不意に静まり返つた砂浜に一筋の
遠吠えが響く

刹那、一時の暖かさを忘れ凶器と化した熱線が空へと突き抜けた..

第一章 月光館学園編 Episode 15 過去と現在（後書き）

合体技のイメージは真・女神転生?の「マグマ・アクシズ」をでつかくした物だと思ってください。

第一章 月光館学園編 Episode 16 “彼”（前書き）

勉強の合間にちまちま書いた物を合成、投稿。

一通り確認しましたが漏れが有るかも知れません。

空に上がる閃光を見て私は何を思つてゐる？

皆一様に驚いてゐる

「これは…凄いな」

真田さんが代表した様に眩いたけど私には聞こえなかつた。変わりに別の言葉が心に浮かぶの…

『…なんで』

その言葉が浮かぶことに一つの感情に押し潰されそうになる

『…なんで』

私は今どんな顔をしてるのかな？

悲しんでる？悔やんでる？

…こんな事思つたつゝで、どうもならない事ぐらご分かつてる

でも思わずにはいられないの…

なんで君は彼を知らないの？

なんで君は彼と一緒にいなかつたの？

なんで君は彼と…私と一緒に、戦つてくれなかつたの？

『君があの時居てくれたなら…』

頭では分かつてゐる…例え君が一緒でも には勝てない事ぐらい

例え道のり（過程）を変えた所で、ゴール（結果）は変わらないって

だけど、私の気持ちは…変わったかも知れない！

もつと抗つてほしかつた…

最後まで一緒に戦つてほしかつた

もつと皆と一緒に生きたかつた

君一人増えた所で何も変わらないかも知れない…けど…もし変わつたとしたら！

私は今、此処にはいなかつたのに…

『…………』

知らず知らずの内に座り込んでた私、周りを見ても何も無い。そこ
かしこに闇が広がるだけ……でも今の私にはちょうど良いかな 皆
の顔なんて見れそうも無いし。それに、私の存在理由が解つたから…

「……ちゃん」

唐突に音が響く。「これは……声？誰を呼んでるの？呼んだって無駄
よ、此処には私しかいないの。それに、私はこの声に答えられない。
答えを知つた今、私にはどうする事も出来ないから…

「…奈ちゃん」

私を呼ぶ声が大きくなる。誰？誰が私を呼ぶの？もひ…止めて！呼
ばないで！…私にはまだ…

「麗奈ちゃん！」

「…風花…さん…あれ？砂浜…」

気が付くと闇は消え、砂浜に戻つている。今のは何？幻覚？夢？…
…きつとどれも違つ、違つて言えるだつてあれは…

「ちょっと大丈夫？顔色悪いよ」

「あつゆかりさん……とりあえず大丈夫です」

「もう、急に顔色変わるから心配したんだから」

「あはは…すみません」

周りを見ると皆心配相に私を見てるのが分かる。

「少し休めば良くなりますから……」

「少しつて……無理しないでちゃんと休んだ方が良いよ?」

「山岸の言う通りだ……西条少し休め、それにこんな所じゃ十分休め無いだろ?……良し客間に開ける様手配しよう」

「えつ……い、良いですそんなん」

「何、たいした手間じゃ無い。それに、人の好意には素直に甘えて

ほしい物だ」

「……はい」

美鶴さんに言ごくるめられ、客間に向かうため立ち上がると視線を感じたの。反射的に振り向くと件の三人がいた

『今の……』口ちゃんは有り得ないから順平さん?それとも、瞬?』

「……」

「いつまで突つ立つてんのさ」

「天田……あいつ変じや無かつたか?」

「あいつ?……麗奈のこと?そりや具合悪いんだから」

「いや、そーじや無いんだが……悪い、俺の勘違いみたいだ」

「そ?じや行ひよ、もつ皆戻つちやつたよ」

「……ああ」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8726/>

Persona 3 F ~After Days~

2011年5月12日02時15分発行